

はじめてみよう！

図書館サービス・スタートブック



はじめてみよう！

図書館サービス・スタートブック

2012/2013年度
パブリック・サービス研究分科会

2012/2013年度 私立大学図書館協会東地区部会研究部

パブリック・サービス研究分科会

はじめに

●背景・経緯

私たち私立大学図書館協会東地区部会研究部パブリック・サービス研究分科会は、主に大学図書館職務経験1年目から10年目の職員を対象に、利用者サービス（パブリック・サービス）に反映するような図書館員の育成・養成、図書館全般の知識・技能・感性の取得を目的として活動を行っています。

2012/2013年度のテーマは「はじめてみよう！図書館サービス・スタートブック」とし、昨今の大学図書館では、飲食スペースやラーニング commons の設置、選書ツアーなど、多様化した利用者のニーズに応えるべく、新しいサービスが行われてきている、といった背景の中、これから新しくサービスを始めるとき、これまでのサービスを改善したいときに、大学図書館職員に参考となるようなハンドブックを作成することを目標としました。講義や図書館見学などから得られた、特色ある取り組みやサービスについて、それぞれの図書館における特徴的な要素などを抽出し、一目でわかる事例・提言集『図書館サービス・スタートブック』（冊子版・web版）としてまとめたものが本冊子となります。

●4つのカテゴリー

スタートブック作成にあたり、今期の会員が今後開始や改善を考えていて、特に研究していきたいサービスについて、次の4つのカテゴリーに分け、スタートブックを作成するための調査項目として設定しました。

- (1) 空間を活用する
飲食・会話可能エリアの設置、館内のゾーニング、快適グッズの貸出など
- (2) 学生と協働する
学生ボランティアや学生サークルによる学習支援活動・読書推進活動など
- (3) 教員と協働する
授業との連携、講演会・イベントの開催、教員おすすめ本の紹介など
- (4) 他部署と協働する
キャリア関連部署や学習支援部署、他大学・他機関との連携など

次項以降の調査においては、今回は便宜上、上記4つのうちのいずれかにサービスを当てはめました。他のカテゴリーとも深く結びつき、連携のあるサービスがありますことをご了承くださいますようお願いいたします。

●ホームページ調査

次に、事前調査として全国のすべての国公私立大学図書館を対象としたホームページ調査による情報収集を行いました。

調査内容は、全国の各大学図書館ホームページ上での前述した4つのカテゴリーに該当するサービスの抽出です。調査時期は2012年9月から10月にかけて行いました。

この調査結果をもとに、スタートブックの紙面の基となるサービス事例調査と、実際に足を

運んで見るということで、空間を活用したサービスを中心に図書館見学を行いました。

●サービス事例調査

ホームページ調査より、特に詳細に聞いてみたいサービスを選出し、以下の通りサービス事例調査を実施しました。調査票を作成する際は、会員の所属館で模擬調査を実施したり、出来る限り選択式の質問となるようにしたりと、回答者の負担にならないような分量や内容にするよう考慮しました。

スタートブックで取り上げたいと感じたサービスを複数実施している館には、サービスごとに複数回答をお願いすることになってしまう点や、サービスを始める際のヒントとして図書館員の参考となる冊子となるよう、細かなこともお伺いすることになる点など、依頼館へは手数をお掛けいただきましたが、多くの館にご協力いただきました。

また、調査を依頼したサービス以外の事例についても複数ご回答いただいたり、サービスの模様や館内の様子が見分かる画像を複数お送りいただいた館もありました。心より感謝申し上げます。

[調査概要]

調査対象：74館 91サービス

有効回答：50館 60サービス（参考回答：9件）

回答率：67.6%（館）、65.9%（サービス）

調査時期：2013年6月末～7月末

配付方法：対象館へ調査票送付、パブリック・サービス研究分科会ホームページへ調査票掲載
<<http://www.jaspul.org/pre/e-kenkyu/public/>>

主な質問項目：

- ・サービス概要（内容・対象者・実施期間など）
- ・開始のきっかけ
- ・開始にあたっての準備（内容・広報・費用など）
- ・苦労したことや工夫したこと
- ・始めてよかったと思うこと
- ・今後の課題
- ・今後同様のサービスを始める他大学図書館職員に向けたアドバイス

ありがとうございました！



●図書館見学

スタートブックの4つのカテゴリーに沿った特色あるサービスを実施している館や施設を備えている館の中から、大学・公共図書館8館の見学を実施しました。

以上の2年間の研究活動成果をまとめた本冊子をご協力いただいた方々をはじめ、より多くの図書館職員の方々にとって有用な情報としてお役に立てただけましたら幸いです。

目次

1. サービス事例集

1.1 空間を活用する

| | |
|-------------------------------|----|
| 金沢大学 — ブックラウンジ・カフェ | 8 |
| 関東学院大学 — アクティブ・ラーニングの空間 | 10 |
| 相模女子大学 — ラウンジ | 12 |
| 相模女子大学 — 和室（閲覧室） | 14 |
| 芝浦工業大学 — 和室閲覧室 | 16 |
| 創価大学 — 飲食可能なブラウジングルーム | 18 |
| 高松大学 — 飲食可能「ホットコーナー」 | 20 |
| 東海学院大学 — 昼食時間帯に飲食可能な施設（BGMあり） | 22 |
| 北海道大学 — くつろぎの空間メディアコート | 24 |
| 室蘭工業大学 — ゾーニング及び飲食ルール | 26 |
| 室蘭工業大学 — 各種グッズの貸出 | 28 |
| 明治大学 — 館内のゾーニング | 30 |
| 和光大学 — イートインスペース | 32 |
| 九州看護福祉大学 — 喫茶スペース | 34 |
| 成蹊大学 — 飲食可能なリフレッシュエリア | 35 |
| 広島修道大学 — コーヒーラウンジ | 36 |
| 和洋女子大学 — 畳コーナー | 37 |

1.2 学生と協働する

| | |
|------------------------------|----|
| 創価大学 — 全学読書運動 Soka Book Wave | 38 |
| フェリス女学院大学 — 読書運動プロジェクト | 41 |
| 桜美林大学 — 読書運動プロジェクト | 44 |
| 嘉悦大学 — 図書館学生スタッフLiss | 46 |
| 白百合女子大学 — 図書館ピアサポーターLiLiA | 48 |
| 南山大学 — ティーチング・アシスタント | 50 |
| 広島女学院大学 — 学生ボランティアへの単位付与 | 52 |
| 法政大学 — ライブラリーサポーター制度 | 54 |
| 立教大学 — ラーニングアドバイザー（LA） | 56 |
| 立命館大学 — 学生ライブラリースタッフ | 58 |
| 和光大学 — Let's Read Project | 60 |

| | | |
|-----|---------------------------------------|-----|
| 1.3 | 教員と協働する | |
| | 学習院大学 — アカデミック・スキルズ | 62 |
| | 神戸学院大学 — レファレンス・デリバリー | 64 |
| | 神戸芸術工科大学 — ビブリオテイクレクチャー | 66 |
| | 静岡産業大学 — Salle de Génie モーニングカフェ | 68 |
| | 千葉大学 — リエゾンライブラリアン | 70 |
| | 名古屋外国語大学 — ブックトーク | 72 |
| | 阪南大学 — おすすめの一冊 | 74 |
| | 法政大学 — リエゾン・ライブラリアン | 76 |
| | 明治学院大学 — レポートには、書き方がある | 78 |
| | 明治学院大学 — 校外実習報告展示 | 80 |
| | 目白大学 — 読書推進プログラム | 82 |
| | 和光大学 — 『本を読もう!』『本を楽しもう!』 | 84 |
| 1.4 | 他部署・他機関等と協働する | |
| | 愛知医科大学 — めりーらいん健康支援事業 | 86 |
| | 愛知県立大学 — 共同図書環 | 88 |
| | 旭川医科大学 — 本を読もう! キャンペーン AMUL77 | 90 |
| | 帯広畜産大学 — 蔵書交換展示会 [参加事例] | 92 |
| | 近畿大学 — 中央図書館利用者アンケート | 94 |
| | 神戸学院大学 — 図書館留学 | 96 |
| | 九州地区大学図書館協議会 — Library Lovers' キャンペーン | 98 |
| | 国際基督教大学 — ライティングサポートデスク講演会 | 100 |
| | 創価大学 — CETLによる学習支援 | 102 |
| | 帝京大学 — 共読ライブラリープロジェクト | 104 |
| | 日本女子大学 — 卒業生による図書館友の会 | 106 |
| | 新潟青陵大学 — ヨム得 | 108 |
| | 二松学舎大学 — 『就活』に役立つツールの活用法を教えます! | 110 |
| | 広島市立大学 — いちだい知のトライアスロン | 112 |
| | 広島修道大学 — 図書館でシューカツ!! | 114 |
| | 明治大学 — 授業分類システム | 116 |
| | コラム① ドイツ人が考える「快適な図書館空間」 | 118 |
| | コラム② 学生とイラストでコラボしてみました! | 118 |

| | |
|---------------------|-----|
| 2. 見学レポート | |
| 千葉大学アカデミック・リンク・センター | 120 |
| 東京女子大学図書館 | 122 |
| 武蔵野プレイス | 124 |
| 帝京大学メディアライブラリーセンター | 126 |
| 明治大学和泉図書館 | 128 |
| 芝浦工業大学豊洲図書館 | 130 |
| 和光大学附属梅根記念図書・情報館 | 132 |
| 相模女子大学附属図書館 | 134 |
| | |
| コラム③ 24時間開館を導入して | 136 |
| コラム④ 始めることに含まれるもの | 136 |
| | |
| 3. まとめ・提言 | |
| 空間を活用する | 138 |
| 学生と協働する | 140 |
| 教員と協働する | 142 |
| 他部署・他機関等と協働する | 144 |

編集後記

凡例

1. 図書館基本情報は『日本の図書館』2012年版（日本図書館協会）より引用した。（学生数＝奉仕対象学生数、館員数＝職員数、蔵書数＝蔵書冊数）
ただし、各大学より希望があった場合は、提供された情報を掲載した。
2. 図書館基本情報はサービス実施館または回答館の情報を引用し、キャンパス名を記載した。
複数キャンパスがあり、キャンパス名の記載がないものは、全学合計数を引用している。
ただし、住所及び電話番号は本館（中央図書館）の情報を掲載した。
3. サービス事例集は2013年6月末～7月末時点のアンケート調査結果である。
4. アンケート回答が「不明」または無記入の項目は削除した。

サービス事例集

空間

学生

教員

他部署

金沢大学附属図書館中央図書館 ブックラウンジ・カフェ



角間キャンパス（北地区）

| | |
|-------|---------------------------|
| 学生数 | 10,691名 |
| 館員数 | 専従12名、兼務8名 非常勤・臨時14.7名 |
| 蔵書数 | 1,190,000冊 |
| 所在地 | 石川県金沢市角間町 |
| T E L | 076-264-5211 |

内容

- ・各種イベントの開催
- ・ギャラリーαでの作品等の展示
- ・「ほんとかふえ。」での飲食
- ・「ほんとか文庫」や新聞の閲覧
- ・CNN、BS等の視聴
- ・インターネットの利用

概要

対象者：すべての利用者
実施期間：2010年4月～
実施場所：中央図書館
担当職員数：6名

きっかけ

- 発案者：情報部（附属図書館）情報サービス課
- ・学生からの要望「グループで話し合える場所がほしい」に応えるため。
 - ・教育環境（「学士力」の要請など）の変化に対応するため。

- ・ネット環境が大きく改善されるなどの環境変化に対応するため。
- ・図書館の電算化が進み、カードケースの撤去など空間を再構築することが可能になったため。

開始にあたって

準備期間：約12ヶ月

準備の概要：改築、改装のための立案

広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、
図書館HP、プレスリリース、グッズの配布、学内印刷物への記事掲載

費用用途：改築、改装、機器類の設置

苦労したこと・工夫したこと

ラーニングコモンズ実現のため、各部署の理解を得られるよう定義付けを行ない、動機や得られる効果を説明して折衝したこと。

始めてよかったと思うこと

- ・利用者の増加
- ・図書館を多様に利用することが可能になり、利用者のニーズに対応できること

- ・トークショー等のイベントが簡単に開催できること

今後の課題は…？

- ・利用者が多いため、さらにスペースを確保したい。
- ・学内の他の図書館に対しても設置要求があり、応える必要がある。

伝えたいこと

学生の利用を促すための工夫が必要になります。
例えば、イベントや講習会を開催する、教員にゼミやセミナーの場として提供する、など。また、学生が自由に使えるスペースであることをアピールするため、少々乱雑であっても移動された机を放置する、ホワイトボードの消し忘れを時々わざと残しておく、などが考えられます。

空間

学生

教員

他部署

関東学院大学図書館本館 アクティブ・ラーニングの空間ブラリ (飲食可能エリア設置)



学生数 5,836名
館員数 専従6名
蔵書数 771,550冊
所在地 神奈川県横浜市金沢区六浦東 1-50-1
TEL 045-786-7023

[数値：2013年5月現在]

内容

図書館内でアクティブ・ラーニングを推進するための学習環境。オープン時に学内公募で選ばれた名称「ブラリ」にはライブラリーに「ぶらっと気軽に訪れて欲しい」との願いが込められている。またラウンジにある印象的なテーブル「集まる ～アツマル～(上写真)」は学生が身近に感じる空間づくりを目指して、学内のデザインコンペティションで選ばれた学生のデザインを工房で制作したものである。

内部は目的別にスタディエリア、グループワークエリア、AVエリア、リラクセスエリア、ラウンジにゾーニングされ、多様なニーズに応じている。

各エリアにはホワイトボードが設置され、可動式のテーブルや椅子は目的や人数に応じて組合せが自由となっている。館内は無線LANが整備され、PCとネットワークプリンターが設置されている他、ノートPCとプロジェクターの貸与も行なっている。機器と資料を活用した学習活動が活発になり、授業や講習会も行なわれている。

ブラリ内は和やかな雰囲気の中で議論が弾みよう、また滞在型の利用者がリフレッシュ出来るように飲食可能となっている。飲食ルールは軽食とフタのある飲物のみ可とし、入口近くには軽食と飲料の自動販売機を備えている。飲食可エリアと飲料のみ可のエリアの区別は一目でわかるよう床の色でゾーニングしている。

展示スペースは、本の紹介など図書館からの情報発信の場としても活用している。

概要

対象者：すべての利用者
実施期間：2011年9月～
実施場所：図書館内ホール
担当職員数：2名

きっかけ

発案者：図書館
アクティブ・ラーニングの推進と多様なニーズに応えるため。

開始にあたって

準備期間：約1年3ヶ月

準備の概要：

- ・他大学先行事例の調査・見学
- ・ラーニングcommons関連の文献収集
- ・関連セミナーへの参加
- ・教職員によるワーキンググループでの検討
- ・図書委員会内に小委員会を設置し、報告書作成
- ・図書委員会での報告・承認
- ・規程の改定
- ・飲食ルールの策定・周知
- ・施設改修に関連する部署との打ち合わせ
- ・什器、備品の複数業者による提案と選定

広報：

掲示物（館内）、チラシ（館内・館外）、放送（館内）、図書館HP、学内印刷物への記事掲載

苦労したこと・工夫したこと

- ・学生とともに作る空間、学生が身近に感じられる空間を目指し、オープン時に学生参加型企画として、名称募集とテーブルデザインコンペティションを行った。
- ・床を色分けし、「飲食可」「飲料だけ可」が一目で分るようにした。
- ・図書館職員だけで検討せず、図書委員会内にラーニングcommonsの小委員会、ワーキンググループを設置し、教員や他部署と協働した。
- ・飲食ルールについては、飲食可とすることで見込まれる効果や他大学の例などを報告書に記載し、飲食に関する規程の改定を行った。

始めてよかったと思うこと

- ・グループ学習がくつろいだ雰囲気の中で行なわれるようになったこと。
- ・ラーニングcommons内のグループ学習が活発化することで館内の他の利用者が刺激を受け図書館全体が学習の場として活性化されたこと。
- ・長時間を図書館で過ごす滞在型の利用者がリフレッシュできる場所ができたこと。
- ・図書館から情報発信できる場所ができたこと。

今後の課題は…？

- ・図書館の人的資源を活かした学習支援の拡充
- ・グループ学習を集中して行なうための場の整備

伝えたいこと

- ・ラーニングcommonsを作ること、飲食させることが目的ではなく、その場所でどのような学習をして欲しいのか、図書館ではどのような支援を行ないたいのかという基本理念を持つことが一番重要だと思います。
- ・従来の図書館の印象が強い方からは反対意見もあるかもしれませんが、図書館独断での飲食ルールの変更とならないよう検討段階より教員の意見も聞き、協力してもらえる体制を作ると良いのではないかと思います。
- ・検討段階においては、施設を整備することで予想される効果や他大学の事例、省庁の答申などを分りやすく効果的に教員、他部署の職員に伝えることで、理念を実現するためのコンセンサスや協力を広く得ることが可能となるのではないのでしょうか。



[グループワークエリア]

相模女子大学附属図書館 ラウンジ



学生数 3,482名
館員数 専従3名
蔵書数 376,000冊
所在地 神奈川県相模原市南区文京 2-1-1
TEL 042-747-9184

内容

飲み物の自動販売機を設置した飲食可能なスペース。ラウンジ内への館内資料の持込は禁止であるが、のんびりと外を見ながらご飯を食べたり、友達とのおしゃべりを楽しむことができる。

概要

対象者：すべての利用者
実施期間：1992年10月（開館時）～
準備期間：建築計画に約2年
実施場所：図書館内

きっかけ

発案者：附属図書館
図書館では「飲食禁止」「静かに」という制約が多いため、自由に飲食ができ、友達とのおしゃべりができる空間を提供したいと思ったことがきっかけ。

開始にあたって

準備の概要：設計・建築会社とのやり取り
費用：建築計画に伴う費用に含まれる

苦労したこと・工夫したこと

- ・20年以上前のことだが、教員から「喫煙を認めて欲しい」という要望があったこと。勿論禁煙です。

始めてよかったと思うこと

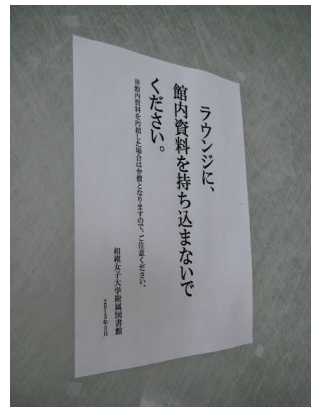
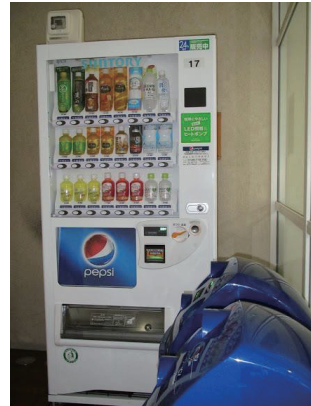
- ・友達との待ち合わせ場所に利用されるなど、人が集まる場所となり、図書館に足を運びきっかけとなったこと。
- ・一息入れたいときのリフレッシュコーナーでもあり、お弁当などを持参すれば館内で食事を取ることができるため、食事のために図書館を離れる必要がないこと。
- ・食事後すぐにまた学習に集中でき、滞在型図書館というメリットにもなること。

今後の課題は…？

- ・館内資料の持込を禁止しているが、残念なことに資料を持ち込んで読みながら食事をする学生がいる。掲示などでの呼びかけを行っているがなかなか解決に至らない点が今後の課題である。

伝えたいこと

- ・館内に飲食可能なスペースがあるということはメリットもある一方で、前述のような課題もあります。学生たちにルールを守って利用することの大切さについての啓発活動を続けていくことが大切だと思います。



空間

学生

教員

他部署

相模女子大学附属図書館

和室（閲覧室）



学生数 3,482名
館員数 専従3名
蔵書数 376,000冊
所在地 神奈川県相模原市南区文京 2-1-1
TEL 042-747-9184

内容

靴を脱いで自宅にいるような感覚で学習できる12畳の和室閲覧室。座卓テーブルを設置しているため、友達同士で向かい合って読書やレポート作成、サークルでの活用も行うことができる。利用方法は閲覧席同様、空いていれば自由に利用可能。

概要

対象者：すべての利用者
実施期間：1992年10月（開館時）～
準備期間：建築計画に約2年
実施場所：図書館内

きっかけ

発案者：附属図書館
家庭にいるようなリラックスした感覚で過ごせる場所があると良い、という当時の館長のアイデアがきっかけ。

開始にあたって

準備の概要：設計・建築会社とのやり取り
費用：建築計画に伴う費用に含まれる

苦労したこと・工夫したこと

- ・開館当時は襖を閉め切って寝たりする学生がいたため、襖を取り外し、人の目が行き届くようにしたこと。

始めてよかったと思うこと

- ・和室利用を目的に図書館を訪れる学生も多数いる。「わあ、畳だ！」という声がうれしい。
- ・リラックスして学習ができるため、図書館での滞在時間も長くなっていること。

今後の課題は…？

- ・コミュニケーションが取れない不器用な学生が多くなってきている。図書館が学内での居場所となっていきたい。

伝えたいこと

- ・学生たちにリラックスして学習ができる空間を提供できることは大変嬉しく思いますが、リラックスすぎる学生もいるため、呼びかけを行っています。学生たちにルールを守って利用することの大切さについての啓発活動を続けて行っていくことでしょうか…。



空間

学生

教員

他部署



芝浦工業大学豊洲図書館 和室閲覧室



豊洲キャンパス

学生数 8,399名 (大学全体)

館員数 専従2名

蔵書数 約270,000冊 (大学全体)

所在地 東京都江東区豊洲3-7-5

TEL 03-5859-7460

[数値：2013年5月現在]

内容

予約不要のグループ学習室として開放している。元々工学部はグループ学習が多く、また、起こし絵と呼ばれる資料や図面、大型資料を広げて見るためのスペースとして使用されている。

「場の提供」ということで、一つの場所を図書館閲覧室、グループ学習室、学園祭や国際推進課と連携したお茶会、各種イベント会場として使用している。留学生からの人気も高い。

概要

対象者：すべての利用者

実施期間：2006年4月（開館当初）～

実施場所：図書館内

担当職員数：管理職1名、一般職1名

きっかけ

発案者：図書館

新館移転計画に伴う図書館計画による。「茶室おこし絵図集」など、ある程度の広さをもった巻物資料などを閲覧する場として畳の場が相応しいという

図書館利用者からの声を、建築家へ要望を出した結果、建築家と意見が一致し設置に至る。

図書館からの希望は和室で畳の閲覧室を考えていたが、建築家からは茶室を提案された。室内には展示コーナー、通路側にも面しており、図書館からの希望も考慮された結果、現在の形となった。

開始にあたって

広報：学内印刷物への記事掲載

費用：新館移転計画予算

苦労したこと・工夫したこと

- ・普段はグループ学習室として利用されているが、学園祭での学生茶道部への貸出は、毎年、水回りがあるので、貸出手続きに基づき、施設担当部署と連携して進めている。
- ・お茶会は来場者から好評なイベントとなっており、ガラス張りになっているため、イベント開催は広報活動にもつながっている。

始めてよかったと思うこと

- ・本学の学生は、地方からの一人暮らしが多いが、

量のあるアパート暮らしが少なく、量の空間は、「大変和む」と好評を得ている。

- ・グループ学習室として開館時間中は利用手続きなしで利用できるため、学年問わず利用されている。
- ・茶室のある図書館として、図書館広報につながった。キャンパスの建物が近代建築であり、その中に茶室という和の空間が国際交流で訪れた来館者に人気が高い。
- ・茶室があるおかげで、学生サークルのお茶会の会場となり、学生と図書館員の会話の機会が増えた。

今後の課題は…？

- ・現在は地域の小学生の見学などに留まっているため、小さなイベントとして、卒業生など複数人が講演する機会を作りたい。

伝えたいこと

- ・各図書館で図書館の満足度調査に記載される要望や、図書館利用者と図書館員が図書館ノートなど利用しコミュニケーションをとること、根拠となるものを図書館として発信できるように準備すること、日々の図書館利用者の図書館での利用行動など、図書館員が観察することが大切です。



空間

学生

教員

他部署

創価大学中央図書館 飲食可能なブラウジングルーム



学生数 8,424名
館員数 専従6名、非常勤・臨時10.2名
蔵書数 1,084,000冊
所在地 東京都八王子市丹木町1-236
TEL 042-691-3191

内容

中央図書館2階のブラウジングルームは、教養雑誌を配架しており、ゆったりとしたソファなどでブラウジングすることができる施設。飲食・会話・携帯電話の使用等を許可している。室内には清涼飲料水や軽食（パン・お菓子等）の自動販売機もあり、学生はここで自由に食事や会話ができる。

館内資料の持ち込みも禁止していないため、館内の資料を貸出せずにそのまま持ち込んで、学習することもできる。

コイン式コピー機・無線LAN・ノートPCなど持込電子機器用コンセント・可動式ホワイトボード（マーカ―・イレイザー付）を設置している。3台のCD試聴機（1台につき3枚のアルバム）が、足置き付きのリクライニングチェア3台とともに設置しており、音楽を聴きながら、中には午睡をとっている利用者もいる。

読書に関する講演会（読書運動の一環）や、ピブリオバトルの学内予選なども、この部屋の一部を使

用して開催している。

飲食可能ということで、食べ物カスなどによる匂い防止の為、床をカーペットからタイルに替え、ブラズマクラスターイオン式の空気清浄機を設置している。

概要

対象者：すべての利用者

実施期間：1996年3月～

実施場所：中央図書館2階ブラウジングルーム

担当職員数：1名

きっかけ

発案者：図書館事務局

大型増改築の際に設置。当時「利用者のための図書館」を目指して様々なサービス改善を企画・実行していた。

開始にあたって

準備の概要：

- ・増改築のための設計
- ・サービス内容の企画

広報：学内印刷物への記事掲載

費用・用途：増改築に含まれるため当初の費用は不明であるが、普段の費用は教養雑誌の購読料（新聞雑誌費）やCD 試聴機に設置する音楽CDの購入費（図書費）がかかる程度。ブラウジングルームのみの予算としては計上していない。

苦勞したこと・工夫したこと

- ・ゆったりとくつろげる空間にとのことで、大型のソファや2人掛け・3人掛けのソファ・ベンチシート・リクライニングチェア（足置き付き）などの家具を設置したこと。
- ・CD 試聴機3台には、新入荷の新譜音楽CDを3枚ずつ設置し、学生にくつろぎながら音楽を楽しんでもらっていること。
- ・汚れや匂いがこもるため、床の部材を替えたり、空気清浄機を設置したこと。

始めてよかったと思うこと

- ・近年指向されている滞在型図書館の機能を1995年から有しているため、図書館スタッフはその良さがあまり分かっていなかったが、来館する他大学の見学者から高評価をいただいている。特に、貸出をせずに館内の資料を使用できること、館内に飲食可能なスペースがあることなどが良いとの感想が寄せられることが多い。
- ・グループ学習にも適した設備を有しているので、ラーニング・コモンズの一部の機能も有した設備となっている（学習相談など人的サービスは行っていない）。
- ・天井が2階分吹き抜けで、開放感が抜群であり、長期休業期間中もこの施設の利用者が多い。

今後の課題は…？

- ・汚れや匂いの対策が重要（カーペットからタイルに床材を取り換えたり、空気清浄機を設置しているがまだ不十分）。
- ・室内での会話の勢いが止まらず、そのまま室外に出る利用者が多い点が課題である。

伝えたいこと

- ・貸出をしなくても飲食ができるスペースが館内にあるのは非常に貴重です。
- ・また、ラーニング・コモンズと差別化するために、リフレッシュルームなど名称を考えた方がいいと思います。
- ・空気清浄機と床材の選定は慎重に。清掃業者や自販機業者と綿密に打ち合わせをして、清潔さを保つことが重要です。

高松大学附属図書館 飲食可能「ホットコーナー」



学生数 720名
館員数 専従2名、非常勤・臨時2.5名
蔵書数 129,000冊
所在地 香川県高松市春日町960
TEL 087-841-2167

内容

2009年度の『図書館における可能な学習支援』事業計画案の一つとして、長時間利用する学生の増加への対応と夏季の水分補給の必要性を考慮して、飲み物を飲んでもよい休憩場所を館内に作ることを計画した。

- ① 図書館内が狭く、自販機などを備えたドリンクコーナーやカフェなどを新しく設置する場所がない。
- ② 館内への飲食物の持込みは可能とするが、机の上には飲食物を置かないようにさせる。
- ③ 2階の閲覧室においては、新聞閲覧台の奥のスペースに丸椅子を置き、3階の閲覧室は、旧「グループ学習室」を模様替えて、窓際に机と丸椅子を置き、飲食可能な場所をつくる。『ホットコーナー』として休憩をしたり、飲食可能な、一息つけるスペースとして利用させる。

概要

対象者：すべての利用者
実施期間：2009年9月～
実施場所：2階閲覧室及び3階閲覧室

担当職員数：0名

きっかけ

発案者：図書館

長時間図書館を利用する学生が増加したこと。気温が高くなると、飲み物を持ったまま図書館に来る学生が多い。特に夏季は健康面からも飲み物を持ったまま入館しないように指導することが難しい。館内は飲食禁止なので、飲み物を持ち込んだ場合、閲覧室などで隠れて飲もうとするために机や床の絨毯に零して、汚くなる。また、資料を汚す心配もある。館内が狭く、閲覧室外で飲食可能な場所やカフェを設けたり、自動販売機を設置する場所がない。

開始にあたって

準備期間：約5ヶ月
準備の概要：図書館内で最も他の利用者の迷惑にならない場所で、資料の並んだ書架・閲覧机など資料から離れた場所を確保する。
広報：掲示物（館内）・図書館ホームページ・学内印刷物への記事掲載
費用：0円

苦労したこと・工夫したこと

館内がとても狭く、他の利用者の迷惑にならないような場所を確保することが難しかった。ホワイトボードやアクリルパネルなどで遮り、植物などを配置して、リラックスできる空間を作った。

始めてよかったと思うこと

館内で飲み物を飲んでいる利用者に『ホットコーナー』を利用するように注意することで、閲覧室内での飲食が減った。

今後の課題は…？

利用者への周知を徹底し、飲食する場合は飲食コーナーを利用するように習慣づけること。

伝えたいこと

利用者が飲み物を館内への持ち込み際の制限が難しい。水筒・ペットボトルなど栓ができるものは良いが、紙パックの飲み物などの持ち込みをどうするか。本学ではストローを差し込んだ紙パックの利用者が多いため利用者の持込の制限ができない。



東海学院大学・東海学院大学短期大学部附属図書館 昼食時間帯に飲食可能な施設（BGMあり）



学生数 1,378名

館員数 専従2名、非常勤2名 [2013年5月1日現在]

蔵書数 238,000冊

所在地 岐阜県各務原市那加桐野町5-68

T E L 058-389-2969

内容

図書館1階にある大ホールは、ホテルのラウンジのような豊かな空間で、応接セットを配置し、集い、語り、ゆったりとくつろぐことができる。

大ホールのみは飲食可能なスペースとして利用者に提供しており、昼食時間帯にはBGMを流している。音響設備も充実しており、大理石で造られたステージもあり、学生の卒業制作展、演劇発表ほか各種イベント等が可能な多目的施設となっている。

概要

対象者：すべての利用者

実施場所：図書館1階大ホール

担当職員数：2名

きっかけ

発案者：図書館

学生より図書館内で飲食を希望する声が多数あったこと、学食スペースに限度があることなどから、1階の大ホールのみは自由開放とした。また、せつ

かくの施設を快適に利用してもらうために、図書館職員の発想で、昼食時間帯限定（平日のみ）でBGMを流すことになった。

開始にあたって

準備期間：約1ヶ月

準備の概要：初等教育学科音楽コースが過去にあり、CDは720点ほど所有しており、ミキサー室の音響設備も整っていたため、特別準備するものはなく実施することができた。

広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、図書館HP、学内印刷物への記事掲載

費用：0円

苦勞したこと・工夫したこと

・月曜日～金曜日までの5日間、変化に富んだBGMを流している。例えば、クラシック・映画音楽・ポップスなど日替わりで提供している。クリスマスシーズンはそれに因んだCDをかけて楽しんでもらっている。

始めてよかったと思うこと

- ・学生アンケートにおける質問項目で、居心地の良さ、休み時間によく利用する場所などの上位に、毎年図書館が入っている。
- ・近年読書離れが問題となっているが、まず図書館に足を運ばせるところから始めた点では成功していると思う。
- ・館内に入れば、各種掲示物を見て3、4階閲覧室まで上がってくれることもあり、自動的に利用率も上がっている。

伝えたいこと

本学図書館は、1994(平成6)年、大学と短大部の共用図書館として開館した。21世紀を見据え、従来の図書館のイメージを一新すべく、「集う」「語らう」「学ぶ」をキーワードにしたコンセプトに基づき運営している。図書館内には利用目的別に各種施設がある。図書館1階にある大ホールは、静粛に使用する閲覧室とは区別し、学生、教職員、学外者に自由に利用してもらえる空間づくりを心掛けることとし、サービスの一環として昼食時間帯にBGMを流している。今後も可能な範囲内で、利用者の意見に対して前向きに対応し、固定観念にとらわれない運営を進めていく方針である。

空間

学生

教員

他部署



北海道大学附属図書館 くつろぎの空間メディアコート



学生数 18,043名[平成25年5月1日現在]
館員数 専従85名、非常勤・臨時27名
[平成25年4月1日現在]
蔵書数 3,831,786冊[平成25年3月31日現在]
所在地 北海道札幌市北区北8条西5丁目
TEL 011-706-4998

内容

飲食可能な憩いのスペースとして利用者に開放している。

各種イベント（ビブリオバトル、北大出身作家のパネル展示、EUフレンドシップミュージックウィーク等）会場として活用している。

概要

対象者：すべての利用者

開始時期：2012年4月～

実施場所：図書館内メディアコート

きっかけ

発案者：図書館再生事業の一環

法令上不適合な6層の積層書庫（室内面積770㎡、高さ25m）を解体して生まれた広大なスペースの有効利用を考慮した。

開始にあたって

準備期間：図書館再生事業（平成21～23年度）の一環

準備の概要：図書館再生事業の一環

広報：

- ・図書館HP
- ・facebook
- ・学内印刷物への記事掲載

費用：図書館再生事業の一環

苦労したこと・工夫したこと

- ・広大なスペースなので自然採光やLEDの採用、床暖房を設置するなど、省エネを意識した設計を考えた。

始めてよかったと思うこと

- ・ 飲食が可能なので利用者にとって利便性の高いスペースとなっている。
- ・ 夏は屋根からの自然採光で明るく、憩いのスペースとして活用されている。
- ・ 広大なスペースであるので各種イベントに活用出来る。

今後の課題は…？

- ・ スペースが広いので冬季の室内環境を維持するのに少々不安がある。
- ・ 通常利用はもちろんのこと、各種イベントなどを計画して利用を促進したい。

伝えたいこと

- ・ 偶然に生まれた空間で、どのような使われ方をするのか未知数でしたが、予想以上におもしろい空間となり、多様な使われ方をしています。ただ冬季の室内温度については想定外でした。



空間

学生

教員

他部署



室蘭工業大学附属図書館 ゾーニング及び飲食ルール

図書館 飲食ルール

キャップの
ついている容器に
入っている飲み物



学生数 3,359名
館員数 専従7名、非常勤・臨時5.8名
蔵書数 323,000冊
所在地 北海道室蘭市水元町27-1
TEL 0143-46-5187

内容

ゾーニング（利用マナー）：

1F 閲覧席及びパソコンエリアはグループ学習エリアで他の利用者に迷惑にならない程度に学習に関する会話OK。2F 閲覧席は、個人学習エリアで会話禁止。2F 閲覧席内に一部サイレントエリア（全ての音の出る利用（電気機器等）も禁止）。

ゾーニング（飲食）：

（閲覧席及びグループ学習室）

- ・ペットボトル等のふた付き飲み物可。
- ・一口サイズのお菓子可（あめ、ガム、フリスク、グミ、チョコなど）。
- ・例え一口サイズでもクッキーやポテトチップスなど食べかすがこぼれる、食べると音がするようなタイプものは禁止。
- ・口に入れた以外のお菓子はカバンの中にしまっておき机の上には出しておかない。
- ・歩きながらの飲食は禁止。

（談話室）

- ・軽食可（おにぎり、パン、サンドウィッチに限る）、

それ以外の弁当類、汁もの、アイス、生もの等は禁止。

- ・缶ジュースなどふた付きでない飲み物も可。

概要

対象者：すべての利用者

実施期間：2012年10月～

実施場所：図書館内

担当職員数：3名

きっかけ

発案者：図書・学術情報室 運用ユニット

- ・ゾーニング（利用マナー）：グループで討議しながら学習する学生が増加し、静かにするよう注意することは逆に自主的学習の妨げになると考え、1Fと2Fでゾーニングした。
- ・飲食ルール：以前からペットボトル等のふた付き飲み物は許可していたが、許可していないお菓子をこっそり食べている利用者は少なくなかった。禁止行為なので職員が見回って繰り返し注意しなければならないことは、注意する側も利用者の

側も不快な上に禁止しても減らない。以前の全ての飲食禁止からペットボトル飲料可能としたことから考えて、一口サイズの菓子を認めても、不快に思う人がほとんどなく、かつ勉強する際の個々人の集中力の維持の方法の選択肢を増やすことにもなると考えてサービスを開始した。

開始にあたって

準備の概要：利用者向け周知のみ。

広報：掲示物（館内）、デジタルサイネージ（館内）、

図書館HP、Facebook、twitter

費用：0円

苦労したこと・工夫したこと

- ・食べることを認めることについての不安は大きかった。

始めてよかったと思うこと

- ・ゾーニング（利用マナー）：細かな問題はあるものの、ゾーニングは上手くいっている。1Fに良く使われる理工系の図書等が配架され、情報メディア教育センターの端末があることから、学生の利用率が高く、活発なグループ学習が行われており、賑やかな空間となっている。2Fは人文社会科学系の図書が配架され、個人で学習する利用者が多く、静かな空間を保っている。利用者は、必要に応じて1Fと2Fを使い分けているようだ。
- ・飲食ルール：サービス導入後、アンケート調査など実施していないので利用者の満足度はわからないが、ルールの範囲内でちょっとした甘いものを食べて良いことは、今まで我慢していた人、罪の意識を感じながら隠れてこっそり食べていた人にとっては、ストレスにならず良いと考える。

今後の課題は…？

- ・飲食ルール：現在の一口サイズの菓子、軽食の定義を守り切れるか。（おにぎりは可でどうして納豆巻きは不可なのか、ポッキーは一口サイズの菓子に入るのか、などいろいろな質問に対応するのが難しい。）

伝えたいこと

- ・飲食ルール：サービス実施後に利用者マナーが特別悪化したというようなことは感じられないので、本学では現状を維持している。ただし、小規模でも一旦、飲食を認めるとマナーがより悪くなったからと言って中止するのも難しいので、大学内の飲食可能な場所の整備状況なども併せて慎重に考えると良いと思う。

空間

学生

教員

他部署

室蘭工業大学附属図書館 各種グッズの貸出



学生数 3,359名
館員数 専従7名、非常勤・臨時5.8名
蔵書数 323,000冊
所在地 北海道室蘭市水元町27-1
TEL 0143-46-5187

内容

学習用品及び滞在快適グッズの館内貸出

- ・主な貸出用の学習用品（各種サイズの定規、角度器、自在定規、コンパス、テンプレート、ステイックのり、ホチキス、ホチキス（大：120枚まで綴じ可能）、ホチキス針はずし、修正液、ゼロハンテープ、はさみ、カッター、カッターマット、サインペン、カードリーダー、関数電卓、朱肉）
- ・主な貸出快適グッズ（うちわ、かご、ひざかけ）
- ・傘（館外貸出）
- ・その他（ノートパソコン、iPad、プロジェクタ、簡易ホワイトボード）

概要

対象者：すべての利用者
実施期間：2011年10月～
実施場所：図書館内
担当職員数：はさみ等をカウンターで貸出す以外はセルフサービス

きっかけ

発案者：図書・学術情報室 運用ユニット

文房具などは「〇〇はありますか」とカウンターへの問合せが多く、図書館に置いてあると学生にとって便利に思われるため。快適グッズについては、エアコンがない、暖房通気期間外の季節の変わり目の寒い日等、少しでも快適に自習できるようにとの配慮から始めた。

開始にあたって

準備の概要：物品の購入
広報：掲示物（館内）、デジタルサイネージ（館内）、図書館HP、Facebook、twitter
費用：7万円程度
（上記「学習用品」及び「滞在快適グッズ」購入分。その他は含まない。）

始めてよかったと思うこと

- ・自由貸出物品は、カウンター端に置いてあり、そこで作業もできるようにしているが、課題提出の

ためか一生懸命作業しているのを見ると役立つ
ていることがよくわかる。

- ・あたりまえのことではあるが、窓口貸出物品（は
さみなど）は、「〇〇を貸してください。」「はい
どうぞ、終わったらカウンターへ返して下さい
ね。」「ありがとうございました。」など、学生と
職員間のちょっとしたコミュニケーションが図
書館への信頼感につながるかも知れない。
- ・スティックのりなどは、しばらく不在になってい
てもいつのまにか戻ってきている。また、貸出用
傘も貸出簿に学生番号・氏名を記入するようにな
ってから、後日返却に来てくれる。「飲食ルール」
もそうだが、学生を信頼し、大人として接するこ
とにより、相手も大人としてふるまってくれるの
ではないかと感じている。

今後の課題は…？

- ・消耗品なので、買い替えが必要であり、支出予算
を伴う。

伝えたいこと

物品貸出ランキング トップ3

- 1位 ホチキス
- 2位 のり
- 3位 はさみ

明治大学和泉図書館 館内のゾーニング



和泉キャンパス

学生数 10,000名 [2013年4月30日現在]

館員数 専従6名

蔵書数 323,000冊 [2012年3月31日現在]

所在地 東京都杉並区永福1丁目9-1

T E L 03-5300-1186

内容

ハード面：

音のゾーニング

①図書館入口から奥に向かって音のグラデーション

②図書館下層部から上層部に向かって音のゾーニング。

①②をガラス材で処理。外装は low-e ガラス (3層ガラス)、内装は天井・壁面木ルーバー内にガラスウールを配置。1階(情報リテラシー室)2階(コミュニケーション・ラウンジ)は幅厚ガラスで閲覧エリアと遮音。外階段から1階~4階閲覧エリアへは前室を設けて2重ドア設置。

1階2階は Active study area (活動的空間)、3階は Quiet study area (静寂な空間、PC可)、4階は Silent study area(極上の静けさ、PC不可)。

カラーリング

③床・書架の色調

④閲覧席・椅子の形状

③は1階から4階に向かって色調が深みを増す。

④は1階2階がカジュアルな形状、軽やかなツール配置。3階4階が窓周りはオープン席・雁行型席。内側席はクローバー型や矢羽根型、風車型そして卍型に仕切った閉ざされた空間。

ソフト面(すなわちサービス=おもてなし)：

グループで活発に活動するエリアと、ややトーンダウンのエリア、さらに「個」を重んじるエリアの演出で、イベント型のサービスが拡大した。またレポートの書き方支援に代表されるように、一對一のサービスが充実した。

概要

対象者：すべての利用者

実施期間：2012年5月~

実施場所：全館

担当職員数：専任6名 嘱託1名

業務委託 昼間 8名；夜間 7名

ゾーニングによって達成できたイベント：

- ・図書館ホール：各種イベント、授業。
- ・ギャラリー：企画展示。
- ・エントランス：七夕祭り。
- ・特設コーナー：おすすめ本。
- ・情報リテラシー室：図書館リテラシー教育（基礎演習、教養演習、ゼミナール）4カ月で211回実施（90分1回）。
- ・コミュニケーション・ラウンジ：ブック・シェア・トーク（本好き仲間の交流）、留学生との交流。

きっかけ

発案者：ゾーニングは図書館建設関係の委員会、イベントは和泉図書館事務室
イベントは毎朝の朝礼や日常会話で発案。

開始にあたって

準備期間：約1年8ヶ月以上前から
準備の概要：ゾーニングはサービスのための前提である。

苦労したこと・工夫したこと

ゾーニングでは苦労は無い。

始めてよかったと思うこと

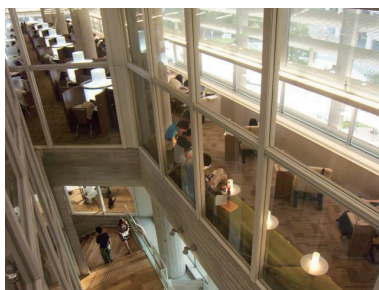
図書館を居心地の良い場所とするには、ゾーニングしかない。

伝えたいこと

サービスとは提供するものではなく生み出すものであり、学生の活動を支援するのがサービスの一つのありかたです。



ガラス材による遮音



階段部分とのゾーニング



クローバー型の座席

空間

学生

教員

他部署

和光大学附属梅根記念図書・情報館 イートインスペース



学生数 3,195名
館員数 専従11名、非常勤・臨時4.8名
蔵書数 500,000冊
所在地 東京都町田市金井町2160
TEL 044-989-7494

内容

館内に飲食可能なスペースを設置。

概要

対象者：すべての利用者

実施期間：2009年9月～

実施場所：図書・情報館3階（入口、メインカウンターがあるフロア）。同フロアは、「コミュニケーション・ゾーン」として、資料・情報・サービス・PC環境の総合的な利用の場、学生、教員、図書・情報館の活発な交流の場、更にはくつろぎの場としての機能を併せ持つ、創造的で知的なコミュニケーション・学習のための共有空間となっている。

担当職員数：0名

（特定の担当者があるわけではない）

きっかけ

発案者：図書館施設・設備検討委員会（図書館部署内ワーキンググループ）

「10年後を視野に、図書館の施設・設備についての基本方針を考える」ことを目的に発足した当該ワ

ーキンググループの検討の中で実現したものを。

近年、大学図書館が果たす役割が、勉学面だけでなくトータルに学生生活を支援していくことに変遷しているという状況を受け、「大学生生活の一機能として位置づく滞在型図書館」を目指そうということになった。

イートインスペースは勉学の合間のくつろぎの場として、また、館内における飲食ルールの徹底を促す施設として設置することとした。

開始にあたって

準備期間：約18ヶ月

準備の概要：

- ・設置スペースの検討（フロア、広さ、導線など）
 - ・設備内容の検討（什器、自動販売機など）
 - ・設置後の利用ルール策定およびそのサイン作成
- 広報：掲示（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、デジタルサイネージ（館内・館外）、図書館HP、教職員向けには、学内の会議等を通じて周知
費用・用途：什器、設置作業費、サイン看板等

苦勞したこと・工夫したこと

準備自体はさほど大変ではなかったが、館内の施設・設備全体の再配置・見直しをとまなう作業だったため、一大プロジェクトとしての大変さがあった。

始めてよかったと思うこと

- ・特に休日開館の日など、学内の食堂や売店がすべて閉まっている時でも、利用者が食事を持ち込むことができ、長時間利用できるようになったこと。
- ・通常の利用だけでは図書館に足を向けない利用者層を取り込むきっかけになっていること。
- ・学内に一人でも食事をとりやすいスペース（居場所）ができたこと。
- ・館内で飲食している利用者に対して、単に注意するだけでなく、飲食可能スペースへ誘導することができるようになったこと。

今後の課題は…？

（今後改善する予定等はまったくないが）検討段階では、いわゆるカフェのような、もっとコーヒーの香りが漂うような空間を妄想していた。現実的には、自動販売機が精いっぱいだった。

伝えたいこと

イートインスペースは壁で仕切られている（飲食可能スペースであることを識別するため、また、飲食物のにおい対策のため）が、空調の冷暖気の流れもせき止められてしまうため、特に冷房が効かないということに事後に気が付きました。

現在は改修されましたが、既設後に変更が生じないように準備することをおすすめします。

九州看護福祉大学附属図書館 喫茶スペース



学生数 1,601名
館員数 専従3名、非常勤・臨時2名
蔵書数 41,000冊
所在地 熊本県玉名市富尾888
TEL 0968-75-1840

内容

館内に水分補給できるスペースを設けた。自販機・給水器の設置はない。臭い問題があり、現在のところ食べ物は許可していない。

概要

対象者：すべての利用者
実施期間：2012年10月～
実施場所：図書館1F
担当職員数：特になし

きっかけ

発案者：図書課（他課から異動してきた職員）

- ① 毎年実施している図書館利用アンケートの自由記載欄に希望が寄せられたため。
- ② 夏季節電実施で冷房温度が28度に設定されており、熱中症予防のため。

開始にあたって

準備期間：約1ヶ月
準備の概要：ラインテープによるゾーニング、

丸テーブル2卓、椅子7脚、看板（イーゼル）、メニュー立ての設置
広報：掲示物（館内外）、学内印刷物への記事掲載
費用：0円

苦労したこと・工夫したこと

既存の物品で対応したが、カフェの様なお洒落な雰囲気を出すため、明るい窓際に設置したり、イーゼル（看板）やメニュー立てにスペースの案内・注意事項を表示したり（オープンカフェのイメージ）と色々工夫した。

始めてよかったと思うこと

スペースの利用が多く、学生がゆったりくつろいで談笑している様子を見ると良かったと思う。

今後の課題は…？

現在は飲料のみとしているが、軽食等、利用範囲をどこまで広げられるかが今後の課題。

伝えたいこと

ちょっとした行動力です。



成蹊大学図書館 飲食可能なリフレッシュエリア

学生数 8,380名
 館員数 専従11名、非常勤・臨時29名
 蔵書数 1,282,000冊
 所在地 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1
 TEL 0422-37-3545

内容

図書館の入館ゲートの外に設置された、館内で借りた図書を読んだり、飲食することができるリフレッシュエリア。

概要

対象者：すべての利用者
 実施期間：2006年10月～
 実施場所：図書館入館ゲート外

きっかけ

発案者：成蹊学園
 新図書館開館と同時にサービス開始。

始めてよかったと思うこと

- ・図書館内の飲食・通話等可能なエリアを明確に区分けできたこと。

今後の課題は…？

- ・リフレッシュエリアと1階入館ゲートが直結して

いるため、自動ドアが開くたびにリフレッシュエリア内の騒音と食べ物のおいが閲覧室に流れ込んでくる点が懸念事項である。

伝えたいこと

- ・前述同様（騒音と食べ物のおいが流れ込んでくること）にならぬようリフレッシュエリアの設置場所は重要だと思います。



[成蹊大学図書館正面]

広島修道大学図書館 コーヒーラウンジ



学生数 6,183名
館員数 専従16名、非常勤・臨時12.2名
蔵書数 800,000冊
所在地 広島県広島市安佐南区大塚東1-1-1
TEL 082-830-1112

内容

2002年9月の新図書館開設時にコーヒーラウンジを館内に設置。

概要

対象者：すべての利用者
実施期間：2002年9月～
実施場所：図書館1階

きっかけ

発案者：図書館

ヨーロッパ圏の図書館のイメージで、図書館の中で休憩できる場所を提供したいという想いから提案。

開始にあたって

準備の概要：

- ・設計時に希望を提出
- ・営業可能な業者の選定

苦勞したこと・工夫したこと

- ・図書館の建設が決まった時に、図書館員の意見を取り入れていただくようお願いし、コンペティションから参画した。

始めてよかったと思うこと

- ・勉強の息抜き、ランチ、学外者の方との面談など様々な用途で利用され、当初、予想していたよりも評判が良い。

伝えたいこと

今では当たり前のように図書館とカフェがセットで建設されているが、当時、図書館内にカフェを併設することには、異論もあった。時代のニーズ、利用者、図書館員が望んでいることは、できる限り、実現させてみる必要があるのかもしれない。

隣は2013年4月に開設したラーニング・コモンズ。



学生数 2,630名
 館員数 専従1名、兼務3名
 蔵書数 233,000冊
 所在地 千葉県市川市国府台2-3-1
 TEL 047-371-1126

内容

ひとりで勉強するキャレル（個人用席）と違い、ゆったりとしたくつろぎの空間を演出し、足を伸ばして利用できるコーナー。

概要

対象者：すべての利用者
 実施期間：2004年9月～
 実施場所：メディアセンター6階南フロア
 担当職員数：0名（特別な担当者はいない）

きっかけ

発案者：西館建築プロジェクトチーム
 西館（メディアセンターを含む建物）建設時のコンセプトにより、学生がくつろいで資料を閲覧できるスペースとして設置。

開始にあたって

準備の概要：西館建設時に、すでに和室閲覧室を設置している他大学へ施設見学に行き、参考にした。
 広報：学内印刷物への記事掲載

始めてよかったと思うこと

- ・畳の閲覧席を設けていること自体が珍しく思われ

るようで、見学者などをお連れしたときに好意的な意見をいただくことができています。

- ・学生は非常にリラックスして利用しているように見受けられる。

今後の課題は…？

- ・くつろいで資料を閲覧するというコンセプト通りに小説などの読みやすい資料を配架していたが、「靴を脱いで畳に上がらないと奥の資料が利用できないので不便である」などの意見があり、現在利用度の少ない資料を配架している。
- ・くつろぎすぎてしまい、畳に寝転がっている利用者なども時折見られ、対応に苦慮する場面もある。
- ・ゆとりあるくつろぎスペースというコンセプトを生かした、配架資料の選び直しや利用マナーの向上が今後の課題であると考えている。

伝えたいこと

靴を脱いで利用できる、靴を脱がないと利用できないというのは、利用者の捉え方によりメリットにもデメリットにもなると思われます。本学の場合は靴を脱いでくつろげるコーナーとして設けているスペースですが、いちいち靴を脱がなければ奥の棚の資料がとれないという不便さも利用者から指摘されています。

創価大学附属図書館 全学読書運動 Soka Book Wave



学生数 8,424名
 館員数 専従6名、非常勤・臨時10.2名
 蔵書数 1,107,000冊
 所在地 東京都八王子市丹木町1-236
 TEL 042-691-3191

内容

創価大学全学読書運動・Soka Book Wave (SBW) は、2004年度より図書館と学生諸団体が協力して実施してきた、全学的な読書運動。創立者が提唱する「活字文化復興」を実現するため、創価大学、創価女子短期大学から「読書の波」を起こそうとの学生の熱意で始まった。SBWは学生有志と図書館職員で構成するSoka Reading Project (SRP) が企画・運営し、広報活動、展示企画、創大祭での読書展、特別講演会の開催など精力的に活動をしている。

参加対象は、創価大学の学部生と別科生、留学生、創価女子短期大学の学生。参加希望者は、SBWのWEBサイトで新規ユーザー登録を行う。ログイン後、開催中のSBWにエントリーを行い、読書した図書感想文やショートレビューを提出。それらを大学院生が確認し、間違った表現などがあれば、丁寧にアドバイスを行う。大学院生の確認・承認が終了すると、1件につき1ポイントが付与され、5ポイント毎に図書カードを1枚進呈する。

この他に、教育学習活動支援センター (CETL) が

主催する学習セミナーに参加してSBWのポイントを獲得する制度など、多様な取り組みを行う中で、学生の読解力、文章力を向上させる取り組みとなっている。

概要

対象者：学部生、別科生、留学生、女子短期大学生
 実施期間：2013年4月～2014年1月
 実施場所：SBW専用WEBページ上
 担当職員数：3名

スケジュール：

10月 読書展（大学祭「創大祭」期間中に中央図書館内で開催）

不定期 特別講演会

不定期 企画・展示（様々なテーマで本を紹介）

月ごと SBWアワード（月間アワード対象図書について優れた感想文の提出者を表彰）

2010年～2012年（終了）

選書ツアーを年1～2回開催。学内で事前説明会を開催し、後日紀伊国屋書店 新宿南店で開催。図書カード2000円分を贈呈。

きっかけ

発案者：図書館事務室

創立者池田大作先生が2004年1月に来館。読書に関する箴言を多数いただき、そのうちの5つを図書館指針として制定。「読書は黄金の輝き 読書は勝利者の源泉 読書は幸福の伴いなり 読書は偉人への道 良書を読み悪書を叩けそれが正義の人なり」

また、2001年～2003年にかけて、「文字・活字文化復興」に関する創立者池田大作先生の寄稿文が地方新聞等に掲載された。これらの事から、当時大学の様々な学生団体等が、様々な読書運動を展開していた。それを、図書館が中心となって「全学読書運動」として統一した運動をつくらうということで、SBW（初年度は読書マラソン）をスタートさせた。

開始にあたって

準備期間：約3ヶ月

準備の概要：最初は、参加カードへ感想文提出印をスタンプする形であり、用意するものは感想文用紙と参加カード、提出印くらいであった。後年 ICT を活用した読書運動へ徐々に発展した。2月から3月にかけて、システムの改良やルールの見直しなどを行なっている。本年度、専用システムの全面リニューアルを実施。

広報：掲示物（館内）、チラシ（館内）、デジタルサイネージ（館内）、図書館 HP、メール、学内印刷物への記事掲載、専用 WEB ページの開設、新入生ガイダンスで告知、館報でお知らせ

費用・用途：1,415万円

（今年システムのリニューアルをした為、1,260万円の予算を計上。それ以外の通常の運営費は155万円。主に図書カード50万円、感想文添削業務委託費50万円、消耗品（展示などの作成）50万円、その他講演会講師謝礼など5万円。）

苦労したこと・工夫したこと

- ・ SBW の推進団体 Soke Reading Project の活動を推進するため、専用の部屋を図書館内に設置した。
- ・ 読書展は、当初図書館職員も総出で大規模な設営を行なっていた。図書館職員の激減に伴い、レンタルの展示パネルを採用した。
- ・ ICT を活用したシステムとした際に、提出した感

想文は、図書館スタッフの承認を条件としてポイント付与をすることとした。当初は、図書館員が担当して添削していたが、現在は大学院学生を募集して、1通毎に金額を設定して業務委託契約を結んでいる。

始めてよかったと思うこと

- ・ 図書館の貸出冊数の増加傾向から、学生の読書量の増加に繋がったと分析している。図書館での各種イベントによって、図書館の入館者数も大幅に増加した。感想文の添削サービスを実施しているが、担当スタッフは非常に丁寧に対応しており、学生の文章力向上に貢献していると考ええる。

今後の課題は…？

2006年2007年と2000名を超えていたエントリー数（学生数約8000名）が、ここ数年500名前後になっている。学生アンケートによると、授業外の学修時間は増加している傾向にある。読書運動に割く時間が少なくなってきたのかもしれない。

エントリー数・感想文数とも今後如何に増やしていくか、魅力あるサービスを構築する事が必要である。どんなサービスも、続けると学生の興味が薄れるようである。絶え間ないサービス改善が、参加数を増やす事に繋がると考えている。しかしながら、あまりに複雑すぎた新企画が失敗したこともあった（チーム対抗の取り組みDoku☆ラリー）。

解りやすく、シンプルで、取り組みやすい運動を、今後も企画していきたい。



空間

学生

教員

他部署

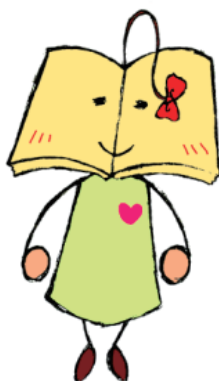
伝えたいこと

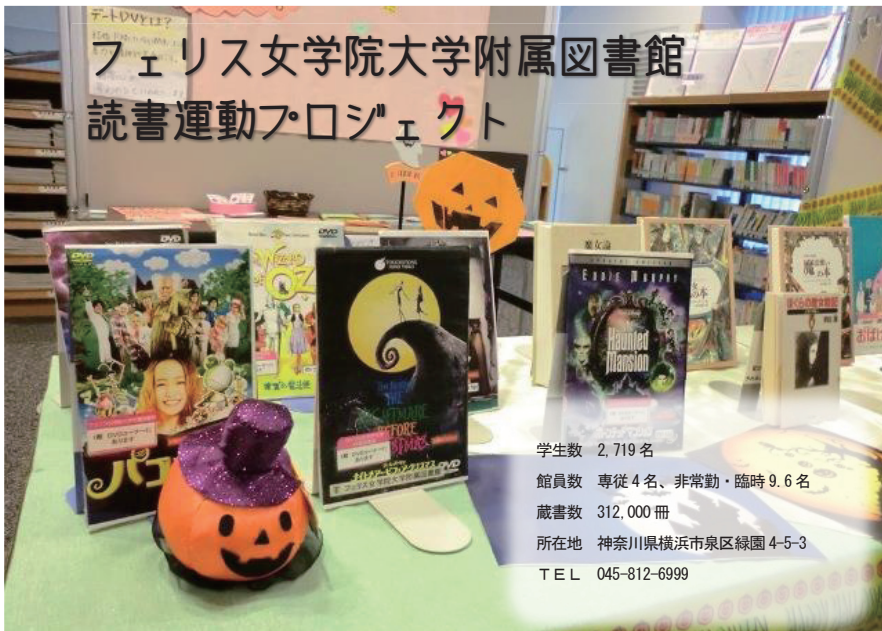
学生の学習意欲は想像以上に高い。そのニーズに応えられるサービスとすることが重要。その為に、学生自身にサービスの在り方を聞きながら、実際に運営にも携わってもらいたい形が望ましい。

本学では、当初無理のない形でスタートし、年々運動を進化させてきた。その過程で、学内の評価も上がり、さらに学外の評価も得て私立大学図書館協会賞の受賞に至った。最初から複雑にせずに、自館でできる範囲から進めることが重要だと考える。

当初、予算の心配もあったが、図書カードは財務部に寄付者から頂いたものが大量にあり、財務部では有効活用法を探していた。また、教育・学習活動支援センター (CETL) とのコラボレーション企画 (文章表現法などの課外講座) は、その後館内での大学院生 TA による学習相談窓口の設置につながった。

学内の関連部署の教員・職員と交流を重ねるなかで、自分の大学でしかできないサービスが可能となるのではないのでしょうか。





学生数 2,719名
 館員数 専従4名、非常勤・臨時9.6名
 蔵書数 312,000冊
 所在地 神奈川県横浜市泉区緑園4-5-3
 TEL 045-812-6999

内容

大学生の「読書」を推進するため、毎年テーマを決めて「読書会」を行う他、読みを表現する「朗読会」、「POP コンテスト」、「創作コンクール」などを定期的に開催する。

また、大学祭ではテーマに関する展示やクイズ、ブックカバーを製作するワークショップなどを開催し、参加対象を地域にも広げている。

学生プロジェクトチームのメンバーとして、学部生と大学院生が参加している。

概要

対象者：学部生、大学院生、教職員、卒業生、地域住民、オープンカレッジ生

実施期間：2002年4月～

実施場所：図書館

担当職員数：2名

スケジュール：

- ・読書会：年に3回程度、学生の昼休みに開催。内1回は、その年の読書運動科目を担当する教員を

講師として招いて、ナビゲータをしていただく。

- ・朗読会（学内）：講師を迎え、週に1回90分のレッスンをし、朗読チームとして活動し、大学祭で朗読会を開催する。午前に準備とリハーサルを行い、午後朗読会を実施。
- ・朗読会（学外）：神奈川近代文学館と共催で、近代文学会で朗読発表会を年1回開催する。2012年度は事前に会場を借りてリハーサルを行い、当日は、午前中に準備とリハーサル、午後朗読発表会を実施。
- ・大学祭：2ヶ月前から今年のテーマに即した展示発表準備を始め、前日に展示その他の準備をする。当日（2日間）は展示発表、クイズ、ワークショップ等を実施する。

きっかけ

発案者：2002年度の一人の図書館運営委員（教員）
 アメリカの新聞に掲載された、シカゴ市で成功した読書運動の記事を読んだ教員が、本学でも同様の読書活動を全学的に展開できないかと提案したのがきっかけ。おもしろも2001年5月に5階建ての独立棟

として図書館が新築オープンし、格段に環境が向上した図書館で何か新しい試みをしようという熱意が高まり、読書運動に取り組むことになった。

開始にあたって

準備期間：約6ヶ月

準備の概要：発案した教員と、各学部図書館運営委員1名ずつ、図書館職員1名の計5名のプロジェクトチームを作り、テーマとする一冊の本の選定や、運動の展開の手法を話し合った。また、退職上の図書館運営委員でもある大学事務部長が、この企画が非常に先進的でユニークであるとして賛同し、即学長に相談の上、300万円の予算を取り付けてくれた。

広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、放送（館内・館外）、デジタルサイネージ（館外）、図書館HP、プレスリリース、メール、学内印刷物への記事掲載、公共図書館へのポスター送付

費用・用途：年間300万円程度（ポスター報告書、作品集等の印刷・広報費約100万円、講演会講師謝礼・朗読講師謝金等約40万円、臨時職員（専従）人件費約130万円、軽読書用文庫本 約30万円）

苦労したこと・工夫したこと

- ・読書運動を図書館だけのものではなく、全学的なものとしたこと。学内で行われる他のイベントやプロジェクトとテーマを連携させて、読書への多角的な動機付けを行った。たとえば学部が主催した国際会議のテーマを取り上げて、展示会（図書だけでなく、写真展、美術展など）や上映会を行った。また、基礎教養総合課題科目に読書運動の正規科目を設け、毎年のテーマを授業で扱った。
- ・学生のプロジェクトチームを作り、学生の発案による企画やPRを行ったこと。各種イベントの実施を学生中心に行った。
- ・テーマを多角的に展開したこと。1冊の本がテーマになるが、その文学的側面だけでなく、作品の主題や背景を多角的にアプローチする企画を行った。社会問題を扱った作品では、弁護士や、NPO法人の方などの講演会や、写真展など、1冊の本から更に関心が広まる企画を実施した。
- ・読書をきっかけにした、学生の自己表現への飛躍

を目指した。随想コンクール、創作コンクール（詩、小説、戯曲）、読み聞かせ、朗読、朗読と音楽演奏のコラボレーション、作曲など、読書によって得たインスピレーションを、創造や他者に伝える表現へ発展させる企画を行った。

- ・学内にとどめず、広く読書の環を広げるという趣旨で、講演会、朗読会などのイベントを学外公開した。横浜市の読書推進プロジェクトとも連携し、合同でイベントに参加したほか、地域の保育園での読み聞かせや、文学館との共催で学外のホールで朗読会を行っている。
- ・文部科学省の補助金を獲得し、補助期間中は費用の大部分を賅った。

始めてよかったと思うこと

- ・カリキュラム支援が中心であった大学図書館にあって、読書をクローズアップすることで、従来所蔵していなかった現代作家の作品を読書用の文庫本として大量に購入した。多くの学生に読書を楽しんでもらえるようになり、貸出冊数が増加した。また、一冊の本をテーマとすることで、これまで関心の無かった分野にまで読書傾向が広がっていた。
- ・読書を発展させ、創造的な活動にまで広がったことで、学生の潜在的な能力を引き出すことができた。
- ・一部ではあるが、教員や他課の職員と連携した活動が行えている。

今後の課題は…？

- ・コンテストやコンクール応募者のさらなる拡大への模索。
- ・プロジェクトチームの学生たちの主体性をどう引き出していくか。
- ・より多くの学生を巻き込むためにはどのような方策があるか。

伝えたいこと

本学の読書運動の意図は、不読者層に働きかけて読書の環を広げることであるが、あらゆる動機付けを行い、ある程度は成功したと思う。しかし、その主な企画は、「読書会」「随想コンクール」「創作コンクール」「朗読」「読み聞かせ」など、もともと読書が好きな学生たちの意欲をより引き出すといったものが多かった。大学の読書運動としては相応しいともいえるが、“不読者層の開拓”としてはハードルが高かったのではないと思う。加えて、これらの運営にかかる職員の労力は膨大なものである。

読書の裾野を広げるためには、もっと軽い気持ちで楽しく、遊び感覚でできるサークル的な活動をする事、そして、学生たちが活動しているところを他の学生に見せること、面白そうだと思うさせることが必要だと思う。そのためにも、スタッフは柔軟な発想で試してみる事、あまり効果が見られない場合は、角度を変えてアプローチしてみるなどの工夫や切り替えが大切だと思う。



空間

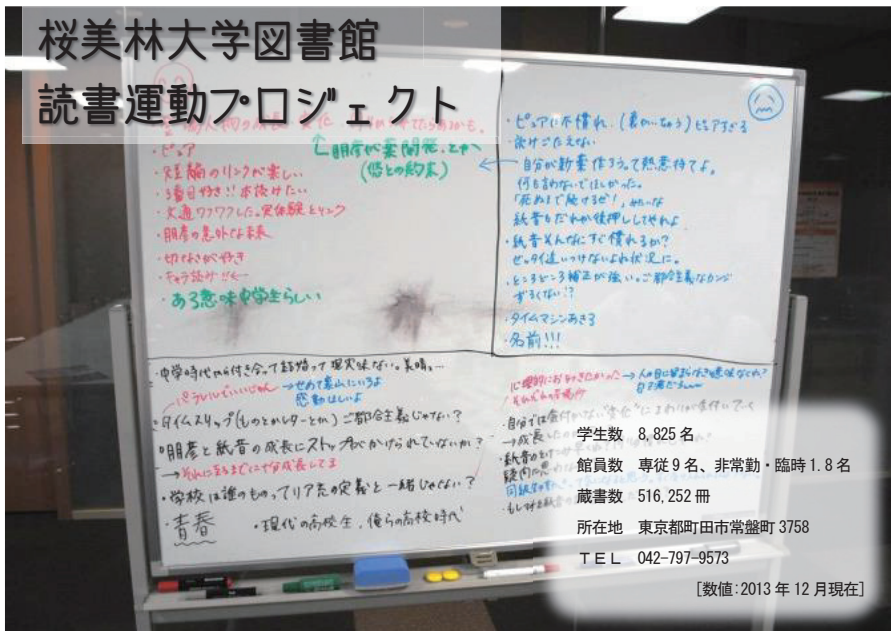
学生

教員

他部署

桜美林大学図書館

読書運動プロジェクト



[数値：2013年12月現在]

内容

学生、教員、図書館、大学生協の4者協同による読書推進運動。基本的なスタンスは、学生たちの自主性を尊重。学生たちが図書館という場を使って図書を紹介、読書会開催など、図書や読書に関する企画を立案、実行し、読書の楽しさ、面白さを学生の視点からアピールすることにより、大学図書館全体を盛り上げていく。

概要

対象者：学部生、大学院生、教職員
実施期間：年度ごとに実施
実施場所：図書館。イベントの場合は教室、ホールなどで行う。
担当職員数：2〜3名
スケジュール：
4月〜12月、1月〜3月：新入生勧誘。
図書館内に推薦図書コーナー設置（年3〜4回）。
11月：読書マラソン桜美林コメント大賞選考会。
12月：桜美林コメント大賞授賞式＆作家をゲストに招いてのトークイベント。

1月〜3月：年度報告書作成・発行。

その他日常的な作業として、読書会、大学生協読書マラソンコメント募集PR活動などを行う。

きっかけ

発案者：教員〜図書館メディアセンター

2005年秋、現在も活動の核となっている教員から、当時の図書館長に、現在の図書館読書運動プロジェクトの原案が提示され、図書館長から現場に実現に向けた具体化の指示がなされた。図書館としても学生の読書離れを食い止め、図書館利用促進のきっかけになることを期待し、翌2006年度から活動を始めた。

開始にあたって

準備期間：約3ヵ月（4〜5月に開始するとして、前年度の1〜2月頃から準備を始める。）
準備の概要：目標設定とそれに至るまでの企画立案。
学生、教員、図書館、大学生協4者の関わり方について模索。特に大学生協で展開されている『読書マラソン』のコメントカードを活用し、貸出冊数だけではなく「読書のコメント数」を数値目標

として掲げることにした。

広報：掲示物、(館内・館外)、チラシ(館内・館外)、
図書館ホームページ、Facebook、twitter
費用・用途：20万円程度(イベントゲスト謝礼5万円、報告書印刷費10万円、その他活動費(消耗品など))

苦労したこと・工夫したこと

学生の組織化と活動の継続が最大のポイントかつ苦労している点。初期は教員のゼミや授業、そこから派生した読書サークルを母体にしてきた。しかし、組織化や継続性がうまくいかないことも多々あり、現在は上記4者からそれぞれ委員が出て関わるという委員会制度を採っている。工夫したというわけではないが、大学生協の協力や、大学生協が持っている学生の組織化のノウハウに助けられたところは多い。

始めてよかったと思うこと

この運動に参加する読書好きの学生たちが、読書をキーワードとして様々な企画を立て、計画し、最終的に年末のコメント大賞表彰式や読書イベントを行うという経験をするにより、大きく成長していく姿を見ることができる。オススメ企画など、大学図書館の運営の一翼に学生が関わることで、大学図書館に興味や親しみを持つ学生が増えてきている。

今後の課題は…?

毎年の課題だが、学生が読書を通じて成長し、考えの幅や視野を広げ、読書会などの経験を通して「個としての読書」から「共有する読書」の楽しさや重要性を発見してもらいたい。

伝えたいこと

学生との協同を続けていくためには、とにかく学生の組織化と指導、継続が重要です。もう7年ほど続けてきましたが、今では運動を続けていくにあたり、学生たちに

- ①読書運動プロジェクトは遊びではない(でも遊びの要素は重要!)
- ②まじめに楽しくやる(仕事じゃないので)
- ③必ず新人を入れる(次に続ける意味でも大事!)

④スケジュール管理は学生がする

⑤イベントの企画、準備、運営、総括は、そのほとんどを学生たちがする(大人は、予算は出すけどできるだけ口も手も出さない)

というようになりました。

運営を続けていくためには、できるだけ学内で協力者を確保することが重要です。本学の場合で言うと、読書会の指導や運営、イベントの組み立てについては教員が、他部署への協力依頼の方法、企画書、依頼状、礼状等の書き方など事務的な指導については図書館員が行っています。大学生協は、店舗書籍売り場のコーナー設置、イベントゲストへのコンタクト等で協力してくれています。

図書館員が積極的に学生たちと関わりを持ちつつ、基本的には学生たちの意思を尊重し、時にはあえて失敗させるなど、図書館の本務業務をこなしながら面倒を見るのは大変ですが、学生たちが成長していく姿を見るのはとても楽しいものです。

空間

学生

教員

他部署





嘉悦大学情報メディアセンター 図書館学生スタッフLiss (Library Student Staff)

学生数 1,382名
館員数 専従1名、非常勤・臨時3.0名
蔵書数 86,000冊
所在地 東京都小平市花小金井南町2-8-4
TEL 042-466-1712

[数値:2013年12月現在]

内容

図書館のアルバイトスタッフとして、貸出・返却、返本、資料の装備等の業務や、広報活動を行う。図書館においての課題を発見し、解決することによるキャリア形成を目的としている。広報活動としては、今までに、館内での企画展示コーナーの設置、図書館新聞の発行、ブログ、twitter、facebookでの広報、古本市、ビブリオバトル、選書ツアーの実施、図書館ツアーの実施、利用案内動画の作成等を行っている。

概要

対象者：学部生
実施期間：2007年5月～
実施場所：主に図書館
担当職員数：2名

きっかけ

発案者：情報メディアセンター図書グループ
2006年当時、入館者数、貸出冊数が減少傾向にあ

り、通常の広報活動だけでなく、学生を取り込んだ形での広報活動をするために、まずは図書館ボランティアを募集した。図書館ボランティア活動では、選書ツアーの実施、学園祭での古本市の開催、企画展示コーナーの設置などを行った。2007年に学内での雇用創出による大学活性化のために、アルバイトスタッフの雇用を開始した。2007年からは、「働ける大学」をキャッチフレーズに実践的なキャリア経験、半学半教実践の場として、全学的に学生の雇用を開始し、図書館もその一つとしての活動を行っている。

開始にあたって

準備期間：約12ヶ月
準備の概要：業務内容の検討、予算の確保、アルバイト募集、面接、採用、研修、業務管理
広報：掲示物（館内・館外）、Facebook、twitter、メール、学内専用サイト

苦労したこと・工夫したこと

学生自身が課題を発見し、解決しながら職業経験を積むことによるキャリア形成をメインとしている

ので、まずは課題を発見し、ミーティング等で解決方法を検討、企画書を書いて実行するというプロセスを踏んで企画を行う。これらを実施するために、随時職員がアドバイス等を行っており、かなりの労力をかけている。

始めてよかったと思うこと

アルバイト学生の成長としては、利用者や職員と関わることによるコミュニケーション能力の向上、課題発見や解決能力の向上、企画書等の書類作成スキルの取得、ミーティング等における会議力やリーダーシップ能力の向上が挙げられる。積極的に業務に関わることにより、学内だけでなく学外との交流を望むようになり、他大学の図書館学生アルバイトスタッフやボランティアスタッフとの交流や図書館総合展でのポスターセッションへの参加など、活動範囲が広がっている。

図書館運営においては、図書館のサービスに詳しい学生が増えることによって、他の学生へもサービスが伝授されることによる利用者の増加が挙げられる。同じ企画を行っても、職員が行うよりも、学生が行ったほうが教員や学生に対する注目度や影響が大きい。学生目線での広報誌の発行や企画棚の作成により、企画本の貸出冊数が増加した。

今後の課題は…？

現在アルバイト学生が12名いるが、通常はカウンターでの1人勤務なので、全員が集まる機会が少ない。月1回の全体ミーティング、長期休暇（夏期および春期）に行う一斉勤務やミーティングの機会を設けているが、個々の仕事を把握することが難しい。長期休暇期間に前期の反省および次期の目標を明確にして、通常の勤務を行っていきたい。卒業や退職により、定期的に学生アルバイトの入れ替えがある。人員の増減によってサービス内容が変化するので、リーダーを中心とした学生および職員で、業務の調整を行う必要がある。

伝えたいこと

通常の業務を行うのであれば、学生でないアルバイトを雇用したほうが管理は楽だと思います。また、部署内、部署外の調整や予算の確保も必要になります。大学や図書館のミッションと照らし合わせて考えたときに、学生とともに働くことでそのミッションがより効果的に遂行するのであれば、学生と一緒に働くのは楽しいので、ぜひお勧めします。



白百合女子大学図書館 図書館ピアサポーター LiLiA



学生数 2,103名
館員数 専従8名、非常勤・臨時3.3名
蔵書数 272,000冊
所在地 東京都調布市緑ヶ丘1-25
TEL 03-3326-5143

内容

学生がピア（仲間）として、主な利用者である学生を支援するサポーターとなる制度。

館内見回りではPCとその周辺の整理やキャレルの整頓、書架整理を行う。また、利用者の質問・問い合わせの最初の窓口となり、回答可能な適切なところへ案内する。

図書館ツアー、選書ツアー、リエゾン講演会などの図書館イベントの手伝いを行うほか、すべての活動をLiLiATimesというフリーペーパーにまとめている（年間2回発行）。

LiLiAは、Library Liaison Assistantの略であり、Liaisonはフランス語でつながるを意味する。

概要

対象者：すべての利用者
実施期間：2010年10月～
実施場所：図書館内
担当職員数：2名

きっかけ

発案者：図書館事務部

図書館長より提案のあったピアサポーター構想を図書館で導入することになった。学生と図書館とを学生がつなげる役割を持つ、ボランティア組織を形成したいと考えた。

開始にあたって

準備期間：約6ヶ月

準備の概要：

- ・他大学図書館見学
- ・コンセプト決定
- ・キャラクターコンペ

広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、図書館HP

費用・用途：7万円程度（メンバー用のエプロン）

苦労したこと・工夫したこと

設立当初はコアメンバーの確保に苦労した。

始めてよかったと思うこと

- ・図書館をより深く知りたい学生や、司書資格取得を目指す学生に、図書館を一層気に入ってもらえること。
- ・図書館をより使いやすくするためのさまざまな指摘をしてもらえること。

今後の課題は…？

上級生が下級生を引っ張るような自立した組織を目指しているが、まだその段階になっていない。そのために担当職員が活動の指揮をとっている。

伝えたいこと

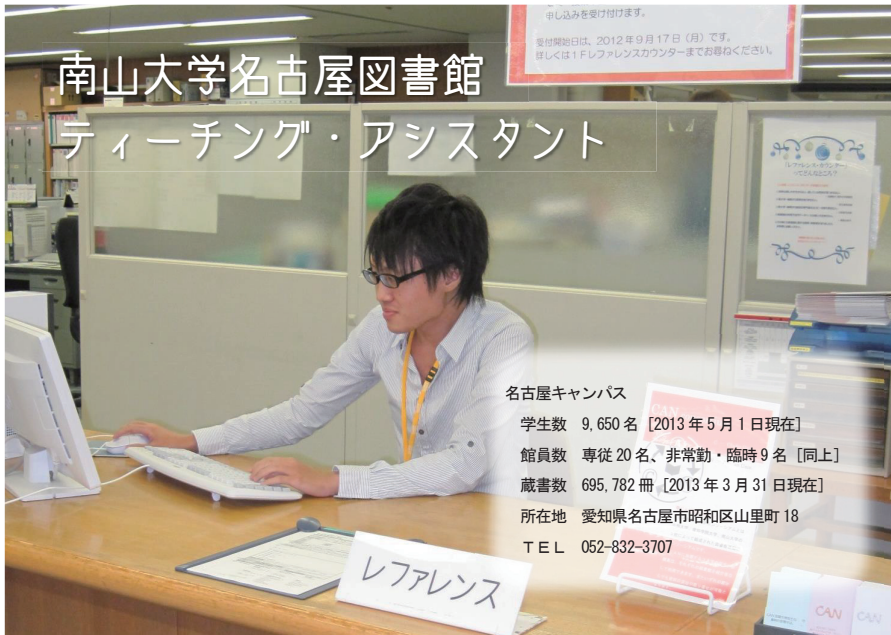
活動意欲を損なわないように、常に新鮮で、学習できる活動を目指してください。

空間

学生

教員

他部署



南山大学名古屋図書館 ティーチング・アシスタント

名古屋キャンパス
 学生数 9,650名 [2013年5月1日現在]
 館員数 専従20名、非常勤・臨時9名 [同上]
 蔵書数 695,782冊 [2013年3月31日現在]
 所在地 愛知県名古屋市長和区山里町18
 TEL 052-832-3707

内容

院生によるティーチング・アシスタント。サービスの提供(レファレンスや図書館利用講習会)。

概要

対象者・実施場所: すべての利用者(レファレンス・カウンター)、学部生・教員(図書館講習室)
 実施期間: 2012年4月～

きっかけ

発案者: 図書館事務課閲覧・参考係
 講習会講師の人手不足解消、および、ラーニング・commons構想を見据えた人材確保のため。

開始にあたって

準備期間: 約1ヶ月
 準備の概要:
 ・大学院生の募集、採用、雇用手続
 ・図書館利用講習会講師としての事前研修を6日間(延べ78時間)実施

広報: 掲示物(館内)、図書館 HP、学内印刷物への記事掲載

費用・用途: 院生 TA (2012年度3名、2013年度5名)を雇用する人件費

苦労したこと・工夫したこと

苦労した点: ティーチング・アシスタント(TA)のスケジュール調整

工夫した点:

- ・すべてのTAができるだけ均一なサービスを提供できるように職員がサポートを行っている(TAの作成資料のチェック、受講者アンケートの確認等)。
- ・研修終了時のプログラムとして模擬講習会を実施し、資料の作成をはじめとする講習会準備、実際の講師ぶりについて、職員の講評を受けたうえで本番に臨んだ。

始めてよかったと思うこと

- ・職員とは異なる視点や、学部生との距離感の近さが十分に活かされた講習会を実施することができた。

- ・ 院生の専攻分野と関連性の強い学部学科の講習会を担当してもらうことにより、受講者および教員から高い評価を得ることができた。

今後の課題は…？

すべての利用者に対して、均一かつ質の高いサービスを提供するために、人材育成をどのように行うか。

伝えたいこと

未だ模索中で、他館へのアドバイスまでには至りません。

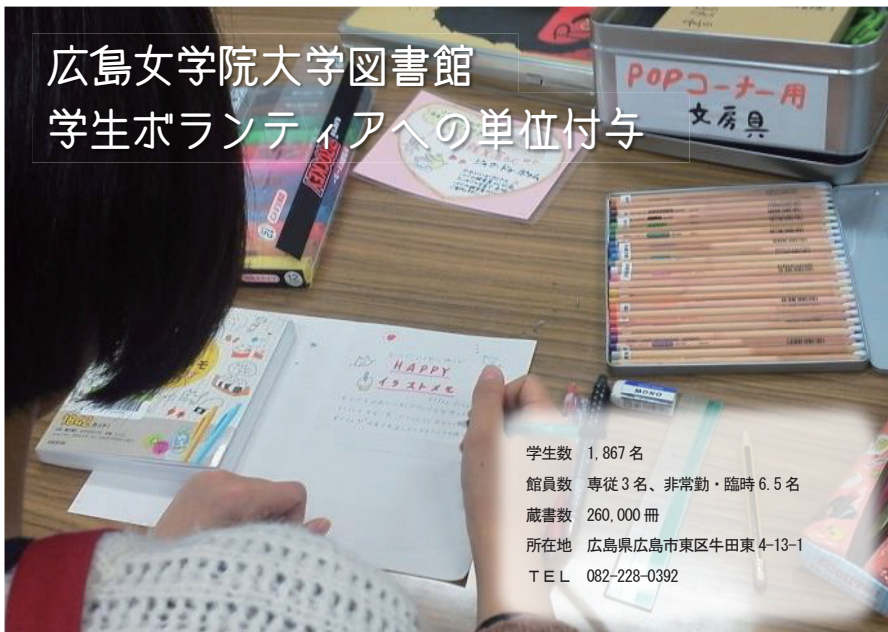
空間

学生

教員

他部署

広島女学院大学図書館 学生ボランティアへの単位付与



学生数 1,867名
館員数 専従3名、非常勤・臨時6.5名
蔵書数 260,000冊
所在地 広島県広島市東区牛田東4-13-1
TEL 082-228-0392

内容

在学中に40時間、図書館でボランティアをすることにより1単位を取得できるサービス。

カリキュラム変更に伴い、廃止となった。2012年度以降に入学した学生（現1年、2年生）にはこのサービスは摘要されない。但し、2011年度以前に入学した学生は単位取得可能となっている。

概要

対象者：学部生・大学院生
実施期間：2008年4月～2015年3月
実施場所：図書館
担当職員数：1名

きっかけ

発案者：図書館
学内にボランティア関連の授業科目ができたことにより、図書館でもボランティアしている学生がいるということで始まった。

開始にあたって

準備の概要：ボランティア希望者1人毎のリスト(A4サイズ)を作成。

広報：掲示物（館内）、図書館HP、学内印刷物への記事掲載

費用：0円

苦労したこと・工夫したこと

学生は授業の空きを利用してボランティアをするので、だいたいの予定を聞いておき準備をした。

学生は来たり来なかったり、予定外の日に来ることもあり、急なときは何をしてもらおうかとあわてることがあった。

始めてよかったと思うこと

「ボランティアをすることにより図書館に関心を持つようになり以前より利用することが多くなった」、「職員がいろんな仕事をしていることがわかった」等と学生からの声を聞いたとき良かったと思った。

- ・メリットとしては、学生はカウンターにいる職員しか知らないことが多いと気づくことができた。

伝えたいこと

当館では学生アルバイトもいるので、やってもらうことを区別するようにしました。



空間

学生

教員

他部署



内容

ライブラリーサポーターとは、学生の視点でより魅力的な図書館を作るために活動する「図書館学生ボランティア」である。

- ・人数：市ヶ谷19名、多摩10名、小金井6名（2013年度）※活動はキャンパスごと
（以下の設問は多摩図書館ライブラリーサポーターについて回答）
- ・活動期間：毎年5月～翌年1月（任期1年間）
- ・募集：4～5月（公募制）
- ・活動内容
 - ①懇談会（年2～3回）：学生と図書館職員で図書館サービスについて意見交換を行う。学生の図書館サービスへの評価を改善に活かす。
 - ②選書ツアー（年1～2回）：学生が書店へ行き、図書館で購入する図書を選ぶ。選書した図書は「ライブラリーサポーター選書本」として展示を行う。
 - ③その他：図書館業務体験、テーマ展示、読書会等。

概要

- 対象者：学部生
 実施期間：2008年6月～（2013年度第6期）
 実施場所：法政大学多摩図書館
 担当職員数：2名
 スケジュール：
 （選書ツアーのスケジュール）
- ・事前準備
 - ①日程調整（学生、書店）
 - ②学生へ選書基準等を説明
 - ・当日

9:45 書店前集合
 （出席確認、選書基準と注意点を再度説明）

10:00 入店
 （書店員よりバーコードリーダーの使い方説明を受ける）

10:10 選書開始
 （職員は学生の様子を写真撮影※書店と学生に事前に確認する）

11:50 選書終了

12:00 解散

・展示

- ①選書データを書店から受領後、重複や発注可否を確認し、発注
- ②約1か月後、納品
- ③選書した学生に図書を貸し出し、図書紹介のPOPを作成してもらう
- ④「選書ツアー本」としてPOPとあわせて図書を図書館内で展示。

きっかり

発案者：図書館事務部

学生の満足度を上げるための方策の一つとして、学生の図書館への働きかけを生み出し、それを図書館サービスの改善に活かす目的で始めた。

開始にあたって

準備期間：約3ヶ月

準備の概要：書店との打合わせ（選書ツアーに関して）、広報活動（図書館ホームページ、ポスター、ちらし、教員への働きかけ等）

広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、放送（館内）、図書館HP、twitter、学内印刷物への記事掲載。

費用・用途：16万円程度（選書ツアー図書購入費：約15万円、活動費：約1万円＝1,000円分図書カード×10人）

苦労したこと・工夫したこと

学生を集めるため、公募だけではなく、司書課程等の教員に学生を推薦してもらえるよう働きかけた。

始めてよかったと思うこと

- ・懇談会等で学生の図書館に対する率直な意見を聞くことができ、学生の視点を取り入れた図書館の改善を行うことができる。
- ・選書ツアーを通して、学生が求める図書資料の傾向を知ることができる。
- ・学生選書図書の展示や、学生が企画したテーマ展示を実施することで、学生の図書館利用を促進できる。
- ・活動を通して、学生が図書館に対する理解を深め、コミュニケーション能力や企画立案能力が向上す

るなど、学生の成長につながっている。

今後の課題は…？

- ・学生の主体性を引き出す運営方法や、職員の活動への関わり方
- ・活動における成果の評価方法の検討
- ・学内外への発信力の強化

伝えたいこと

より利用してもらえる図書館を作るには、利用者の視点を入れること、即ち学生の協力が不可欠です。すぐに結果は出ないので、試行錯誤を繰り返しながら学生の力を引き出すことが必要です。特に学生のボランティア精神に依存するところがあるので、如何に学生をやる気にさせるかがポイントです。学生と協働して魅力的な図書館を作ってください。

空間

学生

教員

他部署



立教大学図書館 ラーニングアドバイザー(LA)

学生数 21,246 名
 館員数 専従 29 名、非常勤・臨時 9 名
 蔵書数 1,780,000 冊
 所在地 東京都豊島区西池袋 3-34-1
 TEL 03-3985-2628

内容

大学院生によるライティング支援。

図書館を上手に利用する学習の仕方やレポート・論文作成について、大学院学生がアドバイスするサービスを池袋図書館と新座図書館で行っている。

「レポートの書き方が分からない」、「レポートのための情報収集の仕方がわからない」そんな悩みを持つ学部学生の質問や相談に対して、ラーニングアドバイザーが自らの学習・研究経験をもとに図書館の資料を用いながら丁寧にアドバイスしている。

概要

対象者：主として学部生

実施期間：授業・試験期間（4～7月、10～1月）

平日 12:00～17:00

土曜 9:00～12:30（試験期のみ）

実施場所：池袋図書館 2F カウンター、新座図書館 2F「ラーニング・コモンズ」

担当職員数：3名

きっかけ

発案者：図書館利用支援課

図書館における情報リテラシー教育支援の一環として、米国大学図書館での一般的なライティングサービスに倣い、学部学生を対象としたラーニングアドバイザー制度を導入した。

開始にあたって

準備期間：約6ヶ月

準備の概要：

- ・図書館運営の決議機関（図書館運営委員会）・部長会に提案・了承を経て、アドバイザーを採用。
- ・PC、プリンター、レファレンスブック、文房具などの備品準備。

広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、デジタルサイネージ（館内）、図書館 HP、学内印刷物への記事掲載

費用・用途：0円

※人件費別（人件費：時給1,500円×5日×35週×3名）

苦勞したこと・工夫したこと

アドバイザーと図書館スタッフ間でのコミュニケーションを密にし、アドバイザーへのサポート体制を強化した。

始めてよかったと思うこと

レファレンスカウンターにはなかなか敷居が高くて相談に訪れない学生にも、気軽に相談にのってもらえる窓口の一つを用意でき、利用者の多様なニーズを吸い上げることが出来ている。

今後の課題は…？

利用者数の伸びは少ない。ある一定数の相談者ニーズに丁寧に応えるとともに、学部教育と連携してこのサービスの活性化を図っていくことが今後の課題である。

伝えたいこと

「ライティング支援」を図書館で行う意義とコンセプトを明確にすることが大切だと考えます。本学では、添削や内容に踏み込んだアドバイス（教育的な指導）は行わないことを前提にしています。

また、サービス開始当初はジェネラルな存在として当サービスを位置づけたため、アドバイザーの研究分野をあえて公開してこなかったという経緯があります。

その後導入した新座キャンパスでは、学部の要望に合わせて（専門知識が求められる分野であるため）、専門的な内容に特化した支援も行っています。

サービスの在り方は、利用者のニーズにあわせて柔軟に対応していく必要がありますが、アドバイザーと図書館スタッフがコミュニケーションを密にし、常にサービス内容と実態を確認していくことが重要だと考えます。

立命館大学図書館 学生ライブラリースタッフ



学生数 39,782 名
館員数 専従 19 名、非常勤・臨時 15 名
蔵書数 2,947,000 冊
所在地 京都府京都市北区等持院北町 56-1
TEL 075-465-8217

内容

図書館の運営に不可欠な配架や書架整理など基礎的な業務と学生ライブラリースタッフ（以下、LS と表記）が主体的に行うプロジェクト業務（図書紹介や館内ポスター作成など）の主に 2 つの業務を行っている。詳細な業務内容については下記サイトを参照。

(http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/mr/lib/staff/library_staff.html)

概要

対象者：すべての利用者
実施期間：2001 年 12 月～
実施場所：図書館内
担当職員数：4 名（衣笠キャンパス 2 名、びわこ・くさつキャンパス 2 名）

きっかけ

発案者：図書館サービス課
2001 年に学生の「学びと成長」を実現させ、基礎

学力の充実、意欲と力のある学生の成長と進路・就職における高い水準での実現を図るため、LS 制度を導入することとなった。

開始にあたって

準備期間：約 1 年

準備の概要：

- ・毎年 11 月に新人スタッフを採用。数ヶ月前から採用する人数、広報等を大学職員が検討する。
 - ・新人スタッフの研修はプログラムや資料、講師などすべてを LS が行っており、その準備も数ヶ月前から LS によって実施。
 - ・11 月以降は LS が研修・試験を実施し、大学職員で新人スタッフの進捗状況を管理する。
- 広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、放送（館内）、図書館 HP、学生が閲覧する Web 上の掲示板
- 費用・用途：大学予算（配架や書架整理などの基本的な業務に対して支払う費用が大半）

苦労したこと・工夫したこと

大学側で意欲的な学生を採用し、その後の研修においてはLSが主体的に研修の準備・実施を行うようにしている点。

研修の準備を通じて、上期生から下期生へ知識やノウハウの伝承が行なわれ、主体的に組織を引っ張らなければならないという意識の醸成を図ると共に、研修を通じてピア・ラーニングを実践している。

始めてよかったと思うこと

- ・LSがガイダンスを実施したり、図書館HPの一部を運営したりといった姿を図書館利用者の学生に見せることで、学生の活動・学習姿勢を刺激することに繋がる。
- ・LS自身も業務を通じて成長しており、主体的に行動する意欲の高い学生の創出に繋がっている。

今後の課題は…？

主体的な活動を実践し、新たなことにチャレンジする意欲的な集団を目指すと共に、業務効率を意識し、質的高度化を図っていける集団作りを大学職員が支援する必要があると考える。



伝えたいこと

学生スタッフ制度を導入する目的を明確にしておく必要があります。

図書館業務を業者に委託している場合、委託業者との業務内容の切り分けを図る必要があるが、こういった目的で制度を導入したかによって学生スタッフが行う業務内容も大きく変わってきます。

また、学生に業務をこなしてもらう際には細かなマニュアルの整備も不可欠です。

空間

学生

教員

他部署



和光大学附属梅根記念図書・情報館

Let's Read Project



学生数 3,195名
館員数 専従11名、非常勤・臨時4.8名
蔵書数 500,000冊
所在地 東京都町田市金井町2160
TEL 044-989-7494

内容

本や読書を媒介としたさまざまな活動を、図書・情報館と学生が協働して企画・運営している。活動内容としては、蔵書を利用した企画本棚、夏休みを利用した国立国会図書館や他大学図書館、古書店などの見学ツアー、学生編集による機関紙「Counter」の発行、新入生に読ませたい本を選ぶための選書ツアー（紀伊國屋書店新宿本店）、年間活動をまとめた冊子「LRP レポート」の発行、知的書評対戦「ピブリオバトル」の開催等が挙げられる。

概要

対象者：学部生、大学院生
実施期間：2008年7月～
実施場所：和光大学附属梅根記念図書・情報館（2011年12月より館内にLRPルーム設置。以降は学生メンバーの活動はLRPルームを中心に行う）
担当職員数：3名（2013年現在）
スケジュール（選書ツアー当日）：
・選書ツアーを依頼している書店前集合。
・事前に分けたグループごとに選書をする。グループごとに分野、金額を決めている。

- ・選書後集合し、それぞれ選んだ本をプレゼンテーションして、意見交換。たとえば「新入生歓迎本」というテーマであれば、そのテーマにふさわしい内容であるか、全体で選び直す。
- ・選んだ本を書店に納品依頼（および重複調査）し、選ばれなかった本は戻す。

きっかけ

発案者：学生企画は発足以前より図書館として検討していた。選書ツアーは図書館内の選書委員会（2008年当時）。現在はLRPワーキングメンバーが担当。

2004年より和光大学内部における図書館の存在意義を高め、ひいては、「この図書館を社会的に高く評価される図書館に」という目標を掲げて、さまざまな取り組みを進めてきた。学内外の組織や人々との連携を模索しながら、シンポジウム、講演会、講座、冊子の発行、各種ガイダンスなどを実現。

さらに学生をもっと主体的に図書館と関わらせるための仕組みができないかと検討する中で、2008年5月に選書ツアーが提案された。この選書ツアーをきっかけに学生の輪を広げたいこうと、会の名称を「Let's Read Project」として2008年7月に立ち

上げた。「本を読むということ、その醍醐味をほかの誰かと分かち合うということ、図書館という空間をまるごと味わうということ—そんな、ちょっとぜいたくでステキなことが身近なものとなるように…(HPより抜粋)」と呼びかけた。

開始にあたって

準備期間：約1ヶ月

準備の概要：2008年7月初旬に職員のLRPワーキングを立ち上げ、LRPの目標、当面の活動内容計画等について話し合った(事前に大枠の計画を立てていた)。7/7より学生メンバー募集。ポスター等には「メンバー募集」「お気に入りの本棚を作りませんか」「選書ツアーに行こう」と呼びかけた。7/16申込締切、同日昼休みに学生メンバーのミーティングを開き、7/23第2回目のミーティングで選書ツアーの日程等(8/19、8/29)を決定した。広報：掲示物(館内・館外)、チラシ(館内)、デジタルサイネージ(館内)、図書館HP、メール、学内印刷物への記事掲載

苦労したこと・工夫したこと

- ・学生メンバーのミーティングを、昼休みにランチ付きで実施した。
- ・選書ツアーに気軽に参加してもらうため、ポスターを作成し「図書館のお金で本が買える」ということを前面に出し、参加を促した。
- ・心当たりのある教員のゼミにも声をかけてもらった。
- ・書店(紀伊國屋)の協力を得て、店内で学生が選書後に、複本をチェックしていただいた。
- ・1回目は書店の角で学生同士プレゼンをさせたところ白熱し、書店の担当の方がバックヤードを用意してくださった。互いに講評しあうことで、より内容のある選書を行うことができただけでなく、学生同士の距離も縮まった。
- ・事務室内の選書コーナーの一部を、メンバーのミーティング・作業の場(「部室」のような場所)として提供した。作業道具などを用意したこともあり、作業がしやすくなった。

始めてよかったと思うこと

- ・選書ツアー：普段職員が選書しないような本を選書できる。「学生が選んだ本」ということで、新

入生への訴求力も高い。利用促進の面で学生の視点を取り入れて選書できる。

- ・企画展示：職員が思いもよらないユニークな視点から、既存の蔵書を振り返ることができる。
- ・広報：機関紙「Counter」は学生独自の視点による自由な紙面構成で、図書館に親しみを持ってもらい、利用者にとっての図書館への「敷居」を低くする。年1回発行の活動報告集「LRPレポート」は、年間の活動記録になると共に、学内(新入生)、学外向けへの広報として利用している。
- ・見学ツアー(夏休み開催)：他の図書館を見学することによって、学生と共に展示方法や資料について学ぶことができる。
- ・ビブリオバトル(おすすめの本を1人5分で紹介する書評合戦)：館内の開かれたスペースで行うことにより、外部の目にも触れるようになってきている。LRP内外の人に本や読書の楽しさにふれてもらうきっかけになる。人前に出て、プレゼンテーションをする機会になる。

今後の課題は…?

- ・学生とともに、職員がさまざまなイベントを企画するために、学生同士、および学生と職員の交流に努めたい。
- ・LRPの活動は、学生主導を主としており、職員はサポートという運営スタンスを取っているが、職員のリードが必要な場合もある。いかにして学生主導を確立してゆかが課題である。

伝えたいこと

- ・学生主体の企画の継続性について、学生の入れ替わりがあるため、職員の働きかけが重要になります。また、内容の精査、活動の主体となる学生の育成など、学生が積極的に参加できる活動にするために職員からの仕掛けが必要です。
- ・学生協働の活動というのは、日頃触れることの少ない利用者のニーズや感性に触発されるという大きいメリットがあります。反面、学生と協働する体制や時間に労力を奪われる、コミュニケーション不足のために活動が円滑に進まなくなる、ということにもなりかねません。職員・学生ともに、活動する意義を常に確認するとともに、モチベーションを高めて持続する心構えが必要だと感じます。

学習院大学図書館 アカデミック・スキルズ



学生数 8,887名
館員数 専従18名、非常勤・臨時12.5名
蔵書数 1,760,000冊
所在地 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-3986-0221

[数値：平成25年5月1日現在]

内容

課題の発見、情報収集・分析、レポート執筆、プレゼンテーションなどのアカデミック・スキルを身につけることを目的とする授業を図書館から提案し、教員とともに担当している。レポートの書き方の指導経験を持つ教員が担当する半期の授業とし、その中に情報検索技術の実習を組み込み、図書館員が担当する。

図書館担当回は、「情報を調べる」というテーマのもとに、データベース、学術雑誌などの多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用する情報リテラシーの指導を行っている。2012年度より、ライティングの個別添削を行わない講義型を新たに開講し、現在前期に以下の2コマが設置されている。

- ・「アカデミック・スキルズ(個別指導重視型)」2011年度開講(半期全15回のうち、図書館担当が3回)
- ・「アカデミック・スキルズ(講義型)」2012年度開講(半期全15回のうち、図書館担当が2回)

概要

対象者：学部生
実施期間：2011年4月～
実施場所：学習院大学内教室
担当職員数：2～5名(年度により異なる)

きっかけ

発案者：大学図書館情報サービス課

図書館で日々学生と対応していると、学生が大学における学習の基礎となるアカデミック・スキルを身につけていない、という現状にたびたび遭遇する。例えば、授業で論文を探そうに言われたが探し方がわからない、授業で指定された図書を図書館で探せない(OPACの使い方がわからない)、また卒論の仕上げ段階になっても引用文献の書き方がわからない、などである。

一方、図書館においては、日常的に情報検索の指導を行うのに加え、定期的に各種データベースの使い方やレポートの書き方に関するセミナーを開催している。実際に参加した学生によるセミナーの評価

は高く、検索技術等の習得は学習において必須であると捉えられている。

このような背景から、アカデミック・スキルを入学後できるだけ早い段階で身につけてもらうために、課題の発見、情報収集と分析、意見の表明（文書・口頭）といった問題解決の流れを教える授業の開設を提案した。

開始にあたって

準備期間：約1年5ヶ月

準備の概要：

- ・企画目的の明確化
- ・他大学における事例調査
- ・利用者教育の授業化企画案作成
- ・授業シラバス作成
- ・教員候補者の選出
- ・学内における授業設置申請書提出
- ・授業コンテンツ（パワーポイント、プレテスト、ポストテスト）作成

広報：掲示、チラシ、図書館ホームページ、新入生オリエンテーション内での案内等

費用：0円

苦労したこと・工夫したこと

- ・図書館員だけで授業を行うのではなく、教員の授業に図書館員が参加するという形をとったこと。
- ・「情報を調べる」を単独に扱うのではなく、レポートライティングの流れの中に位置づけたこと。

始めてよかったと思うこと

- ・授業内の課題に即し、情報検索の方法、検索した情報の入手、入手した情報の分析という「情報収集の流れ」をレポートライティングにおける過程の一部として位置づけることで、より実践的な習得の場を提供できた。
- ・図書館主催のセミナーでは説明することが難しい情報の種類や特徴、情報の評価、およびレポートライティングに必要とされる参考文献リストの書き方等の基本的な知識を体系的に学ぶ機会を提供できた。

今後の課題は…？

- ・授業内の課題により密着した、具体的な情報収集

の事例紹介や、単なるデータベースの検索方法の説明にとどまらず、収集した情報を元に、学生自身が「自ら考える」動機づけとなるような進め方を教員と共に模索している。

伝えたいこと

- ・図書館員のみで授業を行う場合、成績評価を誰が行うか等、課題もあります。企画の段階で明確にしておくことが必要です。
- ・情報リテラシー教育の重要性を理解して下さる教員に趣旨を理解していただき、協働による授業設置に取り組んでみてはいかがでしょうか。

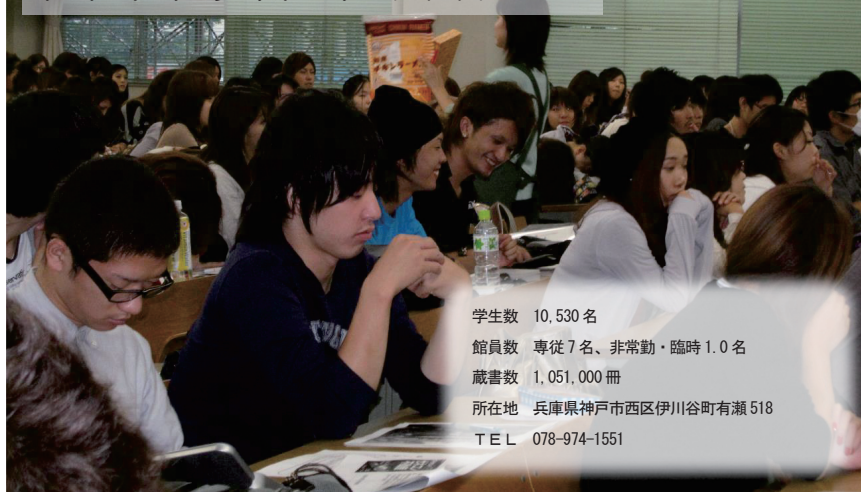
空間

学生

教員

他部署

神戸学院大学 レファレンス・デリバリー



学生数 10,530名
館員数 専従7名、非常勤・臨時1.0名
蔵書数 1,051,000冊
所在地 兵庫県神戸市西区伊川谷町有瀬518
TEL 078-974-1551

内容

教員の授業内容にあわせて、必要な図書を教室まで運び、必要に応じて図書に関しての説明を加えるサービス。

授業内容と必要な資料についての、教員との事前の綿密な打合せが必要となる。

概要

対象者：学部生、大学院生、教員

実施期間：2008年4月～

実施場所：当該授業の教室

担当職員数：4名

きっかけ

発案者：図書館利用サービス部門

図書館による、教員への支援の1つとして開始した。教員の研究支援のみでなく、教員による学生に対する支援のお手伝いをすることが目的である。

開始にあたって

準備の概要：

レファレンスの知識の向上には常に力を注ぐ必要がある。

広報：掲示物チラシ（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、図書館HP

費用：特になし

苦労したこと・工夫したこと

- ・教員からの依頼により成り立つ企画であることから、常に、図書館を利用する教員との連携を密にし、図書館で行っていることについてのアピールをしている必要がある。

始めてよかったと思うこと

- ・図書館を利用しない学生に対しても、図書館について知らせることができ、図書館の利用を促進できる。
- ・教員のお手伝いをすることにより、教員の持つ図書館についてのイメージを変えることができる。

- ・構内を書籍を持って移動することにより、図書館についての広報の役割も示せる。

今後の課題は…？

現在は、依頼する教員の数は多くなく、繰り返し利用いただく教員に限られてきているため、広報を工夫して利用教員を増やしていく必要がある。

伝えたいこと

教員への周知を図る必要があります。理解していただければ、利用は継続してあるものと思われます。

空間

学生

教員

他部署

神戸芸術工科大学図書館 ビブリオテクレチャー



学生数 1,826名
館員数 専従6名、非常勤・臨時1.0名
蔵書数 130,000冊
所在地 兵庫県神戸市西区学園西町8-1-1
TEL 078-794-5045

内容

図書館で購入した特別な図書（または視聴覚資料）について、おおよそ年2回、教員によるレクチャーを開催。

概要

対象者：すべての利用者
実施期間：2010年6月～
実施場所：AV室（図書館閲覧室内）
担当職員数：1名
スケジュール：
講演：17:00～18:00
懇親会：18:00～19:00

きっかけ

発案者：前図書館長
教員からの推薦（依頼）で稀覯本（高額図書を含む）を購入する場合は、解説レクチャーを必ず開催していただくようにすれば、資料の有効活用につながるとの提案があった。現在は稀覯本に限ってはい

ない。

開始にあたって

準備期間：約3ヶ月
準備の概要：教員との調整（日程、配布資料等作成依頼他）、ポスター及びチラシの作成、広報活動、懇親会準備等
広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、図書館ホームページ、メール、twitter
費用・用途：1回につき、1.7万円程度（チラシ1.1万円、懇親会（菓子・飲料他）6,000円）

苦労したこと・工夫したこと

大学の特徴上、レクチャーを担当いただく教員からポスターやチラシのデザインについて一定のレベルを求められるため、多忙な助手（教員）に依頼する必要があり、難しかった。聴講に参加してもらう学生の確保にも苦労した。

始めてよかったと思うこと

普段は閉架資料にしているため自由に手に取る

ことができない資料を、専門的な解説レクチャーとともに提供することができ、学生に喜ばれた。

今後の課題は…？

- ・特別図書を購入する予算の確保。
- ・多忙な教員に解説レクチャーを引き受けていただくことが困難。
- ・学生が参加できる日程の調整。
- ・ポスターやチラシの作成。

伝えたいこと

自館でもできていないことだが、普段から教員との間で図書館の企画・運営に協力していただける関係づくりが必要。

空間

学生

教員

他部署

静岡産業大学 藤枝図書館

Salle de Génie (サル ド ジェニ) モーニングカフェ



藤枝キャンパス

学生数 987名

館員数 専従1名、非常勤・臨時1.0名

蔵書数 55,000冊

所在地 静岡県藤枝市駿河台 4-1-1

T E L 054-646-5441

内容

教員をゲストスピーカーに迎え、軽食スタイルで気軽に教職員が参加できる勉強会を開催。図書館に増設されたアクティブラーニングスペース “Salle de Génie” を会場にすることで、教職員へ新しい図書館サービスの周知を行い、交流の場とする。学部長の主催であり、図書館では場所を貸し出すスタンスである。

概要

対象者：教職員

実施期間：不定期開催

実施場所：図書館内アクティブラーニングスペース
Salle de Génie (サル ド ジェニ)

担当職員数：3名

きっかけ

発案者：学部長

2012年度に増設されたスペースの周知と、学部長発案の“世の中の流れを知る！”をテーマにした勉強

会のタイミングが合い、開催となった。

開始にあたって

準備の概要：

- ・各種飲み物の準備
- ・学部長作成の開催通知の送信

広報：メール

費用・用途：1,000円/回程度（飲み物）

苦労したこと・工夫したこと

- ・図書館では企画・運営に関わることはないが、主催者から当日の準備等の情報がなく、開催直前になって突然資料の印刷を依頼されて戸惑った。

始めてよかったと思うこと

- ・Salle de Génieの周知ができ、交流の場として活用されるようになった。

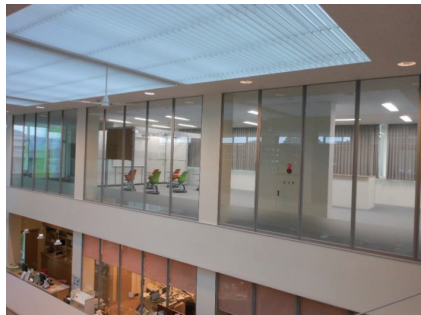
今後の課題は…？

- ・開催が担当職員の勤務時間外であること。
- ・飲食可能なスペースを提供することは、新しい試

みとして図書館サイドで発案したことである。しかし、利用者側は、図書館が飲食サービスを提供すると受け止めたようで、本務との関わり方が今後の課題と言える。

伝えたいこと

- ・図書館としては「場所を貸す」という意識でいましたが、実際はサポート業務に関わっているため事前の打合わせは必須です。



空間

学生

教員

他部署



内容

「リエゾンライブラリアン」とはサービスではなく、各学問分野に対して様々なサービスを行うための仕組みであり、図書館員が担当の学部や分野を持ち、担当の教員・学生を対象にレファレンスや選書、ガイダンス等その他情報提供等を行うものである。

現在の具体的な取り組みとしては、選書や授業資料ナビ(PathFinder)の作成、図書館主催ガイダンスやデータベーストライアルの広報などを実施し、レファレンスについては現在準備中である。他にもポッドキャストを使った教員インタビューや利用案内もこの枠組みのなかで実施した。

なお、リエゾンライブラリアンは教員や授業との連携強化、図書館員の専門職性を高めるという点などから本学で実施しているアカデミック・リンクの重要なコンセプトの一つとなっている。

概要

対象者：学部生、大学院生、教員
実施期間：2007年4月～
実施場所：全学

担当職員数：18名

きっかけ

発案者：附属図書館

本学の第1期中期計画(平成16年度)に「授業に密着した情報提供等(ガイダンス等)の強化」を検討・実施する項目があり、教員と図書館員の協力体制を強化することとなった。その方法として担当学部の教員や学生を対象に仕事をするリエゾンライブラリアン制度を導入することとした。

開始にあたって

準備期間：約18ヶ月

準備の概要：学長に対してリエゾンライブラリアンに関する概要説明のプレゼンを図書館員が行ったほか、アメリカの大学図書館を訪問し、現状を調査した。リエゾンライブラリアンの仕組みを始めるには教員と図書館員の連携体制を作ることが不可欠なため、授業の内容に特化したパスファインダー(現在の授業資料ナビゲータ(PathFinder))の作成に着手した。

広報：図書館内での仕組みなのでリエゾンライブラ

リアン自体については広報を行っていない。

苦労したこと・工夫したこと

千葉大学における教養教育である「普遍教育」と連携するため普遍教育センター長や各科目グループのリーダー教員との打ち合わせを行った。授業資料ナビゲータの作成については、協力してくれる教員の募集が難しいと思われたが、普遍教育センター長や各リーダー教員の強力なバックアップもあり、半年ほどで15名の教員の協力を得、29科目について作成した。開始前の協議のなかでできた教員との連携が無ければ、作成することは難しかったと思われる。

授業資料ナビの作成では、ひな形の作成や公開・配布方法、図書館内での分担等初めてのことで手探り状態だったが、それぞれが通常業務も行いながら、館内での協力体制により作成科目決定から授業開始までが3ヵ月弱という短い時間で公開することができた。

始めてよかったと思うこと

授業資料ナビの作成は、各図書館員が教員に直接連絡を取って行うため、教員が担当図書館員を個人として認識し、図書館に関する他の業務についても「とりあえず知っているあの図書館員に訊いてみよう」という教員が増えた。図書館員から見ても、個人的にコミュニケーションを行うことで授業資料ナビの話だけでなく、図書の発注の話や授業に関する質問などを教員に聞きやすくなった。

伝えたいこと

教員に連絡する時は、部署名だけでなく、個人名も出してください。また先生の研究分野に役立つ情報（例えばデータベースのトライアルなど）があるときは個人的にかつ積極的にお知らせしてください。ガイダンスやILL、図書の発注など様々な業務で得たつながりを生かして、先生に「+α」の情報を提供していくことがポイントだと思います。

空間

学生

教員

他部署

名古屋外国語大学・ 名古屋学芸大学図書館 ブックトーク

トークイベント

Book Talk

テーマ「人間を救うのは、人間だ」

Talker 中根春波氏 (日本赤十字社)
宮川公平先生 (外大 現代国際学部) 10月27日(土) 11:00~12:00
吉野まい子先生 (学芸 メディア造形学部) 会場: 図書館1階

《昨年の Book Talk 参加者の声》

- 視野が広がった
- とてもよい企画
- 普段自分が触れないような本にも興味がわきました
- 会場も落ち着いて雰囲気よかった
- 新たな発見があり勉強になりました
- 1つの本でこんなに色々な視点でみれるんだと思ひ、おもしろかったです

学生数 6,676名
館員数 専従4名、非常勤・臨時1.0名
蔵書数 284,000冊
所在地 愛知県日進市 岩崎町竹ノ山57
TEL 0561-75-1726

内容

大学祭協賛企画として、2011年より全ての参加者対象にブックトークを開催。またPRを兼ね、大学祭の前後に2週間程度、紹介する図書の展示とブックトーカーによるコメント付のチラシ配布を実施。

2012年度からは、ブックトークと同一テーマの上映会も同時開催し、本・語り・映像など様々な形を通してテーマをとらえてもらえるようにした。

(上映会場は図書館及び隣棟AVホールの2カ所)

2012年度は、日本赤十字社のスローガンである「人間を救うのは人間だ」をテーマとさせていた。(使用にあたっては事前に日本赤十字社の許諾済。)ここでは2012年度の取り組みについて報告する。

概要

対象者: すべての利用者

実施期間: 2012年10月

実施場所: 図書館、マルチメディアラーニングセンター内AVホール

担当職員数: 3名

当日のスケジュール:

~11:00 呼び込み

11:00 館長挨拶

11:05~11:35 ブックトーク(10分/人)

11:35~11:55 フリーターキング

11:55 終了の挨拶

終了後 館内自由見学(展示資料等)

実際は1人10分では話がおさまらず、フリーターキングの時間を縮めて対応した。

きっかけ

発案者: 図書館

2010年に学内の同好会「外大読書会」と協力し、教員2名を交えた座談会を実施した。昼休みの短時間開催だったため、教員から「このような催しは大学祭で行うとよいのではないか」と提案された。

開始にあたって

準備期間: 約4ヶ月

準備の概要:

- ①テーマを決める
- ②テーマにふさわしいブックトーカーを選ぶ
- ③ブックトーカーに交渉、OKが出れば打合せ
- ④紹介する本のコメントをもらい、本を用意する
 広報：ポスター及びチラシ（館内・館外）、図書館HP、ポータルサイトにて案内
 費用・用途：1.5万円程度（ブックトーカーへのお礼の品代、貼るパネル、カラーコピー代等）

苦労したこと・工夫したこと

- ・2012年度は教員2名に加え、日本赤十字社のスタッフにもブックトーカーを依頼した。その縁で献血推進のキャラクター（けんけつちゃん）にも呼び込みを手伝ってもらったところ、大変な注目となった。ゆるキャラの威力はあなどれない。

始めてよかったと思うこと

- ・参加者アンケートをみると、「とても良かった」「感動した」「またやってほしい」等々好評であり、課員も達成感を得ることができた。
- ・同じテーマによる上映会の同時開催や献血活動の

紹介など、広がりを持たせることでより多くの人々に知ってもらえ関心につながった。多方面において相乗効果があった。

今後の課題は…？

- ・「大学祭の各種催しと重なってしまい参加できず残念」という声があった。また、周囲がにぎやかなため異空間のように感じた人もいた模様。大学祭とずらして開催することは今のところ考えていないが、よし悪しである。

伝えたいこと

- ・テーマを決める際、大学の特性を考慮すると興味を持つ人が増えると思います。（本学には国際救援活動やボランティアなどの人道的援助に関心の高い人が多い）。
- ・日頃バックアップしたいと思っていることをこのような企画にのせると、アイデアが出やすいと感じました。多くの出会いもあります。何よりも図書館スタッフが楽しんで取り組まれるのが一番です。



献血推進キャラクター「けんけつちゃん」



阪南大学図書館 おすすめの一冊

学生数 4,997名
 館員数 専従5名、非常勤・臨時3名
 蔵書数 約480,000冊
 所在地 大阪府松原市天美東5-4-33
 TEL 072-332-1224

[数値：2013年4月1日現在]

内容

図書館ウェブサイト上において、教員おすすめの推薦本を紹介し、学生をはじめとした利用者へさまざまな本との出会いを通じて、読書力の涵養をはかることを目的としている。

原稿執筆は主に図書館長に依頼している。

概要

対象者：学部生、大学院生、教員、職員

実施期間：2008年4月～継続中

実施場所：図書館HP

担当職員数：2名

きっかけ

発案者：図書館

図書館HPのリニューアルに伴い、読書推進を図るための広報活動の一環として掲載を開始した。

開始にあたって

準備期間：約3ヶ月

準備の概要：

- ・図書館HPのフォーム作成
- ・教員への原稿執筆依頼

広報：

- ・図書館HP
- ・担当教員が本を出版
- ・担当教員による授業での案内
- ・大学HP内の教員プロフィールページで案内

苦勞したこと・工夫したこと

- ・原稿をHP仕様で改良し、デザインを統一することが必要
- ・原稿執筆を誰に依頼するか検討
- ・更新頻度の検討（最初は執筆者のタイミングに合わせて）
- ・ウェブ上で読める文字数の検討
- ・紹介内容のジャンルやレベルについての検討
- ・本や原稿のイメージに合わせて、インパクトのある画像を作成し、HPや展示に使用

始めてよかったと思うこと

- ・紹介するおすすめの一冊を図書館内の展示コーナーに配架することで利用者へのPRとなり、利用の相乗効果を生み出している。
- ・読み物の要素が加わり、図書館HP内のコンテンツが充実した。
- ・来館しない利用者への読書案内にもなっている。
- ・外部より感想をいただくことがある。

今後の課題は…？

- ・HP上の掲載を現状月1回の割合で更新しているが、継続するための原稿収集が難しい。
- ・読者のレベルに合った、またはレベルごとの読書案内の形式をとることの必要性。

伝えたいこと

- ・原稿執筆者の負担など、継続可能なサービスであるか、広報手段はあるかなど、導入時に充分検討する必要があります。



書籍化された「おすすめの一冊」



展示コーナー

空間

学生

教員

他部署

法政大学図書館 リエゾン・ライブライアン



学生数 29,821名
館員数 専従26名、非常勤・臨時3名
蔵書数 1,655,000冊
所在地 東京都千代田区富士見 2-17-1 (市ヶ谷)
TEL 03-3264-9575

内容

学生用図書資料の充実

- ・大学院選書委員会
小金井図書館で実施。各専攻から選出された大学院生が、学部生および大学院生に有益な図書資料を選定し、既所蔵資料からも推薦図書を選定。新規購入分、既所蔵分とも展示する。
- ・教員選書委員会
小金井図書館で実施。洋雑誌継続タイトルの見直し、大学院選書委員会で選書された資料の購入可否を検討。

学習サポートの充実

- ・基礎ゼミガイダンス
市ヶ谷・多摩図書館で実施。1年生に対して開講される演習授業単位で、基礎的な情報収集・活用方法、図書館の利用方法を実習形式で紹介。
- ・専門ゼミガイダンス
市ヶ谷・多摩図書館で実施。2年生以上に対して開講されるゼミナール単位で、各ゼミの専門分野

に特化した情報収集・活用方法を実習形式で紹介。内容については事前に教員と打ち合わせする。また、当該ゼミで必要とする資料について教員に聴取し、職員が行う和図書選書の際に購入。

- ・研究室サポートガイダンス
小金井図書館で実施。研究室単位で、各研究室の専門分野に特化した情報収集・活用方法を実習形式で紹介。内容は事前に教員と打ち合わせする。

知的援助を可能とする図書館職員の育成

- ・データベース講習会
新規データベース導入時に館員向けの講習会を実施。
- ・ゼミガイダンスに関する総括・反省会
定期的の実施し、改善点を全担当者で検討・共有。

概要

対象者：学部生、大学院生、教職員
実施期間：2011年4月～
実施場所：図書館内
担当職員数：17名

きっかけ

発案者：図書館将来計画策定委員会（図書館長・副館長、各キャンパスからの代表教員、図書館事務部職員により構成）

「法政大学図書館将来計画 2011-2015」の策定時に発案された。当計画は、「法政大学図書館将来計画 2004-2010」を引き継いだものである。各学部等の教育内容に応じた情報リテラシー教育の企画設計・実施を行う者、また教育・研究の現場と図書館の間を連絡調整（リエゾン）する者として、法政大学における図書館職員のあり方をリエゾン・ライブラリアンと位置付けた。

開始にあたって

準備期間：約 3 ヶ月（「法政大学図書館将来計画 2011-2015」検討・策定期間）

準備の概要：

- ・2008 年度 ラウンドテーブルセッション「大学教育を支える図書館を目指して：Learning commons & Liaison librarian」を開催。
- ・2009 年度 外部講師によるプレゼンテーション研修を実施。
- ・週 1 回実施しているスタッフ会議等での企画立案・調整・連絡等打ち合わせおよびプレゼンテーションの練習。

広報：館内掲示物、図書館ホームページ

費用：なし

始めてよかったと思うこと

- ・大学院選書委員会…大学院生による専門性を生かした選書が行われ、多岐に渡る研究領域の文献の網羅的な収集ができること。また各研究分野の資料現物に触れる機会を展示によって学生に提供できる。
- ・教員選書委員会…洋雑誌継続可否について契約更新の際に迅速な判断が可能。
- ・研究室サポートガイダンス、専門ゼミガイダンス…データベースや専門的な資料の存在を周知し、レポート、論文作成に際し活用する契機を学生に与える意味で、非常に有効。

今後の課題は…？

- ・大学院選書委員会…主に市ヶ谷キャンパスで授業を開講するデザイン工学研究科・学部生対象の資料の所蔵館、展示場所が小金井図書館となっている問題の解決。
- ・大学院選書委員会、教員選書委員会…学習用図書の評価・廃棄・更新に関する協力体制の構築。
- ・研究室サポートガイダンス、専門ゼミガイダンス…教員による申込制であるため、さらに多くの学生に対する情報リテラシー教育の実施に向けた教員への働きかけ。
- ・基礎ゼミガイダンス…演習形式の授業を開講していない学部 of 1 年生に対する情報リテラシー教育について、該当する学部教授会への働きかけ。

伝えたいこと

図書館が連携（リエゾン）するべき対象は、教員・学生・職員とさまざまです。また連携の方法も、組織として動いて実現したり、個人単位のつながりから新しいサービスの発想が生まれたり、いろいろなケースがあります。

皆さんがもっているコミュニケーション力を活用すれば、「図書館の将来」という明るい道は、必ず開けて行くと思います。



市ヶ谷図書館入口



小金井図書館閲覧室

明治学院大学 横浜校舎図書館

レポートには、 書き方がある

～アカデミックリテラシー・
ミニレクチャー～

横浜キャンパス

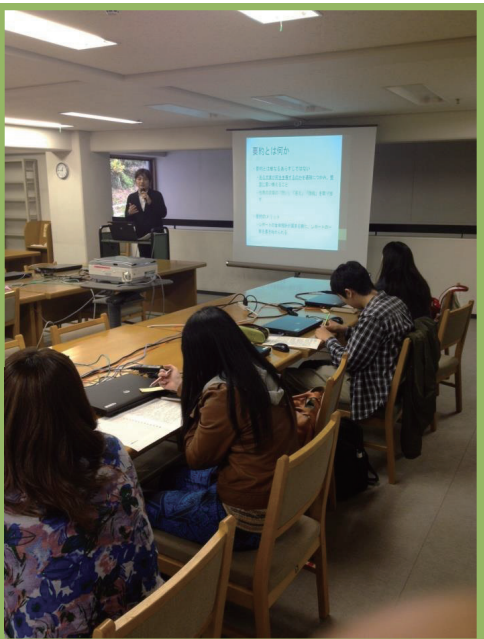
学生数 12,442名（白金校舎との合計）

館員数 専従5名、非常勤・臨時0名

蔵書数 389,000冊

所在地 神奈川県横浜市戸塚区上倉田町1518

T E L 045-863-2037



内容

「アカデミックリテラシー研究1」は、大学で必要なさまざまな基本的学習技術を学ぶ、1年次生向けの明治学院共通科目で、レポートの添削指導により、「問い」「論拠」「答え」のそろった論証の組み立てや、引用のルールなどを学ぶ。しかし履修希望者が多く、毎年抽選となるうえ、学科によっては選択できない場合がある。

そこで上記科目を履修しない学生のために、教養教育センターが横浜校舎図書館と、レポートの書きかたのエッセンスを学ぶミニレクチャーを共催した。すべての回を受講すれば、レポートの基礎的な書きかたがひととおり身につくが、気になる回だけの受講も可能。申し込みや予約は不要。ミニレクチャーでは、すでに全1、2年次生に配布した『アカデミックリテラシー・ハンドブック』を使用。

春学期アンケートから、秋学期は「問いの立て方」「情報検索方法」についてなど、学生のニーズに合わせた内容を追加して実施した。

概要

対象者：学部生

実施期間：2013年4月～2013年6月

2013年10月～2013年11月

実施場所：図書館第3閲覧室

担当職員数：2名

当日のスケジュール：

- ①会場設営（講師用PC起動、プロジェクター・スクリーン確認、マイク電源ON、折りたたみ椅子準備）
- ②会場OPEN、配布資料セット、着席誘導
- ③撤収作業

きっかけ

発案者：図書館

教員と利用者教育の打ち合わせ時に、教員から“レポート書法の選択科目がいつも抽選で漏れる学生が多く、それらの学生の救済策として実施している「レポートの書き方相談」の方も、場所が分かりにくいからあまり利用がない、”という話が出たことがきっかけ。“それなら図書館内で課外講座として

実施できないか？図書館ならば場所としてわかりやすいし参加しやすいのでは？”という話が始まり、その流れから実現した。

開始にあたって

準備期間：なし

準備の概要：

場所の提供なので特に準備は必要ない。初年度は初めての試みだったため、広報に力を入れた（図書館ウェブのお知らせや館内放送など）が、2年目からは参加人数が10倍近くになったので、広報もあまり必要なくなった。逆に座席が足りなくなったため、他部署から折りたたみ椅子を借りるなどの準備が必要になってきた。

広報：掲示（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、
図書館HP、『明治学院共通科目ガイドブック』と、
4月の新入生対象の明治学院共通科目履修ガイダンスでの説明

費用：0円

苦労したこと・工夫したこと

- ・最初は参加人数が読めなかったことが苦労といえば苦労であったが、それ以外には特になし。
- ・工夫した点は、これをきっかけにほかにも行っていた学内での学習支援の情報提供を一括して図書館ウェブ上でも提供を開始したこと。これらの一連のこころみから「図書館は学習情報の“ハブ”の役割を果たし、学生が次なる道を発見できる場となることを目指そう」という意識が出来てきた。

始めてよかったと思うこと

- ・図書館内で学習に関する講座を教員が開くことにより、学生が「図書館を利用しよう」と思えるきっかけになっている。
- ・教員とも継続して学習支援の相談ができる関係づくりと強化に結び付いている。

今後の課題は…？

受講者が年々増え続けており、今年は会場のキャパシティとしては限界に達した。ニーズがあることは確かなので、回数を増やすなどの対策を講じる必要が出てきた。もしくは全学部が抜本的に初年次教育の枠組みの中でカリキュラムに組み込むなど構

造的に対策する必要があるのではないかと考えられる。

伝えたいこと

教員のレクチャーという性格上、図書館主導で企画してうまくいくかどうかはわかりません。同種のサービスを企画するより前に、教員とのコミュニケーションを日常的に図れる関係づくりを目指すことが第一ではないかと思います。

明治学院大学横浜校舎図書館 校外実習報告展示



横浜キャンパス

学生数 12,442名（白金校舎との合計）
館員数 専従5名、非常勤・臨時0名
蔵書数 389,000冊
所在地 神奈川県横浜市戸塚区上倉田町1518
TEL 045-863-2037

内容

教員から「来年校外実習に行く学生への情報提供と一般学生への関心喚起のための展示を実施したい」との依頼を受け実現させた。教員の目的に加え、さらに図書館の「場」を効果的に利用し広く学生へ図書館資料（現物）を使って展示し、情報収集方法への関心をも呼び起こせる企画とした。

また教員の申し出期間を延長し、大学見学の受験生にも本学での学びの様子の一端が知れる機会とした。

さらに期間中に展示主体である教員と学生による自由参加のワークショップを図書館内で実施した。

教員による展示のねらいは、国際学部の特設科目のひとつである体験型学習形態の授業『校外実習（Field Study）タイ、カンボジア』の成果を発表し、次年度履修する学生の授業選びの参考にしてもらいたいというもの。

展示概要は、写真＋キャプション＋関連書籍案内を一枚にしたものの展示、および、報告書の展示となっている。

概要

対象者：学部生
実施期間：2012年9月～2012年11月
実施場所：図書館内（1Fホール・グループ閲覧室）
担当職員数：1名

きっかけ

発案者：教員
教員との雑談がきっかけだった。

開始にあたって

準備期間：約2ヶ月

準備の概要：

- ・まず教員から企画書を作成、提出してもらった。
- ・それをもとに、館内の調整（他の展示や催しとの調整など）、展示資料の準備方法や展示場所、などの検討、決定を行った。

広報：図書館HP

苦労したこと・工夫したこと

- ・教員からの要望を正式に館内で検討する際の手順などが整備されていなかったため、進め方を考え

ながら実施した。

- ・パネルについても少しずつ完成したものから学生が持ち込む形だったため「日々進化する展示」と位置づけ宣伝した。
- ・館内でワークショップを行うに当たっても、そうした試みは初めてだったため、他の利用者への配慮や広報などの検討、実施を手探りで行った。

始めてよかったと思うこと

- ・学内で行われている授業、教育内容、方法の一端を知ることができ、図書館利用者教育の幅が広がった。
- ・教員の学生に対する教育関係のニーズも知ることができ、図書館として必要な資料、設備、場所、機能などを考えるきっかけとなった。

今後の課題は…？

- ・教員の要望を正確に理解し、「なぜ図書館との連携が必要か」という視点からとらえなおして実施していく必要がある。必要があれば新たに提案もする。

- ・ただ単に「場所貸し」とならないよう、教員の目的達成と図書館の利用者教育推進という「Win-Win」の関係性づくりをしていくことにより、図書館に対する教員の信頼を得ることができ、また次につながっていく。

伝えたいこと

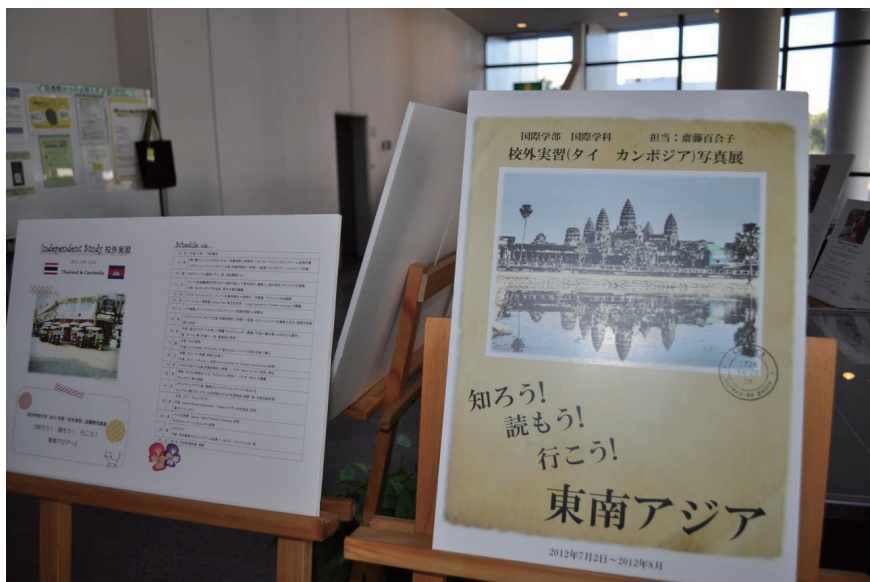
- ・教員の要望を鵜呑みにすることなく、エッセンスを聞き出し、通常の図書館サービスとのバランスを考えながら最良の方法を見出していく必要があります。
- ・創造的なやりがいのある仕事ですし、自分たちの未来の図書館を作っていく礎になりますので、苦労は多いかもしれませんが頑張ってください。

空間

学生

教員

他部署



目白大学新宿図書館 読書推進プログラム



新宿キャンパス

学生数 6,646名
館員数 専従2名、委託10名
蔵書数 237,200冊
所在地 東京都新宿区中落合4-31-1
TEL 03-5996-3140

[数値:2013年5月20日現在]

内容

図書館活動のひとつとして、学生の読書活動を支援するために企画している。

先生方や図書館職員の推薦する多数の書物から、図書館が選定した「目白の100冊」を対象として、「評論部門」と「読書と思索大賞部門」の2部門で、手書きによる応募原稿を募集する。

審査は、目白大学新宿キャンパス図書委員会が行う。学生らしい感性があらわされているか、深い思索が窺えるか、さらに文章に破綻がなく、形式が整っているかも審査基準となる。

優秀作には賞状および副賞として図書カードが贈られる(1等1名1万円、2等2名5千円、佳作若干名3千円)。選外作には参加賞として、図書カード千円が贈られる。

概要

対象者: 学部生、大学院生
実施期間: 2013年6月～2014年1月

実施場所: 図書館カウンター他
担当職員数: 主担当2名、その他全体制

きっかけ

発案者: 図書館

岩槻キャンパス開校時(1994年)から実施されている読書感想文コンクールを参考にした。ネーミングを現行のものにしたのは2008年度より。学内の「読書感想文コンクール」では小学生レベルと思われ、入賞しても履歴書に書くのが憚られるという声に応えた。

開始にあたって

準備期間: 約2ヶ月

準備の概要:

- ・「目白の100冊」を全学から選んでもらう(教員、スタッフ、学生の推薦)。重複は館長が調整した。
- 広報: 館内・館外の掲示物、図書館HP
費用・用途: 20万円程度(賞品13万円[参加賞含む]、表彰式7万円)

苦労したこと・工夫したこと

- ・100冊のうち、10冊を「評論部門」とし、2013年度はテーマを「働くということ」とした。90冊を自由選択の「読書と思索大賞部門」とした。
- ・100冊の選定にやや時間がかかった。

伝えたいこと

- ・応募は自筆とし、図書館のカウンターで原稿用紙を準備しています。剽窃防止のためという消極的な理由もありますが、「丁寧に字を書く」という行為が、それなりに意味あることだと気付く学生もいます。



広報ポスター

空間

学生

教員

他部署



和光大学附属梅根記念図書・情報館 『本を読もう!』『本を楽しもう!』 教職員おすすり本紹介冊子



学生数 3,195名
館員数 専従11名、非常勤・臨時4.8名
蔵書数 500,000冊
所在地 東京都町田市金井町2160
TEL 044-989-7494

内容

1. 目的
 - ・学生が本に親しむ機会をつくるため
 - ・教員と図書・情報館職員の連携を図るため
 - ・図書・情報館広報活動活性化の一手段として
2. 方法
 - ・本学の教員に、学生に読んでほしい本をそれぞれ3冊選書の依頼をする。
 - ・冊子として刊行し、あわせて『本を読もうコーナー』を設置し、そこへ紹介された本を配架する。貸出の可否については、通常の扱いと同等とする。

概要

対象者：すべての利用者
実施期間：2004年9月30日～
実施場所：館内、館外にて小冊子を配布。メインカウンター横の書架上に「本を読もうコーナー」を設置し、配架。

きっかけ

発案者：図書館の広報業務担当(2004年当時)
2004年度は、館長提案をふまえ、利用者サービスをさらに充実すること、図書館の外へ向けた情報発信の取り組みを始めることを課題として、業務の大きな見直しをおこなった。広報業務もその大きな柱として位置づけ、検討された。館長から、「本を読むという柱を明確にした方が良い」「図書館は良いサービスをしているけれど、なかなかそれが外に伝わってこない」という指摘があり、そこから『本を読もう!』が企画され、発行されることとなった。

開始にあたって

準備期間：11ヶ月
準備の概要：
①教員への執筆依頼、原稿集約
②文章校正
③冊子について外部デザイン委託、内容校正、印刷発注

広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、
図書館ホームページ

苦労したこと・工夫したこと

- ・執筆者目標数の確保が一番の難点
- ・執筆申出者数を把握するために、第一次（申出）
締切と第二次（原稿）締切に分けた点

始めてよかったと思うこと

- ・新入生に配付することによって、学生の読書推進の一躍を担っている。また図書館に関心を持つきっかけにもなっている。
- ・教員の図書館に対する「見方」が変わり、普段なかなか図書・情報館の活動に関わりがない教員も、原稿執筆によって、他の活動への協力を得ることができる。
- ・サービス提供側としては、「この先生がこのような本に興味を持っている」ということを知り、選書などの時に、視野も広がる上、役立つ。

今後の課題は…？

- ・退職、新任等により、年毎に教員の顔ぶれが変わるので、継続して、数年に一度発行する必要があります。
- ・これまで第一集から第三集を発行しており、2014年春には第四集発行を予定しているが、未だ執筆申出をいただけていない教員を、どのようにこの取組みに興味を持って関わっていただくかが課題である。
- ・学生が手に取りやすく読みやすい文庫本サイズにするなど工夫しているが、より学生に興味を持たせるための工夫が必要である。

伝えたいこと

普段図書館の中で業務を行っている、特定の教員のみと関わることが多いかと思いますが、『本を読もう』という小冊子発行の目標に向かって、教員とともに取り組むことができます。また、ここではある意味「著者（教員）」と「編集者（図書館員）」のような関係が生まれますが、冊子が出来上がった時は言いようのない連帯感が現れます。

さらに、学生も普段授業で教わっている先生がどんな本に興味を持って、紹介しているのか、非常に

興味を持っている様子です。「あの先生がこんな面白い本を紹介している！借りていこう！」という場面もあります。図書館の日常業務の傍ら、教員を巻き込んで一つの目標に向かい、学生の本を読むきっかけを提供できるのでおすすめです。

空間

学生

教員

他部署

愛知医科大学医学情報センター(図書館) めりーらいん健康支援事業



学生数 1,258名
館員数 専従7名
蔵書数 156,677冊 [2013年4月現在]
所在地 愛知県長久手市岩作雁又1番地1
TEL 0561-61-5402

内容

瀬戸市立図書館、尾張旭市立図書館、日進市立図書館、長久手市中央図書館、愛知医科大学医学情報センター(図書館)による「健康支援」活動。年間を通して、次の活動を行っている。

- ①医療・健康について、最新で信頼できる内容が分かりやすく解説されている図書の提供
- ②病気や症状についての「調べ方ガイド(メディカルパス)」の共同作成
- ③医療・健康について楽しく学べるイベントの開催
- ④医療・健康情報に強い地域づくりを目指した、図書館職員による連絡会の定期的実施

平成22年度「大学図書館における先進的な取り組みの実践例—大学の学習・教育・研究活動の質的充実と向上のために—」(文部科学省)採択事業である。

概要

対象者：すべての利用者

実施期間：2007年5月～

実施場所(連携館)：瀬戸市立図書館、尾張旭市立図書館、日進市立図書館、長久手市中央図書館、当館

担当職員数：8名(当館3名、公共図書館5名)

きっかけ

- ・平成17(2005)年ごろから「患者図書サービス」の必要性が広く話題に取り上げられるようになり、当館でも関心を寄せ始めていたこと。
- ・愛知医科大学では、平成18(2006)年度に公益財団法人大学基準協会の大学認証を受審したが、その評価項目の中に「図書館の地域公開」があった。当館は医学・看護学の専門図書館であるため、一般市民(地域住民・入院患者等)が理解できる資料はほとんど収集していなかったが、近隣の公共図書館が連携し、各館の所蔵資料を利活用することで、一般市民に対しても何らかの貢献ができる方策があるのではないかと考えるようになったこと。

開始にあたって

準備期間：約12ヶ月

準備の概要：

2006年9月

センター長、事務長、担当者の3名で各公共図書館を訪問。事業の主旨、意義、業務内容を説明し、事業への参加を求めた。

2007年2月

地域連携パスファインダーを試作

2007年5月

第1回連絡会議を開催し、事業を開始した。

広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）
放送（館内・館外）、図書館ホームページ、プレスリリース、グッズの配布、学内印刷物への記事掲載

費用：年間30万円

イベント開催（謝金、交通費、雑費）、書籍や視聴覚資料の購入、事業案内リーフレットの印刷、マスコミキャラクターの商標登録、その他

苦労したこと・工夫したこと

- ・苦労した点：公共図書館長の承認
公共図書館では職員数の削減や委託化が進められていることから、業務量の増加（職員への負担増）が懸念された。また、医療・健康情報を提供することへの不安の声が上がった。
- ・工夫した点：事業説明
「これからの図書館像（文部科学省）」「健康日本21（厚生労働省）」といった国の政策と、公共図書館の任務をリンクさせ、取り組むべき業務であることを強調した。

始めてよかったと思うこと

- ・公共図書館と当館の間で、相談や利用者の紹介などがスムーズに行えるようになった。
- ・地域連携パスファインダーを作成することにより、公共図書館員の医療・健康図書の見つけやすくなった。また、当館職員は、家庭医学書や児童書が優れた情報資源であることに気付くことができた。
- ・公共図書館員を講師に招き、本学教職員に読み聞かせやレクリエーションの講座を実施してもらうなど、教育・診療への貢献を行うことができ

た。

- ・公共図書館・当館ともに、活動を通して、他部署や上層部に図書館の活動をアピールすることができた。
- ・当館が地域の中に入る足掛かりとなった。

今後の課題は…？

- ・一人の担当者に頼らずに、チームで継続すること。
- ・医療者からの意見を反映させ、協働すること。
- ・サービスの評価を行うこと。

伝えたいこと

- ・私立大学と公共図書館とでは設置母体が異なるため、連携しづらい場合がある。特に委託又は指定管理が導入されている公共図書館の場合、請負業者との契約事項に含まれない事業を進めることができない。これらのことから、公共図書館と連携を検討する際には、相手館の状況を十分に把握しておくことが重要である。
- ・小さなことで構わないので、継続することが大切である。
- ・公共図書館員（公務員）は数年のサイクルで人事異動することが多いため、知識・スキル・人脈を幅広く持ち合わせている。彼らと協働することは、我々のスキルアップに繋がるため、機会があれば、是非チャレンジしていただきたい。

空間

学生

教員

他部署



愛知県立大学学術情報研究センター 共同図書館



学生数 3,626名
館員数 専従7名、非常勤・臨時16名
蔵書数 611,000冊
所在地 愛知県長久手市茨ヶ廻間1522-3
TEL 0561-64-1111

内容

公私5大学4図書館連携事業

連携校：愛知県立大学、愛知県立芸術大学、愛知淑徳大学、名古屋外国語大学、名古屋学芸大学

- ①連携校での共同図書購入・共同管理による図書の貸出（個人及び連携校間）
- ②書評機能（共同図書環ホームページを通して書評書き込み、コメント書き込み、書評検索可能）
- ③連携校との学生選書（パス）ツアー
- ④BOOK PARTY（連携校学生・教職員との図書紹介交流会）
- ⑤共同図書巡回展示企画（年度テーマ設定し、共同図書の選書・巡回展示、装飾品作成、日本赤十字社やJICA中部との協力事業）
- ⑥Tosho Ring News 発行（機関誌）
- ⑦先進事例調査・見学会
- ⑧講演会・演奏会（講演作家：金原瑞人氏、内田樹氏、諏訪哲史氏、チェロとピアノ演奏会）
- ⑨運営サポートサイト（連携校間の職員情報提供・情報共有・交流）
- ⑩各種会議（連携校との図書部会・情報交換会・実務者会議）

概要

対象者：学部生、大学院生、教職員

実施期間：2008年10月～

実施場所：愛知県立大学学術情報研究センター

担当職員数：専任事務局職員1名（兼任システム担当1名）

目的：

教養図書を中心とした教育資源の共同利用を通じて、人的交流をはじめとした地域大学の連携強化を図ること

スケジュール：

①学生選書ツアー

書店集合、説明、リスト配布、書名等記入、確認、交流、記念撮影など

②BOOK PARTY

会場設営、資料配布、会場集合、受付、説明、図書持参、縦覧、図書紹介、書評記載、お茶会、交流、記念撮影など

③作家講演会

会場設営、受付、挨拶、講演、図書販売、片づけ、取材対応、謝金、呈茶、記念撮影など

きっかけ

発案者：愛知県立大学学術情報部

平成 20 年度文部科学省 戦略的大学連携支援事業（補助事業期間 20～22 年度）として立ち上げ、平成 23 年度からは 3 年間の継承事業として、分担金方式により共同図書環事業を展開している。

開始にあたって

準備期間：約 1 年

準備の概要：独自の図書管理システム開発、人材確保、機材・備品・図書購入、諸手続き

広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、図書館ホームページ、メール、グッズの配布

費用：1 億 4342 万 7000 円

用途内訳：

2008 年度 36,427,000 円

2009 年度 45,000,000 円

2010 年度 38,000,000 円

2011 年度 8,000,000 円

2012 年度 8,000,000 円

2013 年度 8,000,000 円

苦労したこと・工夫したこと

連携事業のための各連携校の調整に苦心した。当時は前例のないシステムだったため、独自開発となかった。

実験的な取組として、各館の既存の図書館サービスとは別途独立したサービスとして実施することになったため、二重の貸出返却サービスを運用（維持）する必要があった。

始めてよかったと思うこと

①利用促進

一般教養書を中心とした図書の構築により、貸出数の増加、図書館の利用者の増加、学生の図書館活動への関与（ボランティア活動等）

②交流とネットワーク化

連携校の学生間での図書を通じた交流が促進し、書評を通じて相互に刺激しあう関係が構築された。

③大学図書館サービスの充実

共同図書環事業の取り組みは、学生視点での蔵書構築や学習環境の整備、展示手法、アクティブな

事業展開など、大学図書館の業務への刺激となり、その成果は随所に継承されている。

今後の課題は…？

- ①共同図書環の各種サービスが、大学図書館の本来業務に継承されつつあり、重複し合理的でなくなってしまった。
- ②本館と共同図書環で異なった図書館システムを併用するため、利用登録、貸出、返却が職員にとって煩雑となってしまった。
- ③事業終了後の、共同図書の大学図書館蔵書への取り込み問題。
- ④システム維持の上で保守費用、セキュリティ対応が必要となってしまった。

伝えたいこと

- ①利用者参加型の各種イベントの効果
学生ボランティアを活用し、学生視線の企画を展開。学生参加の意義は大きい。
- ②大学図書館の連携の重要性
・資料交換だけでなく、人的交流（学生・教職員）を可能とする。
・連携することにより 1 つの図書館ではできない企画を実施可能とする。
・各連携大学の特色を活かした企画運営を可能とする。
・他大学との交流・連携企画は、学生へ好影響・好刺激となるため、連携の意義は大きい。
- ③定期的な連携会議の必要性
・連携校との信頼を確保する。
・情報を共有し、意見交換・調整して企画運営に反映させる。
・連携校との事務処理等は迅速かつ正確に行う。

空間

学生

教員

他部署

旭川医科大学図書館 本を読もう！キャンペーン AMUL 77


旭川医科大学教務部 入試課・図書館情報課・学生支援課タイアップ企画

本を読もう！キャンペーン
第1回 **スタンプカード** AMUL77

NAME _____ 医学科・看護学科・大学院
年 _____

・カウンターで借りた本1冊につき1個裏面に押印。
・20個集めた方先着77名様にプレゼント。
・複数カードの合算はできません。
・次の場合は押印できません。
・カードの貸借・自動貸出装置利用
・その他不正が認められた場合
・カードの紛失には対応できません。新たにはじめて下さい

問合せ先: 旭川医科大学図書館 toshokan@asahikawa-med.ac.jp 内線2226



学生数 1,079名
館員数 専従9名、
非常勤・臨時2.9名
蔵書数 154,000冊
所在地 北海道旭川市
緑が丘東2-1-1
TEL 0166-65-2111

内容

図書貸出冊数のスタンプラリー。

図書館のカウンターで貸出を行った学生に、冊数に応じてスタンプを押し、20個のスタンプで大学名の入ったエコバッグを渡すというもの。

エコバッグは、入試課で前年度オープンキャンパス用に製作したもので、本学の英語名称が急遽変更した(College→University)ため使用できなくなり、倉庫に眠っていたのを譲り受けた。

また、読書推進活動として、学生支援課内でもポスター掲示など広報に協力してもらった。エコバッグ 77 枚を配布する予定で、Asahikawa Medical University Library 77 と名付けた。

概要

対象者：学部生

実施期間：2011年7月～10月

実施場所：図書館カウンター

担当職員数：貸出カウンターでの対応1名

きっかけ

発案者：図書館（図書館情報課）

入試課で作成したCollege名の入ったオープンキャンパス用エコバッグがあることが判り、図書館ならば在学生に有効活用できると思い、譲り受けたこと。

開始にあたって

準備期間：約0.3ヶ月

準備の概要：

- ・スタンプカード・ポスター作製・掲示
- ・ホームページでの広報

広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内）、図書館ホームページ

費用：0円（全て既存の品を使用）

苦勞したこと・工夫したこと

- ・何冊でバッグ引き換えにするかが難しかった。夏休み前で利用者が減少する時期なので、多すぎず、少なすぎずの冊数を協議した。

- ・貸出・返却を一気に繰り返して貸出冊数を増加させることを防止するために、スタンプ押印後に日付を記入した。
- ・自動貸出装置での貸出はスタンプの対象外としたため、苦情とならないように、あらかじめその旨を自動貸出装置に掲示した。

始めてよかったと思うこと

- ・この機会に、といつもより多めに借りていった学生や、借りた本を急いで読んで頑張った学生もあり、読書を楽しんでもらうことができたと思う。
- ・今まで図書館をあまり利用しなかったけれども友人から聞いて、と足を運んでくれた学生もあり、より多くの学生に図書館に興味を持ってもらうことができたと思う。
- ・貸出手続きの際にキャンペーンのお知らせを伝えたり、スタンプ押印の際に話をしたりする機会が増えた。

伝えたいこと

このキャンペーンは、20冊の貸出で目標達成としたが、最初から諦めてしまう学生がいたので、達成のハードルはほどほどにしないと取り組んでもらえないと感じました。しかし、図書館をよく利用する学生の中には複数回達成し、嬉しそうにエコバックを持ち帰る学生もありました。

全ての学生に満足してもらえるキャンペーンというのは難しいと感じています。キャンペーンの目的は、少しでも図書館利用者を増やすこと、楽しんでもらうこと等、図書館にとってもハードルはあまり高くない方がよいと思います。

空間

学生

教員

他部署



北海道内 4 大学間 蔵書交換展示会

【参加事例】 帯広畜産大学附属図書館

学生数 1,392名
 館員数 専従4名・非常勤・臨時4名
 蔵書数 206,000冊
 所在地 北海道帯広市稲田町西2線11
 TEL 0155-49-5336

内容

旭川医科大学図書館・小樽商科大学附属図書館・北見工業大学図書館と連携し、学生の教養を高めることなどを目的とし、教育研究を特徴づけたテーマのもとに、相手方の図書館に所蔵されていない又は所蔵の少ない分野の図書を送り展示する。

- 【2012 年度】
- 旭川医科大学・小樽商科大学・帯広畜産大学の3館で資料を交換展示
 - 小樽商科大学→帯広畜産大 2012/06/13-2012/07/05 「ドラッカー」に関する資料 100 冊
 - 旭川医科大学→帯広畜産大 2012/10/11-2012/10/26 「闘病記」「メンタルヘルス」「家庭の医学」「スポーツ医学」に関する資料 100 冊
 - 帯広畜産大学→旭川医科大 2012/06/12-2012/06/28 「食の安全」「ペット」「BSE」に関する資料 100 冊
 - 帯広畜産大学→小樽商科大 2012/12/05-2012/12/25 「食の安全」「ペット」「BSE」に関する資料 100 冊

【2013 年度】
 旭川医科大学・小樽商科大学・帯広畜産大学・北見工業大学の4館でそれぞれ資料交換展示

併せて国立女性教育会館より女性問題に関する資料を借用・展示
 北見工業大学→帯広畜産大 2013/07/23-2013/08/13 「機械工学」「社会環境工学」「医療工学」等に関する資料 100 冊
 帯広畜産大学→旭川医科大 2013/05/15-2013/05/31 「食の安全」「ペット」「BSE」に関する資料 100 冊

概要

対象者：学部生・大学院生・教員・職員
 実施期間：2012 年 4 月～
 実施場所：附属図書館閲覧室
 担当職員数：4 名

きっかけ

2011 年度より小樽商科大学と旭川医科大学間で実施されていた「蔵書交換展示」の参加について打診があり、2012 年度より帯広畜産大学も参加すること

ととなった。

開始にあたって

準備の概要：

- ・蔵書の交換展示に関する申し合わせ（館長公印）を作成
 - ・各館ごとにスケジュール等調整
 - ・交換資料の選定・リスト作成 → 展示館との調整（各館により、「この分野の本を増やして欲しい」「このテーマの資料は少なくても良い」等の希望があるため）
 - ・大学の紹介・資料についての説明等の展示ポスター作成
 - ・貸出館より資料の発送 → 展示館での展示（展示期間終了後、展示館より貸出館への返送）
- ※各館同士の協議・調整には原則として電子メールを利用し、参加館の担当者全員に同報メールとして送信することで情報の共有を図った。
- 広報：掲示物（館内・館外）、電子掲示板（館外）、図書館ホームページ
- 費用：貸出時/返送時の送料、パネル・ポスター等製作のための費用

苦労したこと・工夫したこと

（帯広畜産大学での場合）

- ・閲覧室内の目立つ場所に展示し、利用促進を図った。また、平面展示を多くするなど、展示方法にも工夫を図った。
- ・新しい試みということもあり、学内広報に力を入れた。（HP/ポスター掲示等）
- ・展示内容によっては学生の興味を惹かない資料もあり、利用が思ったより伸びない場合があった。
- ・借用期間がおおむね2-3週間と短期であったので、学生の目に触れる機会が少なかった。また、借用したくとも期間内に返却ができないため貸出を諦めた利用者がいた。

始めてよかったと思うこと

- ・自館に所蔵の少ない分野の資料をまとめて借用・展示し、利用に供することができたのは大きなメリットであった。
- ・「他館の資料を自館で展示・貸出に供する」という

行為により、他館資料の装備・目録・サービス等の方法に生で触れることができ、非常に参考になった。

- ・このサービスについては、些細な事でも同報メールで他館と連絡・協議を図った。このことにより、多様な知見・意見に触れることができた。また副次的な効果として、人的ネットワークが形成され、活発な交流が生まれた。

今後の課題は…？

- ・交換資料の内容の吟味：交換した資料の内容によっては展示館の学生の興味を惹かず、貸出数が少ない場合がある。
- ・交換期間の設定調整：交換対象の図書館が多ければ多いほど、また、相手館への提供時間が長いほど、自館の資料が自館に置かれていない時間が長くなり、本来のサービス対象者への提供ができなくなる。反面、上記のように提供期間が短ければせっかく貸出しても利用が少ないこととなり、兼ね合いが難しい。
- ・交換対象館の範囲：平成25年度は道内4大学間での交換展示を行なったが、今後、交換対象館を拡大して行くか否か。拡大して行くなら、その範囲をどのように設定するか。

伝えたいこと

自館には無い、他館の特色ある資料群を直接自館の利用者に提供できる貴重な機会です。

また、他館から得られるものも多いと思いますので、積極的な交流を図ることをお勧めします。

自館として提供できるもの・提供したいものは何か、ポリシーを以て挑むと方針が立てやすいと思います。

空間

学生

教員

他部署

近畿大学中央図書館 中央図書館利用者アンケート



東大阪キャンパス

学生数 22,331名

館員数 専従11名、兼務4名、非常勤・臨時15名

蔵書数 1,464,000冊

所在地 大阪府東大阪市小若江3-4-1

TEL 06-4307-3089

内容

毎年一定期間（平成24年度は2週間）に、館内入口での用紙を配付およびWebフォームを使用して、図書館利用者に対して利用状況、サービスへの満足度などを回答してもらい、図書館の運営・サービスの改善に役立てる。

概要

対象者：すべての利用者

実施期間：2012年10月15日～10月28日（平成24年度）

実施場所：中央図書館、各分室、中央図書館HP

担当職員数：主担当者1名（但し、図書総務課全体で担当）

きっかけ

発案者：図書総務課

利用者の図書館サービスに対する認知度、利用率、満足度などを調査し、利用者のニーズを明確にし、サービスの改善に活かすため。

開始にあたって

準備期間：約2ヶ月

準備の概要：

- ①予算計上
- ②当年度の内容検討・決定
- ③学内決裁
- ④用紙印刷・Webフォーム作成
- ⑤広報活動
- ⑥アンケート実施
- ⑦集計と分析
- ⑧報告書作成
- ⑨図書館運営委員会で報告
- ⑩結果公開（Web、図書館発行の広報誌）

広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内）、放送（館外）、デジタルサイネージ（館内・館外）
図書館HP、メール、図書館広報誌

苦勞したこと・工夫したこと

- ・Webフォームでも回答できるようにしたこと（平成22年度より）

- ・各種広報（メール、デジタルサイネージ、掲示など）
- ・アンケートを来館者に手渡しする（アンケート中の初めの一週間のみ実施している）
- ・回答項目の見直し（毎年）
- ・分析方法の検討

始めてよかったと思うこと

- ・利用者のニーズを測ることができ、それに基づいたサービス改善などがおこなえる。
- ・毎年おこなうことにより、経年変化や動向を確認できる。

今後の課題は…？

- ・回答者の（学部など）所属の偏り
- ・図書館を利用しない学生などへのアプローチ
- ・近年回答項目が増大しており、質問の後の方は未回答で出される比率が高くなってきている点
- ・質問の重み付け
- ・相反する要望に対してどう対応するか（例：館内での飲食の可否など）

伝えたいこと

留意点（実施結果を踏まえて）

- ・戦略的な項目設定をする。
- ・回答者が答えやすいよう心がける。（文体、項目数など）
- ・学内の他の学生向けアンケート合同でおこなってもらえるなど、協力してもらえる場合はできるだけ協力を要請する。
- ・当館での Web での回答数の割合は過去 3 回いずれも全体の 10%を越えていないので、補完的なものとして考えている。但し、教員との協力体制が取れた場合は授業等で積極的に回答をお願いする。
- ・アンケート実施目的と方法について、各館にあったものを選択する。

空間

学生

教員

他部署

神戸学院大学図書館 図書館留学



学生数 10,530名
館員数 専従7名、非常勤・臨時1.0名
蔵書数 1,051,000冊
所在地 兵庫県神戸市西区伊川谷町有瀬518
TEL 078-974-1551

内容

就職活動においても重要視されている英語力をつけるため、「図書館留学」と銘打ち、図書館が、英語を学習できる場と、適切な資料を提供することにより、英語力アップを図れる環境を整え、また、様々な企画により、学生が英語に興味・関心を持ち、楽しく英語学習を継続できるよう、支援している。

「図書館留学」のメニューとして、以下の10種類を用意している。

- ①図書館留学コーナー
- ②My Favorite Book コーナー
- ③Bilingual Library
- ④多読ラリー「てくてく English」
- ⑤多聴ラリー「English シャワー」
- ⑥シネマで週1English
- ⑦Reading Square ～英語で語ろう！～
- ⑧英語で Book Talk
- ⑨英語で Talk～Let's enjoy English～
- ⑩キャリアコーナー「世界を舞台に働こう！」

イベント型のサービスは「図書館留学」の10のメニューのうち、⑥、⑦、⑧、⑨である。

概要

対象者：すべての利用者
実施期間：2011年4月～
実施場所：図書館閲覧室 他
担当職員数：3名

きっかけ

発案者：図書館利用サービス部門

図書館では、就職活動の支援としてキャリア支援グループとも連携し、「シュウカツに勝つ」の企画を実施してきた。図書館の資料の有効活用を図りつつ、就職活動においても重要視されている英語力を学生に身につけさせる方法はないかと考え、実施することとなった。

開始にあたって

準備の概要：

本企画はまず、メニュー④多読ラリーから始めることとしたため、実施に当たり、Oxford Reading Tree や洋絵本など、様々なジャンルの多読・多聴用図書の数語数をカウントするところに膨大な時間を費やすこととなった。

広報：掲示（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、図書館 HP、グッズの配布

費用・用途：多読図書の準備、留学生のアルバイト代金が主なものである。私立大学図書館協会の機関助成金に採択され、また、同窓会より、多読図書の寄贈をいただいた。

苦労したこと・工夫したこと

出版社のサイトなどですでに語数が掲載されているものは、それを利用したが、語数が分からないものに関しては、1語1語手作業でカウントすることとなったため、労力を必要とした。

始めてよかったと思うこと

- ・図書館で様々な楽しい企画を実施することにより図書館の敷居を低くし、利用者の利用を促進できる。
- ・図書館の眠っている図書の有効活用が可能となる。
- ・教職協働の取組みが進んだ。
- ・大学内外において、教育の場としての図書館の位置付けを明確にできる。

今後の課題は…？

現在、「図書館留学」の参加者は 900 名を数えているが、今後、学生のモチベーションを下げずに、英語学習を継続させる様々な方法を考えていく必要がある。また、中国語、韓国語についても取組みを実施していく予定であるので、それについての効果的な方法も考えていく必要がある。

伝えたいこと

多読といったインプットの企画は、数多く見かけるようになりましたが、英語力の向上のためにはインプットのみでなく、アウトプットの企画も考えていく必要があります。

九州地区大学図書館協議会 Library Lovers' キャンペーン



内容

九州地区大学図書館協議会の事業（2012 年度より）。

図書館の利用促進、読書推進を目的に、毎年秋の読書週間の期間に合わせて、九州地区の大学図書館が合同で行なっているキャンペーンである。

九州地区の大学図書館が合同で行なうことによって、ひとつの大学ではできないイベントの実施、PR のインパクト増大を狙うものであり、同時に、キャンペーンの企画運営を、若手職員を中心とするワーキンググループで行なうことによって、職員の企画力等スキルアップの研修の機会にしている。

（実施体制）

- ・キャンペーンの企画運営：キャンペーン WG
- ・キャンペーン実施：参加館

（実施内容）

九州地区参加館合同のイベントと各大学独自のイベントで構成される。各種ウェブサービスも活用し、キャンペーンホームページ、Twitter、facebook、ブログ等でも展開している。

（参加館）

九州地区大学図書館協議会加盟館から参加館を募集（H25 年度は、私立大学図書館協会西地区部会九州地区研究会にも呼びかけ）。

H25 年度は、国立大学 11 館、公立大学 6 館、私立大学 21 館、短期大学 7 館の計 45 館 と、1 団体（鹿児島県大学図書館協議会）が参加した。

（参考資料）

九州地区大学図書館協議会総会 Library Lovers' キャンペーン実施報告
<https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/qkyogikai/materials/20130419soukai>

概要

対象者：学部生・大学院生

実施期間：2010 年度より、毎年 10 月中旬～11 月中旬（H25 年度は 10 月 21 日～11 月 17 日）

実施場所：キャンペーン参加館、ウェブ上
担当職員数：11 名

（H25 年度、キャンペーンの企画運営にあたった

ワーキンググループの人数。九州地区各大学図書館から推薦)

H25 年度の参加館合同イベント：「収穫の秋 読書の芋。～九州まるっと収穫祭～」を参加館合同イベントとして実施。

九州の各大学教員・学生から、各テーマに関する本(映画・音楽も可)へのコメントを募集。教員からのコメントを芋の葉(栄養分)に、学生からのコメントを芋に見立てて、立派な芋畑に成長させてゆく企画(コメント応募総数：1,137件)。

随時、ブログで参加館の紹介、おすすめ図書のブログ登録、参加館の「芋畑」の様子を写真で公開。(参考資料) Library Lovers' キャンペーン 2013 <http://librarylovers2013.blog.fc2.com/>

きっかけ

発案者：国立大学図書館協会地区助成事業企画検討WG (H22年度)

国立大学図書館協会地区協会助成事業の申請にあたり、職員のスキルアップを兼ねて、九州地区国立大学図書館の若手職員のワーキンググループで企画検討した。そこで発案されたのが、「Library Lovers' Week」であった。以降、毎年実施し、H25年度で4回目となる。

開始にあたって

準備期間：約4ヶ月

準備の概要：

- ・6月下旬：WG 結成
- ・7月：メーリングリストにて、合同イベント企画検討
- ・8月8～9日：WG 会議開催
- ・9月上旬：九州地区大学図書館協会加盟館にキャンペーン参加館募集
キャンペーンホームページ等公開
- ・9月下旬：参加館募集締切、参加館へ実施要項送付(各館で準備を進める)
「読書の芋」のポスター、コメントテンプレート等をホームページからダウンロードできるように
- ・10月上旬：参加館から集まった教員のおすすめ図書コメントを集約して参加館全体へ配布。

広報：掲示物(館内・館外)、キャンペーンウェブサ

イト、facebook、twitter、H25年度キャンペーン公式キャラクター「いーもくん」

苦労したこと・工夫したこと

キャンペーンのWGメンバーは九州各地にいたため、顔を合わせるの1回の会議のみ。1.5日間のWG会議で企画を決め、実施要項、ポスター、テンプレート等準備の大半を集中して行なった。これにより自館に帰ってからのメンバー各人の作業負担を軽減している。

以降の準備作業はすべてメーリングリストでのやりとり。Googleドライブ等も活用して準備を進めた。

始めてよかったと思うこと

- ・図書館利用促進・読書推進
展示の効果は上々であった。参加しやすい企画作りが重要である。
- ・若手職員のスキルアップ
課題発見力・解決力の向上、ウェブツールの活用
- ・人的ネットワークの形成
国公私の枠を超えた交流ができた。
H24年度は有志で「図書館総合展 in 熊本」に出展

今後の課題は…?

- ・キャンペーンの参加館を増やすこと
現在は、九州地区大学図書館協会加盟館が全て参加しているわけではない。大学の規模や職員数等によらず、どの図書館でも参加できるような企画を考えたい
- ・ノンユーザー、ライトユーザーのさらなる掘り起こし
本好きの学生でなくとも気軽に参加し、図書館に興味を持ってもらえるような「敷居の低い」企画の検討

伝えたいこと

- ・日頃からヨコのつながりを大事にしておくこと
- ・各地区、地域の特色を活かすこと

WSD
For Faculty & Staff
All Students

早稲田大学 オープン教育センター
Waseda University Open Education Center

佐渡島紗織先生
Prof. Sadoshima, Saori
w/ simultaneous interpreter

早稲田大学における
アカデミックライティングの実践紹介

アカデミックライティングの重要性が広く知られるようになった。そのための支援を行っている。本講演では、早稲田大学が提供するライティング支援サービス、ライティングセンターの役割と活動内容について紹介する。同時に、本学で展開するライティング支援サービス「国際基督教大学ライティングサポートデスク」についても紹介する。

International Christian University Library
Writing Support Desk

May 14, Mon.
13:30-15:00

●Dialog House 2F
国際会議室
International Conference Room

International Christian University Library
Writing Support Desk wsd@icu.ac.jp

全学で運営する
ライティング・プログラムの組織作り
早稲田大学の例

Organizing a University-wide Academic Writing Program
Case of Waseda University

国際基督教大学図書館 ライティングサポート デスク講演会

学生数 2,939 名
館員数 専従 12 名、非常勤・臨時 15.5 名
蔵書数 751,000 冊
所在地 東京都三鷹市大沢 3 丁目 10-2
TEL 0422-33-3668

内容

教員のライティングサポートデスク (WSD) への理解と協力を得ることを主な目的として、全学的なライティング支援に関する講演会を実施した。

概要

対象者：学部生、大学院生、教職員
実施期間：2012 年 5 月 14 日
実施場所：国際基督教大学ダイアログハウス国際会議室
担当職員数：3~4 名
スケジュール：
13:30-13:40：挨拶、講師紹介
13:40-14:40：講演
14:40-15:00：質疑応答
場所：本学ダイアログハウス 2F 国際会議室
講演タイトル：「全学で運営するライティングプログラムの組織づくり 早稲田大学の例」
主催：教養学部長室および図書館ライティングサポートデスク

講演者：佐渡島紗織准教授、Ph. D. (教育学)、早稲田大学オープン教育センター
言語：日本語 (同時通訳付き)

きっかけ

発案者：国際基督教大学図書館ライティングサポートデスク
図書館長代行から講演会開催の指示を受け、教員の理解と協力を得るための方法として企画・立案した。

開始にあたって

準備期間：約 3 ヶ月
準備の概要：
目的確認、開始日時・開催場所の決定、講演者との交渉、決定
広報：ポスター掲示 (館内・館外)、チラシ (館内・館外)、図書館 HP 掲載、教職員・大学院生・その他関係者へメール配信
費用：講師料

苦勞したこと・工夫したこと

講演者の選定、日程調整、内容決定、広報活動、会場選定

始めてよかったと思うこと

学部生を対象とするライティング支援サービスの展開を全学的位置づけと取組のなかで、図書館が教養学長室と共同で取り組んでいることを学内に広く示す手段として活用できた。

今後の課題は…？

- ・チューターのチュータリング技術の向上、ライティングサービスの拡大
- ・教員および学内組織との協同・連携、運営体制の整備

伝えたいこと

計画を練ったら、まず実施してみて、その結果を検討すること。失敗をおそれずよりよいものにしていく姿勢、新しいアイデアを出していく前向きな姿勢が大切です。

空間

学生

教員

他部署

創価大学中央図書館 CETLによる学習支援



学生数 8,424名
館員数 専従6名、非常勤・臨時10.2名
蔵書数 1,084,000冊
所在地 東京都八王子市丹木町1-236
TEL 042-691-3191

内容

本学の教育・学習活動支援センター（CETL）と、図書館が協力をして、学習支援サービスを行っている。CETL から派遣される大学院学生の TA が、レポートの書き方や学習の方法など、学習全般のサポートを行う。

<主な相談内容>

- ・ 大学での勉強法一般に関すること
例) 授業のノートの取り方がわからない、復習方法に自信がない など
- ・ 学業上の悩みや不安に関する相談
例) 今の勉強がどう将来に結びつくのかわからない など
- ・ 大学院進学、留学に関する相談
- ・ 履修相談
- ・ レポート診断
- ・ CETL 主催の各種講座・キャンペーンの申し込み・問い合わせ

<サービス時間・場所>

場所：中央図書館1階ラーニング・ commons内
時間：15:30～18:30（授業実施日の月～金）

※同様のサービスを、図書館とは別に CETL の窓口でも行っている（場所：文系 A 棟 2 階（A206）・15:30～18:30（月～金））

※別に、「学習セミナー」を図書館のラーニング・ commons を使用して開催している。

概要

対象者：学部生

実施期間：2013 年 4 月～2014 年 1 月（長期休業期間を除く）

実施場所：中央図書館1階ラーニング・ commons 内専用デスク

担当職員数：1 名（図書館）実際にサービスを実施するのは大学院学生の TA が交代で 1 名着任

スケジュール：

15:30 前 TA が図書館に到着し、図書館カウンターで相談用備品（茶箱）を受け取り着任

15:30～18:30 相談に対応

18:30 過ぎ カウンターに相談用備品を戻して退館

きっかけ

発案者：教育・学習活動支援センター（CETL）

CETL から提案があり、図書館で検討した。図書館では、立教大学を見学して大学院学生による学習サポートの事例を研究していた。また、2010年より図書館カウンターの業務委託化によって、図書館員の人員が大幅に削減され、レファレンスサービスは申し込みがあった時のみの対応となっていた。

CETL としては、折角実施している学習相談 (CETL で実施) の利用者が少ないため、学生が多く学んでいる図書館で行いたいとの希望があった。

開始にあたって

準備期間：約 2 ヶ月

準備の概要：

- ・TA の雇用は、その費用 (アルバイト代) も含めて CETL が行っているため図書館の準備はない。
- ・年度の初めに、学習相談を担当する TA 向けに、図書館員がデータベース等の使用方法についてレクチャーしている。(これは図書館での学習相談の開始前から)
- ・学習相談者用のデスクおよび PC (学内 LAN に接続) を設置。
- ・学習相談窓口のパネルを作成。

広報：掲示 (館内)、チラシ (館内・館外)、学内印刷物への記事掲載、新入生ガイダンスで告知、館報

費用・用途：約 18 万円 (図書館が使用した費用は、専用デスクとチェアを購入した費用のみ。その他の、TA の雇用に関する費用や、PC 設置の為の機器および配線費用は他部署が負担。)

苦労したこと・工夫したこと

- ・相談窓口の専用デスクを、ラーニング・commons の開設 (2013 年 3 月) に当たって新調した (枝豆型デスク・椅子 4 脚)。
- ・以前は図書館のカウンターと並んでいたため、一般的な図書館サービスの質問が多かったが、場所をカウンターから離して、利用者の閲覧席に近いところに移したことによって、純粋な学習相談の場となった。

始めてよかったと思うこと

- ・ラーニング・commons として必須の人的サービスを提供する事ができた。

- ・昨年度に新設された「私立大学教育研究活性化設備整備事業」に採択され、上記の専用デスク・チェアも実質費用負担ゼロでサービスを開始できた。
- ・ラーニング・commons の利用が徐々に定着し、学習の為の協同学習が活発に行われるようになった。

今後の課題は…?

近年、図書館の入館者数が減少傾向にある。原因は様々考えられるが、図書館の正面の食堂が新たに建て直され、無線 LAN も利用できるため、そこに従来の図書館利用者が流れていると分析している。

更に本年 9 月、学内に新たな教育棟が新設され、そこにもラーニング・commons が開設される。この施設は、大多数の学生の授業教室に近い場所にあるため、図書館への入館者および図書館のラーニング・commons の利用者が減少することが考えられる。

前述した授業教室に近い他施設のラーニング・commons での学習相談とは違う、豊富な資料を持つ図書館だからこそできる学習相談をいかに提供するかが課題。

伝えたいこと

学内の CETL の様な部署と協働する事が大事です。本学の場合、全学読書運動とコラボレーション企画を組んでおり、それから様々相談するようになりました。GP や各種の補助金申請にも情報を共有して、助け合って成果を得ております。

大学院学生の TA の教育を、以下に充実させる事も重要です。本学は、CETL 所属の教員が TA 育成の為に様々な育成プログラムを用意しています。図書館も、前述したデータベースの講習に加えて、今年からレファレンスインタビューに関する講習も行う予定です。



帝京大学メディアライブラリーセンター 共読ライブラリープロジェクト



帝京大学八王子キャンパス
 学生数 16,901名
 館員数 専従13名、非常勤・臨時4.0名
 蔵書数 667,000冊
 所在地 東京都八王子市大塚359
 TEL 042-678-3315

[数値：2013年5月現在]

内容

「共読ライブラリー」は帝京大学八王子キャンパスの図書館で実施している全学的な読書推進プロジェクトである。編集工学研究所の所長 松岡正剛氏が提唱する「本を薦めたり、読み合わせたり、評し合う」という、「共読」の考え方をベースに、編集工学研究所とともに4年間で下記4つのメニューをすすめていくことを目指している。

- ・書棚プロジェクトとコミュニケーション
- ・読書術コースウェア
- ・広報ツール作成とイベント
- ・共読空間プロジェクト

概要

対象者：すべての利用者
 実施期間：2012年4月～2016年3月
 実施場所：帝京大学メディアライブラリーセンター
 担当職員数：7名

きっかけ

帝京大学メディアライブラリーセンター（以下、MELIC）では新館建築後6年が経過し、新館への移転後順調に伸びていた貸出数の伸びが止まってきた。当初からの目標だった学生1人当たりの年間貸出冊数を7.5冊から10冊以上に引き上げる方策が必要だった。

第二の要因は大学の教育方針と社会的要請である。どのように教育と連携して読書力や情報リテラシーの向上を支援するか、学生が主体的に学ぶ環境をどうつくるか、教育連携企画の1つとして読書関連授業をサポートする目的として展示架の導入を考えたのが「共読ライブラリー」プロジェクトの始まりである。

開始にあたって

準備の概要：
 広報：掲示（館内・館外）、チラシ（館内）、放送（館内・館外）、デジタルサイネージ（館内）、図書館HP、プレスリリース、メール、グッズの配布、学内印刷

物への記事掲載

費用：非公開

苦労したこと・工夫したこと

- ・全学で「共読ライブラリー」を進めるため、学生が主体的に「共読ライブラリー」を運営している組織を作ること
- ・教員に「共読ライブラリー」推進側のメンバーとして参画してもらうこと
- ・学長をリーダーとした全学的プロジェクトのイメージ作りをおこなうこと
- ・外部の評価を大学内に還元すること
- ・すべてを記録し編集すること

始めてよかったと思うこと

- ・大学図書館の認知度が上がったこと。特に他業種の方からの問い合わせが増えた。
- ・図書館員だけの広報宣伝活動にはマンネリと共に限界があり、異業種とのコラボが起爆剤となった。
- ・共読サポーターという学生と図書館をつなぐ存在ができたこと。学生目線を取り入れた情報の拡散が可能に。
- ・本棚展示を通して、職員のスキルが向上した。

今後の課題は…？

- ①本棚プロジェクトとコミュニケーション
Web上のOPAC書評システムの活用やリコメンデーションシステムといったバーチャルのコミュニケーションツールによる共読環境の構築
- ②読書術コースウェア
 - ・全学科導入
 - ・入門編を受講した学生に対して上級コースの提案
- ③広報ツール作成とイベント
 - ・共読サポーターによる学生対象の広報誌発行
 - ・共読グッズの作成
 - ・コンテスト形式のイベントの実施
- ④共読空間プロジェクト
 - ・MONDO 書架のイメージを館内全体に拡大
- ⑤運営体制の見直し

伝えたいこと

ぜひ、いろんな図書館とコラボレーションしていきたいです。一緒に『共読』しましょう！

空間

学生

教員

他部署

日本女子大学図書館 卒業生による図書館友の会



内容

日本女子大学図書館友の会は、本学第6代学長上代タノによって1965年に創設され、次のような諸活動を通じて大学図書館の充実発展に尽くし、会員相互の前進向上をはかることを目的としていた。

2013年3月末を以って閉会した。図書館とは別組織。活動内容は以下。

- ・日本女子大学図書館の参考図書購入補助
- ・上代タノ平和文庫の選書、収書、管理、運営の補助
- ・学園関係資料収集、整理補助
- ・卒業生著作調査及び目録作成
- ・各種講座、読書会開催
- ・文学館、文庫、美術館、図書館等見学、文学散歩など
- ・会報（年3回）の発行

概要

対象者：友の会の趣旨に賛同され、所定の会費を納めた方。会員の種類と会費は以下。

- ・日本女子大学全学園の教職員、旧教職員、卒業生、在校生、卒業生の父母または友の会会員の紹介を受けた方。
- ・年会費は創設時1000円、金額改定を経て、1993年度以降は一般会員5000円、維持会員10000円以上。

実施期間：1965年6月～2013年3月

実施場所：図書館内、学内、学外

担当職員数：図書館長、図書館役職者

（友の会事務局は図書館職員とは別組織で、常任幹事1名がスタッフ（年代により1～7名）を統率。）

きっかけ

発案者：本学第6代学長上代タノ

上代タノが、米国視察の際、スミス・カレッジにおける“Friends of the Smith College Library”

の存在に感銘を受けた。

1956年に本学の学長に就任し、1964年に本学図書館を新設。その翌年に、新図書館を支援するために「図書館友の会」の設立を提唱した。

開始にあたって

準備の概要：上代タノが設立を提唱し、設立の趣意書を作成。学内・学外に広く呼びかけ、協力を求めた。

広報：掲示物（館外）、チラシ（館内・館外）、図書館HP、学内印刷物への記事掲載

費用：平成24年度 500万円程度（大学とは別会計）

始めてよかったと思うこと

- ・本学図書館発展、充実への寄与（資料費補助、上代タノ平和文庫の発展など）
- ・卒業生著作に関する調査、目録作成
- ・文化的活動を通じた会員相互の前進、向上
- ・図書館利用資格を持たないが友の会の趣旨に賛同して入会された方に、図書館利用の途が開かれていたこと

伝えたいこと

日本女子大学図書館友の会は図書館とは別組織であり、事業は友の会により遂行されました。友の会事務局の活動を身近に見てきた経験上、仮に図書館本体が友の会的な活動内容による図書館の後援会的組織を立ち上げ継続していく場合、その運営には相応の負担が予想されます。

大学図書館の後援会的組織の特典として、一般的に、図書館の利用（図書の貸出など）が考えられます。きわめて特色ある蔵書をもつ図書館においては、この特典のみでも後援会（会費制）が成立するかもしれませんが、プラスして、文化的活動（講座、研修会など）を継続提供し成功させていくことは、生涯学習的な場が多様に提供されている現在において、図書館内の一事業として取り組むには相当周到なプランが必要と思われます。



新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部図書館

ヨム得



学生数 1,664名
館員数 専従3名、非常勤・臨時5.8名
蔵書数 145,000冊
所在地 新潟県新潟市中央区水道町1-5939
TEL 025-230-7748

【数値：2013年5月現在】

内容

本を読んで図書館のビブリオバトルと生協の読書マラソンに参加し下記の特典をGet!しようという企画。

【特典】

読書マラソン：コメントカード10冊分で生協利用券500円分進呈

ビブリオバトル：チャンプブックに選ばれた人に500円分の図書カード進呈

<連携部分>

- ・図書館・生協のカウンターでのエントリーカードの受付。
- ・読書マラソンのコメントカードの受付。

概要

対象者：学部生、大学院生

実施期間：2012年1月～

実施場所：図書館

担当職員数：2名

きっかけ

発案者：図書館

読書推進活動の一環として図書館のカウンターで生協の読書マラソンのエントリーカードとコメントカードの受付をしていたので、読書マラソンの参加者にビブリオバトルもアピールしてお互いに参加者を増やすことができると考えた。

開始にあたって

準備期間：約1ヶ月

準備の概要：生協の担当者と話をして店長の承諾を得て、チラシやポスターを作成して広報した
広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、図書館ホームページ、twitter

費用：0円（学内の資料を利用したので、特別に費用はかかっていない）

始めてよかったと思うこと

ビブリオバトルや読書マラソンとも参加者の増加にはあまりつながっていないが、図書館広報のチ

チャンネルが増えたのは良かった。

今後の課題は…？

単にお互いのエントリーを受け付けるだけでなく、企画自体を連動させていく必要がある。

伝えたいこと

生協も読書マラソンの参加者を増やしたいと思っているので、協力は得られやすいと思います。

但し、生協側からはあまり動いてくれないことが予想されますので、図書館側から積極的に働きかけることが必要かもしれません。



空間

学生

教員

他部署

二松学舎大学附属図書館

図書館×キャリアセンター共催

『就活』に役立つツールの活用法を教えます！



九段キャンパス

学生数 3,114名

館員数 専従3名、非常勤・臨時0名

派遣職員等6.3人

蔵書数 190,000冊

所在地 東京都千代田区三番町6番地16

TEL 03-3263-6364

内容

図書館で契約しているオンラインデータベースの中から、就活に役立つ4つのデータベース（東洋経済デジタルコンテンツ・ライブラリー、日経テレコン21、JapanKnowledge、MAGAZINEPLUS）の活用法について、専門家を講師に招き、実際にデータベースを使用しながら活用法を学んでいく。

概要

対象者：学部生、大学院生
実施期間：2012年11月
※毎週木曜日／全4回開催
実施場所：パソコン教室
担当職員数：3名

きっかけ

発案者：図書館

図書館だけで情報検索講習会を行ってもなかなか参加者が集まらず、どうしたら学生に興味を持ってもらえるか苦慮していたところ、たまたま参加したワークショップ（紀伊国屋書店主催「2012年デー

データベース・ワークショップ」）で、他大学の図書館が就活をテーマに情報検索講習会を開催していたこと。

開始にあたって

準備期間：約4ヶ月

準備の概要：

キャリアセンターや代理店との下打ち合わせ／告知ポスターやチラシ、ホームページのお知らせの作成／図書委員会の承認、学内の決裁／講習会の配布資料、アンケートの準備

広報：掲示（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、図書館HP、大学HP

費用：0円

この講習会のために確保した予算は0円という意味。正確には、事務室でポスターやチラシ、配布資料を印刷した際のコピー料金はかかっているが、その分は算出できない。

講師には、無料で講習会をしていただいた。

苦労したこと・工夫したこと

・募集開始後もなかなか参加者が集まらなかったの
で、先生方の研究室に直接伺い、授業やゼミでの

宣伝をお願いした。

- ・キャリアセンターと共催していたので、キャリア教育の授業等でも宣伝をしてもらった。
- ・代理店から、販促用のグッズで余っているものを提供してもらい、講習会の参加者に配った（喜んでもらった）。

始めてよかったと思うこと

- ・おそらく図書館単独では集めることができなかったであろう人数の学生に参加してもらえた。
- ・図書館で使えるデータベースに興味を持ってもらえるようになり、利用数も増えた。
- ・就職に関しては、早くから危機感を持っている学生が多かったため、そのニーズに応えることができた。
- ・他部署と連携することにより、横のつながりが密になった。

今後の課題は…？

- ・効果的な宣伝方法。
- ・開催場所の確保（図書館内で講習会を開催できるスペースがないのでパソコン教室を使用したのが、授業が入っていて使えない時間が多く、結局 18 時 20 分からと遅い時間の開催となってしまった）。
- ・年に複数回の開催。

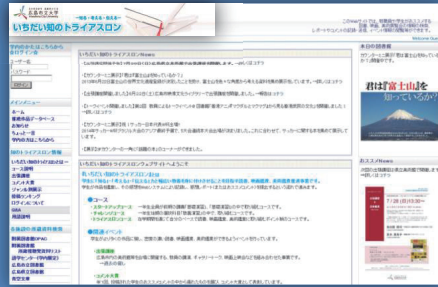
伝えたいこと

アンケートの回答では、今回の講習会を「何より知りましたか」という項目では、「図書館内の掲示」が一番で、次いで多かったのが「先生の紹介」でした。先生の協力は強力です。

講習会にかかる時間は「90分」が一番妥当のようでした。

また、参加者からは、「会社四季報の見方が知りたい」「大企業や有名企業より、優良な中小企業を探す方法を知りたい」という声が多く寄せられました。

広島市立大学附属図書館 いちだいい知のトライアスロン



学生数 2,155 名
 館員数 14 名
 蔵書数 320,462 冊
 所在地 広島県広島市安佐南区大塚東 3 丁目 4-1
 TEL 082-830-1508

[数値：2013年5月現在]

内容

学生に「知る」「考える」「伝える」力と、幅広い教養を身に付けさせることを目指す読書・映画鑑賞・美術鑑賞推進事業。

この事業は、学生が作品を鑑賞し、その感想を Web システムにより記録し、感想レポート（またはおススメコメント）を提出するという流れで進む。読書、映画鑑賞、美術鑑賞というのは個人的な楽しみだが、より深いものにするため、作品の推薦や感想レポートへの返信等で教員が学生に関わる体制を整えているところに特徴がある。これは、学部を越えた学生と教員の交流にもなっている。また、全学の初年次教育カリキュラムに本事業を組み込んでいることも大きな特色。さらに、広島市内の美術館等と連携し、映画、美術鑑賞の出張講座を実施することで本学の学生だけでなく、広く広島市民にも本事業のサービスを提供している。

概要

対象者：学部生、大学院生、卒業生
 実施期間：2010年4月～
 実施場所：読書、作品推薦などは Web システムの利用、出張講座は学外（美術館等）
 担当職員数：17名（うち 教員 8名、職員 9名）
 スケジュール（年間）：
 前期（4～8月）：基礎演習（スタートアップコース）
 4月：前年度コメント大賞表彰式
 6月：ブックハンティング、映画上映会
 後期（10～2月）：教養演習（チャレンジコース）
 11月：ブックハンティング
 12月：映画上映会
 2月：コメント大賞選考
 年間：トライアスロンコース、出張講座（年 4～5 回）、展示（年 12 回程度）、教職員による作品の推薦、学生図書館サポーター、推薦図書・映画の提供 など

きっかけ

発案者：大学執行部

大学カリキュラムにおいて教養教育の再構築が大きな課題となっていた。一方、学生の活字離れの傾向が本学でも顕著になり、その防止を図ることが大学図書館で課題となっていた。

こうした課題を解決するための方策として、集中して多数の本を読むことで読解力、理解力、思考力が身につく、映画や美術鑑賞をすることで豊かな心が養われ、ひいては教養を高めることが可能になると考えた。

身近な教員から薦められた本や映画、あるいは美術展を紹介されれば、学生はもっとそれらに親しんでくれるのではないかと、そこを入口にして読書の楽しさに気づき、映画や美術に親しみ、学問への関心も高まるのではないかとという発想がきっかけでこの事業が開始された。

開始にあたって

準備期間：約9ヶ月

準備の概要：

教員への協力依頼（図書・映画等の作品の推薦、コメントの返信）、推薦作品を中心とした事業用の図書・映画等の購入、学生への呼びかけ、専用コーナーの設置、専用Webシステムの構築

広報：掲示（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、デジタルサイネージ（館内・館外）、図書館HP、学内印刷物への記事掲載

費用・用途：100万円程度（図書等の購入費、ウェブサイト開設費、パンフレット印刷費）

苦労したこと・工夫したこと

- ・学生の参加を促すため、初のトライアスロン実施委員会を立ち上げ、同委員会のメンバーや基礎演習担当教員の協力を得ながら参加者数を増やす工夫をした。
- ・学生に幅広いジャンルの作品に出会ってもらえるよう、専用コーナーで図書館職員が12ジャンルの図書を交代で展示する「ジャンル別展示」を開始した。その内容はウェブサイトでも公開し、学生が学問分野以外の図書に出会う場を設けることができた。

始めてよかったと思うこと

- ・学生や教員と密接に関わり、支援できるようになったこと。
- ・事業を通じて他の附属施設（芸術資料館、語学センター）との連携が図れ、それぞれの特色を生かした多様なサービスが可能となったこと。
- ・選書基準により購入が難しかった分野の図書（例：小説等）を購入することができ、学生の実態に合った選書ができるようになったため、そのコーナーの貸出冊数の増加や図書館利用の促進につながっていること。
- ・この事業の中でブックハンティングや学生図書館サポーター制度を導入することができ、学生の声が以前より聞きやすくなったこと。

今後の課題は…？

- ・読書や映画等の作品鑑賞の上級コース（チャレンジコースやマラソンコース）に継続して挑戦する学生を増やすこと。
- ・出張講座等のイベントへの学生参加数をさらに増やすこと。
- ・広報

伝えたいこと

本学のこの事業は、執行部、教務委員等、教員の協力に負うところが大きく、図書館職員だけでの実施は困難です。

図書館独自の取り組みでなく本学のように授業と連携し強制力を持たせるといった手法も、目的達成のためには必要であり効果的と考えます。

広島修道大学図書館 図書館でシューカツ!!

特集 図書館でシューカツ!!

Library News

いば、就職活動とは違うものの、何をどうしたら良いのか分からない...という人はいませんか? 就職活動は、しっかりと準備をしておくことが大事です。今、就職活動中の人も、これから本番という人も、図書館に所蔵している資料を活用して、就職活動に役立ててください。

1F101 就職活動の準備がはじまる
就職活動の準備がはじまる。まずは自己分析から始める。自己分析のポイントは、自分の強みや弱みを客観的に評価すること。また、自分の将来の夢や目標を明確にすること。自己分析が完了したら、次に業界や企業について調べる。業界や企業について調べるには、業界誌や企業情報誌、インターネット上の企業情報などを活用する。また、就職活動の準備として、履歴書やエントリーシートを作成することも重要。履歴書やエントリーシートを作成する際には、自分の強みや経験をアピールすること。また、面接の練習も行う。面接の練習には、模擬面接や面接練習会に参加すること。面接の練習を通じて、自分の強みや経験をアピールする練習ができる。また、面接の練習を通じて、面接官の質問に対する答え方についても練習できる。就職活動の準備が完了したら、最後に面接の練習を行う。面接の練習には、模擬面接や面接練習会に参加すること。面接の練習を通じて、自分の強みや経験をアピールする練習ができる。また、面接の練習を通じて、面接官の質問に対する答え方についても練習できる。

1F102 就職活動の準備がはじまる
就職活動の準備がはじまる。まずは自己分析から始める。自己分析のポイントは、自分の強みや弱みを客観的に評価すること。また、自分の将来の夢や目標を明確にすること。自己分析が完了したら、次に業界や企業について調べる。業界や企業について調べるには、業界誌や企業情報誌、インターネット上の企業情報などを活用する。また、就職活動の準備として、履歴書やエントリーシートを作成することも重要。履歴書やエントリーシートを作成する際には、自分の強みや経験をアピールすること。また、面接の練習も行う。面接の練習には、模擬面接や面接練習会に参加すること。面接の練習を通じて、自分の強みや経験をアピールする練習ができる。また、面接の練習を通じて、面接官の質問に対する答え方についても練習できる。就職活動の準備が完了したら、最後に面接の練習を行う。面接の練習には、模擬面接や面接練習会に参加すること。面接の練習を通じて、自分の強みや経験をアピールする練習ができる。また、面接の練習を通じて、面接官の質問に対する答え方についても練習できる。

1F103 業界・企業を研究しよう
業界・企業を研究しよう。まずは業界について調べる。業界について調べるには、業界誌や企業情報誌、インターネット上の企業情報などを活用する。また、就職活動の準備として、履歴書やエントリーシートを作成することも重要。履歴書やエントリーシートを作成する際には、自分の強みや経験をアピールすること。また、面接の練習も行う。面接の練習には、模擬面接や面接練習会に参加すること。面接の練習を通じて、自分の強みや経験をアピールする練習ができる。また、面接の練習を通じて、面接官の質問に対する答え方についても練習できる。就職活動の準備が完了したら、最後に面接の練習を行う。面接の練習には、模擬面接や面接練習会に参加すること。面接の練習を通じて、自分の強みや経験をアピールする練習ができる。また、面接の練習を通じて、面接官の質問に対する答え方についても練習できる。

2F 3F

学生数 6,183名
館員数 専従16名、非常勤・臨時12.2名
蔵書数 800,000冊

所在地 広島県広島市安佐南区大塚東1丁目1-1
TEL 082-830-1112

内容

図書館のできる就職活動の支援として、図書館発行人物『Library News』の中で、特集記事を組んで掲載。関連部局のキャリアセンターに協力を依頼、情報提供をしていただいた。3 ページで構成した記事のうち、図書館資料やデータベースを見開きで紹介、残るページはキャリアセンターメインの記事を掲載した。図書館には業界本の常設コーナーがあるが、今回の記事に合わせて就職活動関連の資料を展示。

概要

対象者：学部生、大学院生
発行年月：2012年10月
担当職員数：2名

きっかけ

発案者：図書館
就職活動に関連する特集は、今までに掲載したことがあるようで一度もなかった。他大学図書館の広報誌等では就職活動関連の特集記事がよく掲載され

ていることを確認し、本学での掲載を提案した。編集会議の段階で発行の時期と就職活動開始の時期も合っていたことから、特集記事を組むことを決めた。

開始にあたって

準備期間：約1ヶ月
準備の概要：キャリアセンターへの協力要請
図書館所蔵資料検索、資料収集など。

苦労したこと・工夫したこと

- ・「就職活動」がテーマであったので、図書館だけで完結させずに関連部局であるキャリアセンターに協力を要請した。そこで得た情報、大手企業の就職サイトや出版物等も参考にし、記事に反映させた。
- ・ただ資料を紹介するだけでは利用者の関心を引くことはできないと考え、就職活動の一連の流れをSTEPに分けてレイアウトを構成。各STEPに合った資料・データベースを写真とともに紹介することとした。
- ・掲載する資料については、まず関連する分野の書

架へ行きブラウジング、内容を吟味した。表紙の装丁の華やかさも選書のポイントとなった。キャリアセンター推薦の資料も紹介。推薦資料が図書館に所蔵されていない場合には、図書館で新たに購入・受入をした。

- ・ 今回の記事に合わせて、展示コーナーに就職活動関連の資料を展示した。

伝えたいこと

- ・ 初めての試みがいくつかある中で不安はあったが、チャレンジする気持ちがタイミングや環境を味方につけた。面白い・やってみたいと思うことには、恐れずに挑戦する姿勢が大切だと学んだ。

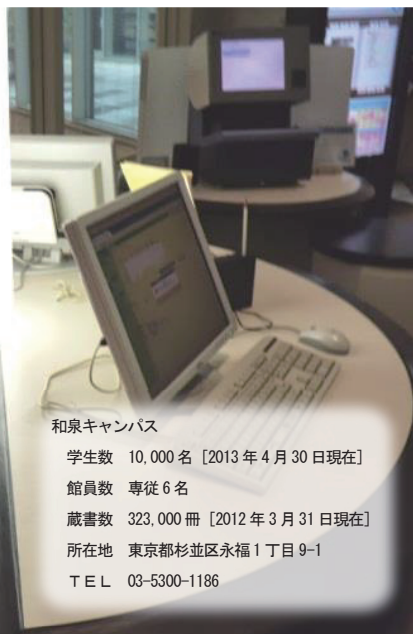
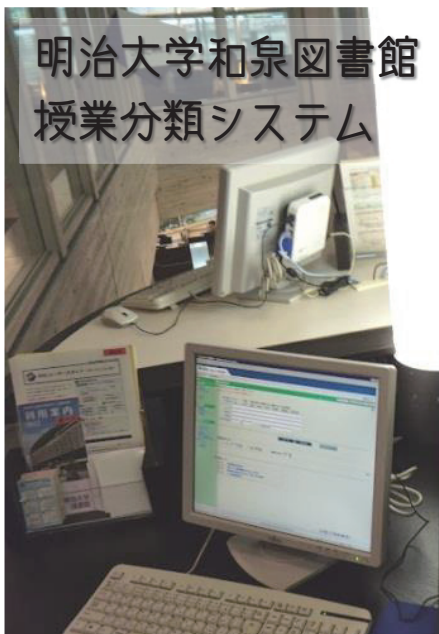
空間

学生

教員

他部署

明治大学和泉図書館 授業分類システム



和泉キャンパス

学生数 10,000名 [2013年4月30日現在]
館員数 専従6名
蔵書数 323,000冊 [2012年3月31日現在]
所在地 東京都杉並区永福1丁目9-1
TEL 03-5300-1186

内容

シラバスの内容を参考に、各授業に分類を付与し、授業と関連する資料を授業名や担当教員名から検索することができる。

概要

対象者：学部生

実施期間：2012年4月～

実施場所：図書館 OPAC 上のオンラインサービス

担当職員数：5名（実施に向けた自主勉強会の参加人数）

きっかけ

発案者：図書館総務事務室 システム担当中林氏

図書館のもっとも専門的業務の一つは分類の付与であるが、十分に活用されているとはいえない。分類を多方面で活用することにより図書館員の専門性の価値を高め、図書館の教育支援活動の充実を図るサービスを検討していたのがきっかけ。

開始にあたって

準備期間：約24ヵ月

準備の概要：

- ・システム開発
- ・図書館における合意形成
- ・予算の獲得
- ・分類付与業務を実施する業者の確保

広報：

- ・掲示物（館内）
- ・チラシ（館内）
- ・図書館ホームページ
- ・twitter

費用・用途：60万円（シラバス約2,000件への分類付与作業費、システム開発費等は内部開発のため不要）

苦労したこと・工夫したこと

- ・図書館システムとのシームレスな連携
- ・予算の確保
- ・適切な分類の付与

始めてよかったと思うこと

まだ学生には浸透しておらず、効果の検証が未実施のため、メリットは挙げられない。開発者としては、分類の新たな可能性を示せたのが現時点での最大のメリットではないかと考える。

今後の課題は…？

- ・利用者（学生）への周知と予算の確保
- ・図書館のサービスへの理解

伝えたいこと

大学側のシラバスシステムの大幅なシステム変更に対応するため、現在サービス停止中です。(2013年4月シラバスシステム変更)

予算も十分に確保されていないため、再開のめどは立っていません。

開発者の人事異動により、サービス継続が困難となっています。独自のサービス、システム導入の際には全般的に言えることですが、事業継続を念頭に開発等をされることをお勧めします。

空間

学生

教員

他部署

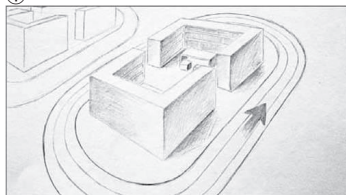


コラム① ドイツ人が考える「快適な図書館空間」

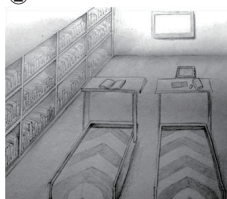
まずは下の図をご覧ください。何だか想像できますか。

これはドイツの公的機関 **DINI** が 2009 年に「生きた学びの場」をテーマに全国規模で学生に「快適な図書館像」について募ったコンテストの応募作を紹介する講評集に掲載されたものです。

①



②



それぞれの図には説明があり、①は「体をリラックスして勉強の能率を高める動く道」、②は「ゆっくり動くベルトの上で読書を楽しむ」とあります。補足すれば、どちらも閲覧席にベルトの動く歩行帯を設け、①はブース内で勉強に疲れたらその周りを動くベルトに乗って散歩をする、②は動くベルトの上で歩きながら勉強や読書をする、というものです。

ドイツ人は人一倍散歩が好きな国民です。「ちょっと散歩をしましょう。」と言われてついでに行ったら 1 時間以上も歩きまわってヘトヘトになったという経験をしたことが何度もある私ですが、図書館内にまで散歩を取り入れるという発想はドイツ人ならではかもしれません。

コラム② 学生とイラストでコラボしてみました！

立正大学情報メディアセンターでは、図書館で働く学生アルバイトを“ライブラリアン (Librarian) の卵”、略して“りぶたま”と命名し、書架移動や装備、レファレンス補助、DVD 上映会の企画・実施など、様々な図書館業務を手伝ってもらっています。

そのうちのひとつとして、学内でもじわじわと人気が出てきているのはりぶたまが描いてくれているイラストです。本学では、年 2 回発行のライブラリーマガジン

『立正本遊』^{りっしょうほんすずき}の表紙や挿絵、館内で配布している葉、その他掲示物などへイラストを掲載しています。

ライブラリーマガジンの表紙はその年の干支にちなんだイラストを掲載、2013 年度で創刊 3 年目を迎えます。また、葉には館内マナーについて楽しく学んでもらえるよう 4 コマ漫画形式でイラストを掲載。その 4 コマ漫画にアニメーションをつけたものをディスプレイを使って館内を流し、マナーについて呼びかけることも行なっています。

きっかけは学生さんが休憩時間に何気なく描いていたイラストから始まりました。皆さんの大学にも、コラボするきっかけがゴロゴロ転がっているかもしれません！



見学レポート

2012年11月27日見学

千葉大学アカデミック・リンク・センター

千葉大学アカデミック・リンク・センターは、「アクティブ・ラーニング・スペース」「コンテンツ・ラボ」「ティーチング・ハブ」の3つの機能の実現によって、学習とコンテンツの近接による能動的学習の促進を実現するため、2011年4月に設置された。

今回は「アクティブ・ラーニング・スペース」を中心に、新設の「対話する図書館」N棟を案内いただいた。



人員構成

[→サービス事例集 p.70 参照]

図書館の職員は、図書系（経理・庶務以外）12名、非常勤（カウンター・ILL など）15名が業務に就いており、夜間土日については業務委託を行っている。

アカデミック・リンク・センターには所属の教員があり、中には兼務の教員もいるが、専用の予算がついているため、プロジェクト特任教員が所属している。

スチューデントアシスタントについては、2011年度より学習支援に16名、2012年度より技術系業務の支援に17名、図書館業務の支援に11名が配置されている。

特色ある取り組み



●リエゾン・ライブラリアン

前後期科目が70科目程ある中、職員1名あたり7～8科目を担当し、各科目・教員担当のリエゾン・ライブラリアンとして、主題に特化したサービスを展開している。

●授業資料ナビゲーター

リエゾン・ライブラリアンの活動として、教員と連携し、授業の各科目で参考となる資料やデータベースを掲載した、授業のためのパスファインダー「授業資

料ナビゲーター」を作成している。

「授業資料ナビゲーター」掲載の資料は「貸出用」と「閲覧用」のオリジナルの帯を貼付し、2冊ずつ用意、必ず1冊は館内で利用できるようにしている。これらの資料は、「授業資料ナビゲーター」の設置されたパンフレットスタンド側のブックツリーに配架されている。配置場所コードは変更しており、資料にはICが入っているため、手に取られた頻度を計測できるようになっている。



●1210 あかりんアワー

アカデミック・リンク・センター入口のプレゼンテーション・スペースにて、学生・教職員の研究やおすすめの本などを12:10からの昼休みの時間を使って紹介してもらう、セミナーを開催している。1210 あかりんアワーで紹介した資料は、ブックツリーにてセミナー時の写真と併せて展示を行っている。

施設・設備

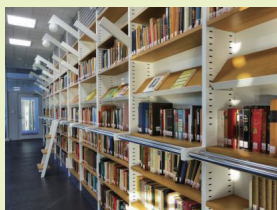
●プレゼンテーション・スペース

アカデミック・リンク・センターのゲート外の入口に隣接する、前方に大型スクリーン・階段状の客席スペース。建物の外側がガラス張りのため、通行人にも注目される仕組みとなっている。図書館側からの依頼による音出し以外の音出しは禁止であるが、予約で盛況とのお話。イベント時に多いときは1回あたり80人、出入りしている人数を含めると100人を越えるときもある。



●ブックツリー

見せる工夫が行える書架。ように4面でできている。新着ワー、授業資料ナビゲータの資



N棟の左右の階段を囲う図書展示やあかりんア料などを配架している。



●グループ学習室・研究個室

予約制としているが、空室であれば利用可。個人研究個室は大学院生、教員のみ利用可としている。

●学習支援席

2Fの可動式イスと机のあるアクティブ・ラーニング・スペースでは、大学院生による分野別学習相談、教員によるオフィスアワー、図書館職員によるレファレンスサービスが行われている。これらの学習支援も利用者席同様、可動式のイスと机を使用しており、話しかけやすい雰囲気が感じられた。



●館内について

飲食については、蓋付きの飲み物の持ち込み、館内での飲用は可。校内の食堂よりも図書館の開館時間が長いため、滞在型図書館の役割も果たしている。

館内に設置されているPCは総合メディア基盤センターが管理を行っている。またノートPC、iPad、プロジェクタ、電子辞書は図書館内にて貸出を行っている。

館内は学生たちの意識の中で、自然にゾーニングされているとのお話であった。PC禁止ゾーンでは、学生同士で注意し合っているとのこと。能動的にグループなどで学習に励む学生たちの姿がとても印象的であり、学習に対する意識の高さが感じられた。

最後に

「千葉大学附属図書館本館利用案内」をご覧になったことはあるだろうか？こちらに記載されている2つの絵には違いがある。片方の絵にはリンゴが木になっており、もう一方はリンゴが木から落ちてきていることに私たちが気づいたように、アカデミック・リンク・センターを使った後、何か発見や気づきがあれば、という願いを込め学生支援を行っている、といった職員の方のお話が非常に印象的であった。それが実際に感じられる図書館であった。

2013年5月24日見学 東京女子大学図書館

東京女子大学図書館は、1996年に新築された、1学部4学科・大学院2研究科を対象とした総合図書館だ。2007年度に1階を中心とした改修を行い、メディアスペース、コミュニケーション・オープンスペース、プレゼンテーションルーム、リフレッシュルーム等、学生のニーズに対応した空間を新たに整備している。

中庭「croSS広場」に面した1階フロアの側面はガラス張り。館内から木々の緑や、移動・休憩している学生達の姿が目に入り、自然光が差し込む明るい空間だ。また、館外からも館内で学習・読書を行う学生の様子を伺うことができ、壁を感じさせない開放的な図書館となっている。

改修を行った2007年度より、学生支援GPに採択されたプログラム「マイライフ・マイライブラリー」を実施。“学生の潜在的な力を引き出し、知的探求の拠点となる「滞在型図書館」に発展させ、学習支援のために学生アシスタントを積極的に活用する学生協働サポート体制を整備するプログラム”だ。情報リテラシー講習（ガイダンス）、基礎的日本語能力養成講習等の学習支援講座も開催されている。

施設改修というハード面、学生アシスタントの活用・各種学習支援活動プログラム開催といったソフト面、両面が調った図書館だ。



飲食可能リフレッシュルーム

基礎的日本語能力養成講習

学習支援として、「基礎的日本語能力養成講習」を開催し、『～混ぜるなケン！～「話しことば」と「書きことば」』『わたし』をプレゼンテーションすることば』の2講習を館内プレゼンテーションルームで実施。

『わたし』をプレゼンテーションすることば』については就職活動の際にも参考になる内容のため、キャリア・センターでもチラシ・申込用紙を配付しているという。現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）に選定されている、総合的キャリア構築支援「東京女子大学キャリア・ツリー」との関連性を持たせることも意識されているとのこと。大学全体として、学生の学習・研究・キャリア支援をされている。

2講習とも定員20名で、半期に2回ずつ、年間で計160名が参加可能。前期の定員は見学時の段階で既に埋まっているとのこと、盛況の様子が伺えた。

学生アシスタント

●ボランティア・スタッフ

図書館の利用案内を行なっているボランティア・スタッフのメンバーは、見学时で計38名とのこと。スタッフは館内で「ボランティア・スタッフ優先席」という閲覧席を利用し、滞在時に気軽に声かけられるようになっている。

また、OPAC専用PCの上に「ボランティア・スタッフ勤務中」という札を置いたり、カウンターで活動フロアを掲示したりすることにより、存在を利用者に周知している。OPAC上の案内掲示は、学生によ



「ボランティア・スタッフ勤務中」POP

る提案とのこと。学生の目線ならではの細やかな工夫だ。「学生から出されたアイデアで、すぐにできることはすぐに実行するようにしています。」という言葉の通り、学生アシスタント同士、またスタッフと学生アシスタントの意見交換が活発であることが伺えた。学生の意見を吸収し、実際に反映させていくことで、帰属意識を高めているという。



展示コーナー

学生が参加する選書ツアーでは、選んだ図書のカバーに請求記号を記入して展示し、選定した学生による書評のポップも作成。特に優れた作品には図書館長賞を授賞されているとのこと。見学時は歴代の図書館長賞授賞作品の展示を拝見できた。

● サポーター

サポーターは、館内の利用案内の他、返本・書架整備作業を行いながら館内の利用案内等を担当する学生アシスタント。今年度は定員 32 名のところ、約 90 名もの応募があり、申込み開始後、数秒で定員に達してしまうほどの人気とのこと。学生アシスタント制度の認知度の高さが伺えた。

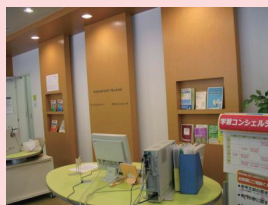
また、返本作業を行なうことで「どのような資料が人気か、授業に役立っているか」ということを把握でき、新たな本との出会いが生まれているという。他学生が利用した資料に触れることができることは、サポーターにとって貴重な経験となっていることだろう。

なお、同館では、利用者が館内で閲覧した資料は書棚に戻さず返本用ブックトラックに返却する方法を取っていて、返本用ブックトラックに戻された資料を職員が毎日ハンディターミナルで読み取り、館内利用数の統計を取っているようだ。

● システム・サポーター

1階の「アシスタント・アイランド」という一角で、館内における情報機器端末の使い方や、トラブルへの対処を担当している。メンバーが情報共有に利用しているメンバーリストには、情報処理教育関係の教員も含まれているとのこと。

メンバーの発案で、マニュアル（Q&A集）を作成したこともあるようだ。全ての学生アシスタントの声を活かし、サービスを日々改善されていることが感じられた。



アシスタント・アイランド

● 学習コンシェルジュ

大学院生が「アシスタント・アイランド」で学部学生の質問に対応し、学習の支援を行っている。卒業論文に関する相談は指導教官を聞き、教員に相談内容を報告しているようである。

また、授業内のガイダンスも担当しているとのこと。学習コンシェルジュをしていた大学院生が現在大学の非常勤講師となり、担当クラスの学生に対する情報検索ガイダンスを希望するという連鎖も生まれているという。

学生アシスタントへの応募理由は、「自分が学生アシスタントにお世話になったから」というものが多いそうである。学生の力を借りて学習支援をすることによって、学生がアドバイザーの立場になり、アシスタント自身の成長が促されている。図書館が学習を支援するとともに、学生個人の成長を支援する場となっていることが感じられた。

2013年5月24日見学 武蔵野プレイス

武蔵野プレイスは2011年にオープンした図書館機能も備えた武蔵野市の複合機能施設。様々な目的で訪れる幅広い年齢層の人達が、活動を通して時間を共有する快適な「場」となるよう工夫され、従来の意識を打ち破った様々な試みで全国的に注目を集めている。武蔵野プレイス館長の三澤和宏さんからお話を伺い、館内を案内して頂いた。

複合機能施設とは？

「複合機能施設」と称する武蔵野プレイスは、図書館機能のほかに、生涯学習支援機能、青少年活動支援機能、市民活動支援機能という4つの分野を支援する機能を併せ持っている。

これらが単に集まっているだけでなく、お互いに融合したり刺激し合って「機能」することで、各機能が活性化することが意図されている。多様な市民が自然に集まる地域コミュニティの基盤となる場＝プレイスを目指したということ。

駅前という立地の良さもあり、オープン以来入館者数は増え続け、80万人程度と見込んだ年間入館者数は、150万人を超えた。22時まで開館していることでサラリーマンも利用しやすく、各年齢層にほぼ均等に利用されているそうだ。私達が訪れた平日の午後、赤ちゃん連れの母親から、学生、年配の方々まで、幅広い年代の人達がそれぞれの場所で思い思いに過ごしている様子がうかがえた。



回遊式で出会いの連鎖を演出

館内を巡っていると、空間から空間への移動がスムーズにできて、館内を自然に回遊している気分になる。街路や広場をめぐる歩かのような感覚で、自分の居場所を見つけたり、思わぬ発見や出会いの連鎖で活動が活動と呼ぶ「場」となるのが狙いだという。書架やテーブル、椅子などの備品がどれも丸みのある優しい形なのは、すべてが人を包み込むような空間を目指したということ。ここは建物の外観も丸くて優しい形をしている。

市民活動・青少年の交流を支援

市民活動を支援するために設けられた大小5つのミーティングスペースでは、弁当を食べながらグループで活発に話し合いをしている様子が見られた。登録団体は、専用のロッカーやメールボックス、登録団体を紹介するファイルコーナーも備え、関連資料も充実している。これなら館内での一連の活動を完結させることもできる。

20歳以上の施設利用ができない午後の時間帯だった青少年専用フロアも見学させて頂いた。ここは、ダンスや演劇ができるパフォーマンススタジオ、バンド練習用に、立派なドラムセットやキーボードを備えた防音のサウンドスタジオなどがあり、青少年同士の交流の拠点になっている。

長居したくなる図書館エリア

図書館エリアは、カフェやギャラリーなどと一体となっていて開放的。壁面書架を多く用いて広くてゆったりとした閲覧スペースが確保され、本棚の間を行き来して気に入った本を見つけたら、すぐに近くの椅子やソファで読むことができる。吹き抜ける構造で地下のフロアにも自然光が届き、明るく暖かな雰囲気。おしゃべりのできるラウンジもあって、長時間快適に過ごすことができる。

「こどもライブラリー」や「おはなしのへや」といった、子どもや赤ちゃんのためのエリアも充実していて、お母さんに連れられた赤ちゃんが、熱心に絵本に見入っていた。

図書エリアではスタッフによる本を紹介するポップが目を引き、「出会い」「発見」への働きかけが感じられた。

逆転の発想「にぎやかな図書館」

武蔵野プレイスのレイアウトで最も印象的なのが、1階エントランス前、フロアの中央にオープンなカフェがあること。カフェではBGMも流れている。中央は吹き抜けになっているため、BGMやカフェの食器の音、コーヒーなどの匂いが館内に広がることになる。シーンと静まり返った図書館ではなく、自然な音の効果を活かして、おしゃべりをして、子どもが多少騒いでも、他の来館者が気にならない「にぎやか」な環境を作り出し、居心地のいい空間づくりを演出しているという。同じフロアのギャラリーではコンサートを行うこともあるのだ。

これは例えば、町中のオープンカフェや公園のベンチなどで、お茶を飲みながら本を読むイメージ。カフェのすぐ隣にあるマガジンラックからお気に入りの雑誌を見つけてカフェで読むこともでき、夜になればお酒も飲める。



見学後、このカフェで20時過ぎまでグループでミーティングをしたが、館内を行き来する人達や、思い思いに雑誌を手に取り、眺めている人達などが自然に視界に入ること、居心地の良い開放感を味わった。

「館内静粛」や「飲食禁止」など、図書館では当然のルールだったものを緩くすることで、居心地の良い「場」を提供したかったようだ。従来の図書館では考えられない逆転の発想を持ってくることで、図書館に人を呼び集め、そこで自分の関心事や世代を超えた新たな「発見」「出会い」「交流」が生まれているという。

武蔵野プレイスが実現した居心地のいい「場」の提供が、人々に他者と関わろうとする心の余裕と他者への関心を生み、それが交流に繋がっていくのだろう。武蔵野プレイスが目指した地域のコミュニティの基盤となる場という構想の原点が実現されつつあることを実感した。

参考資料

- ・武蔵野プレイス パンフレット
- ・「アクションの連鎖」が起こる施設をめざして
(武蔵野市立ひと・まち・情報 創造館 武蔵野プレイス ホームページより)
- ・「パッション」第34号 金剛株式会社
- ・「ソトコト」第15巻第5号 木楽舎

2013年7月25日見学

帝京大学メディアライブラリーセンター

帝京大学メディアライブラリーセンター(以下、MELIC)は2006年9月に新館を開館した。今回の見学では、新館建築から6年後の2012年4月から4ヵ年計画で進められている読書推進プロジェクト『共読ライブラリー』を中心に館内をご案内いただいた。

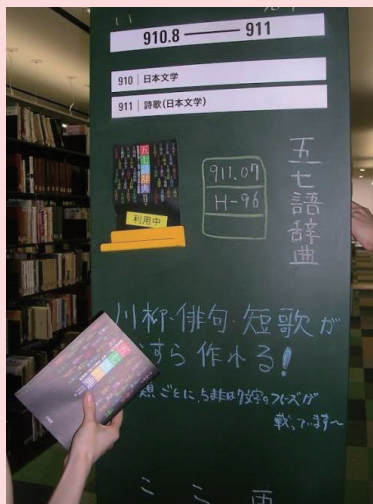
共読ライブラリー

[→サービス事例集 p.104 参照]

MELICは地下1階、地上4階建てであり、それぞれ BF:雑誌バックナンバー、洋図書のフロア、1F:貸出・返却、利用相談のフロア、2F:メディア・PC、学術雑誌のフロア、3F~4F:和図書のフロア である。

和図書のフロアでは一般書架の側板を黒板仕様にした『カスタマイズ書架』が並んでいる。

最も重要視したのは、実用性。そのため、側板を含め分類サインや請求記号もすべて取り外し可能になっていて、「いきなり出現することも」「いきなり消えることも」できる。



『カスタマイズ書架』では、職員や共読サポーターの学生からのメッセージを黒板に書いている。

これには、その棚から1冊本を選んできて、『ここにはこういう本がありますよ、どうぞ手にとって見てみてください』と気軽に紹介するねらいがあり、実際に、あまり利用されないような資料もここに展示するとすぐに貸し出されるとか。

ポイントは、『面』で展示すること！



なんとブックトラックも黒板仕様に！
使い勝手がよいので、様々な場面で活躍するそう
うだ。

プロジェクトが進むごとに、
次々に新たな黒板本棚が登場
している。
たとえば、のれんが掛かってい
る黒板本棚。
外から見たときに、全部丸見え
になっているより少し見えて
いる方が『なんだろう？』
と入りやすい。そんな視覚効果
があるとのこと。



第 15 回図書館総合展出展

2 年目となる図書館総合展出
展では昨年よりもパワーアップ
した黒板本棚を再現。

展示ブース内にて 1 日につき
3 回の「書棚ワークショップ」
が開催され、来場者は実際に共
読ライブラリーで行われている
書棚づくりを体験でき、大いに
盛り上がった。



何か新しくサービスを始めたい、という点から『共読ライブラリープロジェクト』
を参考にしようとする、規模の大きさや黒板書架のイメージから、実現するには
程遠いように感じてしまいがちだが、「もっと本と親しんでもらいたい」「そのための
仕掛けを作りたい」という「共読」の基本的な考えはどこの図書館でも取り入れ
られるものだろう。

このスタートブックが、自館に合ったそれぞれの『共読』を見つけるのに役立つ
ものになれば、とあらためて士気を高める見学となった。

2013年7月25日見学 明治大学和泉図書館

明治大学和泉図書館は、和泉キャンパスのシンボルとして「入ってみたいくなる図書館」を目指して建設され、2012年5月1日に開館した。4階建の図書館は正門を入ってすぐ右手にある。主要な利用対象は、文科系6学部の1,2年生、大学院教養デザイン研究科、教職員。人文・社会科学系の資料を数多く所蔵する。

新図書館建設の要望が出されたのが2002年。2008年に新図書館建設が決定した。その後、図書館建設委員会のもとに「図書館専門部会」が設けられ、さらに2010年、実施設計の段階において各種ワーキンググループが専門部会内に設置された。そのメンバーで全国の図書館を見学しながら、「全国40大学図書館・公共図書館のイイとこ取り」をしたという。以下ではキーワード別に、そのポイントを紹介する。案内していただいた坂口雅樹事務長による印象的なコメントも所々に記載させていただいた。



施設・設備・サイン

[サービス事例集 p.30 参照]

エントランスホール

吹き抜けが広がり、開放感がある。「木がコンセプト」というとおり、木の質感が伝わってくる。

サロン

エントランスホール左手には軽食等を提供するサロン（カフェ）がある。営業終了後は自習室等で使える。

ホール

エントランスホール右手には、扉を介して国際教養大学（秋田）及び福武ホール（東大本郷）をイメージしたというホールがある。試験期は学生に開放している。

照明

3,4階はアルミ製のルーバーで外壁は全面ガラスを覆い、熱を吸収し、適度な反射自然光が入る。また、書架の天板には2本ずつ蛍光灯をつけ、アッパーライトで間接照明に。その理由はほんのりとした明るさと地震対策である。

空調

床空調を採用。天井はよりシンプルな木ルーバーに。ガラスウールを天井断熱に採用。

書架

地震時の図書転落防止のため、書架の棚板には4度の傾きをつけている。配架可能冊数は60万冊（うち40万冊は集密書庫）。3階フロアでは、進行方向に対して、斜めに書架を設置。すると進む動きに伴って書架が連続的に目に入ってくる。人を引き込む効果を狙っている。

時計・掲示板

館内に時計はない。入り口のデジタルサイネージにさりげなく表示されているのみ。



「あちこちに置くと時間を合わせる手間がかかるし、今はみんな携帯などで時間はわかる」。掲示板もトイレの前にあるだけで、見える位置にはない。掲示物の壁貼りもしない。必要に応じて、置き型サインやイーゼルを使っている。

館内放送

放送は緊張感が途切れるためなるべくしない。

デジタルサイネージ

49 台（うちタッチパネルは 20 台）を設置。グループ閲覧室の予約状況や、貸出用 PC ロッカーの空き状況、イベント案内など、リアルタイムで情報が反映される。

サイン

「BOOK MARK」をコンセプトにした、シンプルかつ目を引くサイン。トイレサインなどは絵文字サイン（ピクトサイン）であり、採用に際して図書館女性職員の感性が生かされた。



利用・サービス

地域開放

20 歳以上の杉並区民は利用できる（貸出も可）。世田谷区民からも要望があり提携を結んだ。杉並区民の利用は 1%とそこまで多くはない。また、1 月 7 月の試験期は入館できない。

睡眠

滞在型図書館を目指し、随所に快適な仕掛けが。「寝てもいい図書館。起きたら勉強してもらう」

飲食

飲食に関してはペットボトルのみ許可している。「人に迷惑をかけなければ何をしてもいい」という。食事は原則禁止にしているが、やや緩い感じである。

「さばけた図書館なんです。係員のエネルギーを無駄な労力を使うなら別の仕事をしてほしい。」

ブックシェアトーク

グループ閲覧室で、本という媒体を使って学生どうしが出会い語りあう場を提供した。現場には学生目線に近い若いスタッフが立ち会う。図書館が人をつなげることができるという好例といえるだろう。

カウンターサービス

同館には「サービス＝おもてなし」という姿勢がある。目線を合わせるために、カウンターでは立ってサービスをしている。

省力化

ノート PC の貸出にはロッカーを使用。グループ閲覧室の予約もすべて Web から。なるべく人手をかけない。また積層集密書庫（ブックタワー）6 層に排架している発禁本コレクション等の出納以外はすべて開架なので、出納業務はほとんどない。



最後に

「職員が元気になることで、利用者が元気になる。成功者はすべてこの順序で、この逆はない。職員同士で話すときも冗談を言い合ってリラックスする。職員のモチベーションが上がるのが図書館運営の最高の薬です」。

2013年7月25日見学 芝浦工業大学豊洲図書館

芝浦工業大学豊洲図書館は2006年4月に港区芝浦キャンパスから江東区豊洲キャンパスへの移転とともに開設された。地域開放が移転の条件だったこともあり、地域との連携を推進している。キャンパスには外と敷地を隔てる壁はなく、近隣住民が自由に入ることができるようになっている。その敷地の中でひときわ目立つ、凱旋門のような形をした「研究棟」の8階に豊洲図書館がある。以下にその館内をご紹介します。

赤丸コーナー



赤丸コーナーと企画展示

図書館入りロゲートを入るとすぐに目に入るのが、「赤丸コーナー」である。ソファラックが円型に配置されたこのコーナーでは、新着や企画展示などの図書がディスプレイされていて、本を手に取り、そのままソファに座って読むことができる。モノトーンを基調としたシンプルなデザインの館内で、このコーナーは特に注目を集める空間となっている。展示資料には、館員手作りのポップで図書の紹介をすることで、注目を集めるコーナー作りがされている。

視聴覚コーナーとグループ学習スペース

赤丸コーナーの奥には可動式の机と椅子が並び閲覧席と視聴覚コーナーがある。

閲覧席はグループ学習に使用されるほか、図書館主催の説明会などを行うこともあるという。建築作品を持参し、高さを変えられる机を利用してプレゼンをする学生など利用方法はさまざま！

視聴覚コーナーには大型のディスプレイと動かせるソファが備えられていて、何人かで一緒に見ることができる。ちなみにコーナーの奥側の窓からはスカイツリーが見えるそう！



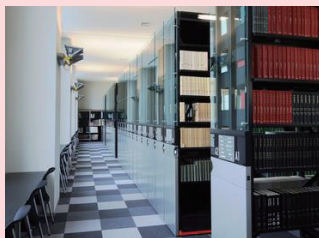
視聴覚コーナーと閲覧席

閲覧席と所蔵資料



閲覧席中央の様子

館内はワンフロアを活用した広々とした空間となっている。仕切りは無く、館内中央の閲覧席周りにある書架は3段と低いものを設置しているため、館内が広く見渡せる。更に天井の高さも4メートルほどあり、片面が全面窓なので開放感がある。背の低い書架の上では大型資料を広げて見ることができる。また、通路を挟んで工学系の専門書架があり、それぞれの棚一段の高さは、建築系



集密書架：企業の社史も充実している

に多い大型資料を縦に収納できるよう高めに設定されている。閲覧席の奥には集密書架があり、雑誌のバックナンバーも数多く保管されている。

学生アンケートの結果を受けてワンフロアになったということだが、資料を集約でき、上下階への昇降が不要なので移動しやすいのが利点である。コンパクトではあるが、必要な機能がまとまって備えられている印象だった。

資料については、主な利用者が工学部の学部学生と大学院生であるため、工学系の専門的な資料が充実している。専門雑誌の他、データベースの他、データベースの導入も積極的に進めている。データベースや図書は研究室で利用されることも多いそうだ。

茶室 芝浦庵

[→サービス事例集 p. 16 参照]

豊洲図書館の最も特色あるスペースを紹介したい。館内中央の一角にある和室の閲覧室「茶室 芝浦庵」である。畳スペースを設けている図書館はあるが、茶室は珍しいのではないだろうか。炉や水屋、床の間などが備わる本格的な造りである。

ももとは「茶室おこし絵図集」のような大型の資料を広げて見るのに畳が良いのではないかと、という利用者の声を受け、新館建築の際に和室を希望したところ、建築家から茶室が提案されたそうだ。移転前の図書館では大型の資料を見る際に、床に広げて座って見ている学生が多かったそうだが、ここでなら大型の資料や巻物などの長い資料も広げられ、ゆっくり座って見ることができる。また、一人暮らしの学生からも畳はなごむと好評のようである。

部屋の特徴を活かして、学生サークルのお茶会などのイベントにも活用されている。閲覧席との境目がガラス張りなので、ふらっと立ち寄った来館者にもイベントの様子が見え、興味をもってもらえるそうだ。中の様子は見えるが音は気にならないので、イベントが行われない時はグループ学習スペースとしても使用されるなど、多目的に活用されている。予約も不要なため、気軽に利用することができる。

茶室は、図書館全体のモノトーンで近代的な印象とは対照的だが、不思議と調和しており、豊洲図書館の中で象徴的な場所になっていた。



茶室から閲覧席を望む

芝浦工業大学豊洲図書館では、学生アンケートなどから利用者の声を積極的に取り入れた図書館づくりがされていた。また、職員の方々が普段から学生をよく見てニーズを把握しようとしている様子が感じられた。

大宮キャンパスの図書館では学生と連携し、サークル紹介と関連図書を展示する企画展示を定期的に行っているそうだが、豊洲図書館も他部署や学生と連携して、継続してできるイベントを今後企画したいということだった。新たなサービスを行う際に大切にしているのは、やはり「コミュニケーション」とのこと。連携する学生のほか、他部署の職員や教員とは、普段からできるだけコミュニケーションを取って信頼関係を築いておくことが、サービスを成功させる秘訣であるといえそうだ。

2013年9月24日見学

和光大学附属梅根記念図書・情報館

和光大学附属図書館は、大学創立時に発足後、1984年に地上4階・地下1階の「和光大学附属梅根記念図書館」として開館。さらに2009年に情報センターが統合し「和光大学附属梅根記念図書・情報館」となった。学生の多様な学習スタイルに対応した施設となるよう、2009年には3階フロアを改修されている。

コミュニケーション・ゾーン

〔→サービス事例集 p. 32 参照〕

メインエントランスがある3階をコミュニケーション・ゾーン、その他のフロアをスタディ・ゾーンとすることで、音のゾーニングをされている。

3階コミュニケーション・ゾーンにはイートインスペースのほか、PCが設置されているメディアサロンや、情報機器を利用したプレゼンの練習等が可能なプレゼンテーションルームが整備されている。

イートインスペースでは軽食・ペットボトル飲料などの飲食が可能となっており、館内の滞在時間の増加に繋がっているという。図書館資料、図書・情報館貸出PCの持ち込みは不可だが、すぐ隣のフロアがラウンジとなっており、一般雑誌や旅行ガイドブックなど軽めの資料を読むことができる。部屋の扉は常に開かれているが、騒音や臭いの苦情は出ていないとのこと。

人の出入りが頻繁なエントランスの近くにコミュニケーション・ゾーンを配置し、他階をスタディ・ゾーンとして静謐なエリアを確保することで、目的に適した学習環境の選択が可能となっている。



イートインスペース前のラウンジ

Let's Read Project

〔→サービス事例集 p. 60 参照〕

『Let's Read Project』は、学生が中心となり、本にまつわる多様なイベント・活動を行うプロジェクト。館内にはメンバー専用の「LRP ルーム」という小部屋があり、活動の際に利用している。利用時は「開室中」の看板を出し、ドアを開けて、活動を見学できるようにしている。自由に入室できるようにすることで、メンバーではない学生との交流も生み出されるという。



LRP ルーム開室時の看板

●見学ツアー

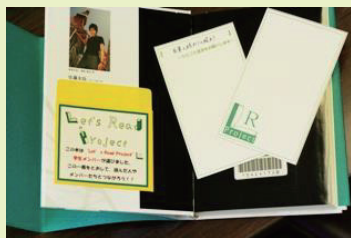
学外に出て、図書館や書店を訪問する見学ツアーも実施。今年度は代官山蔦屋書店を見学し、和光大学卒業生のスタッフにご案内いただいたそう。学生時代に図書館や書店の裏側、またそこで働く社会人や卒業生の姿を見ることは、メンバーにとって良い刺激となっていることだろう。

●選書ツアー

毎年実施している選書ツアーでは、選んだ図書の選書理由や、所蔵すべき理由をプレゼンし、購入の可否について1冊1冊合議を行なっている。開始当初は現在より選書冊数を多く設定していたが、学生が選書に時間をかけている様子を見て、負担にならない冊数にされたようだ。ただ闇雲に購入するだけではなく、1冊1冊が吟味・厳選されており、その本への思い入れや、購入動機が強いことが感じられた。

個人で自由に選書する他、分野ごとにメンバーを分けたグループ選書も行っている。グループで選書することにより、メンバー同士の交流が促され、先輩が後輩へアドバイスしている姿も見られるとのこと。

また、選書ツアーで購入した図書の展示、ポップやポスターの作成もLRPメンバーが実施している。選書ツアーで購入した図書には、学生が自由に感想を記入できるよう、見返しに感想カードが付されている。「本を通して人と繋がりたい」という思いを形にするため、とのこと。小さな工夫だが、本を通して人との繋がりを生む、見事な仕掛けだ。



選書した本に付けられている感想カード

『本を読もう!』・『本を楽しもう!』コーナー [→サービス事例集 p.84 参照]

『本を読もう!』は教員が学生に読んでほしい本をまとめた冊子。数年に一度発行されており、オリエンテーションの際に、新入生全員に配付しているようだ。

また、『本を読もう!』の職員版として『本を楽しもう!』も作成。図書館職員だけではなく、他部署の職員もオススメの本を紹介されているとのこと。紹介されている本は『本を読もう!』・『本を楽しもう!』コーナーにまとめて配架されており、貸出も可能。



本を楽しもう!コーナー

『本を読もう!』については、寄稿がある教員の学部により偏りがあるという課題もあったが、館内で教員へ直接声を掛けて依頼することにより、大分改善されたとのこと。図書館と情報センターが統合されていることを利用し、情報センター部門の職員にも声掛けをするよう依頼されたようだ。他部署と協働することで、図書館をあまり利用されない教員へも呼びかけが可能になったという。

きっかけづくり

館内の掲示物には、学生から募集した「ワコボン☆」「ワコ次郎」「ワコちゃん」といった図書館キャラクターが多く使用されている。また、主人公が大学生の図書を集めたコーナーを設置したり、文庫・新書コーナーの一角に図書館オリジナルブックカバーやしおりを置いたり、細やかな工夫が随所に施されている。『少しでも学生が読書・図書館に興味を抱ききっかけとなるように』という意識が感じられた。



オリジナルブックカバー・しおり

2013年9月24日見学 相模女子大学附属図書館

相模女子大学附属図書館は、創立90周年を記念して1992年に竣工された。20年以上経過しているようには見えない新しさを感じさせるコンクリート造りでモダンなデザインの図書館である。この図書館の特徴をポイントごとに紹介していきたい。

和室閲覧室

〔→サービス事例集 p.14 参照〕

図書館の一角に、和室閲覧室がある。12畳の和室には、座卓が二つ置かれている。窓からは外の木々が見え、明るい光が差している。かなり居心地がよいのだろう、見学時もこの部屋には絶え間なく学生たちが出入りし、思い思いに過ごしていた。居心地がよすぎて、寝転がってしまう学生がいるらしい。和室の周りには扉があり、閉めきることもできるそうだが、今は一部取り外され、常に開放されているため、気軽に入りやすい雰囲気がある。



和室閲覧室

ここでは、会話や、蓋付飲料以外の飲食はできないが、利用目的については制限していない。学習だけでなくサークル活動など多目的な利用も許可されているようだ。

会話と飲食が可能なラウンジ

〔→サービス事例集 p.12 参照〕

滞在型図書館を目指すこの相模女子大学附属図書館には、会話や飲食が可能なスペースも設けられている。「ラウンジ」と呼ばれるそのスペースも竣工当初に設けられた。ラウンジには、自動販売機、水道、ゴミ箱が備えられ、座り心地の良い椅子がある。複数はもちろん、一人でも食事を取りやすい。ここも学生にとって心地よい居場所となっている様子。



ラウンジの奥には一人掛けの席もある

設置のきっかけをお聞きしたところ、渋谷の松濤美術館にあるカフェをヒントに「図書館にもこんなスペースがあったらよいのでは」という職員の方の意見で設けられたそうだ。

持ち込む飲食物には制限がなく、汁物なども持ち込むことができるが、汚損防止のため館内資料の持ち込みは禁止している。ここはエレベーターホールのある仕切られた部屋なので、閲覧室へのおいや音の漏れはなく、床はフローリングなので、汚れも目立たないような造りになっている。

学習スペース

次に学習スペースをご紹介します。相模女子大学では閲覧室のほかに、ラーニングコモンズとして3つのグループ閲覧室を備えており、ノートパソコン、プロジェクタ、スクリーン兼用のホワイトボードの貸出を行っている。グループ閲覧室はガラス張りで個

室となっているため、ゼミや図書館のガイダンスで使用することも多いようだ。そのほかに、5名まで入室できる共同視聴室が2部屋あり、そこでは視聴覚資料を利用しながらのグループ学習ができる。

パソコンを使用した学習ができるスペースとしては、パソコンコーナーと呼ばれる部屋と、ラウンジ、各フロアのエレベーターホール周辺がある。ホール周辺は人通りが多いのだが、利用者も意外に多くいて、周りに音がある方が集中できる学生にとっては人気の場所のようだ。



エレベーターホールのパソコンコーナー

学生サポーター

学生との活動についても触れてみたい。相模女子大学では、積極的に学生と協同して、様々な取り組みを行っている。その一つが「学生サポーター」と呼ばれるボランティアの学生たちである。2013年9月現在27名が登録しており、図書の配架や新着図書コーナーなどのポップ作成に加え、今年度は選書ツアーもおこなったとのこと。学生サポーターになるには、特に制限などはないため、部活と掛け持ちしている学生もいるようだ。訪問した際には、選書ツアーで購入した図書が企画展示となっており、各自選書した図書にポップを付けて紹介していた。選書ツアーの展示本のうち、何冊かは既に貸出中で、同じ学生の目線で選んだ図書は人気があるようだ。



選書ツアーの企画展示



新着図書コーナー

学生サポーターの募集方法とそのコツをお聞きしたところ、新年度の図書館ガイダンスの最後に活動を紹介し、サポーターをしている学生に直接話をしてもらったところ、認知度が上がり、希望者が増えたのだという。

学生サポーターのほか、図書館報「さがみ」の企画編集を学芸学部メディア情報学科の学生に任せると、相模女子大学ではサービス面において学生の参加が目立っていた。

相模女子大学附属図書館は居心地の良い空間作りを先駆けて行っている。滞在型図書館を実現するには、居心地の良さは重要な要素である。最近は量の閲覧室や、会話や飲食が可能なスペースを設けている図書館は多いが、20年以上前から設置している大学は珍しいのではないだろうか。

新しいサービスを実施するにあたって反対はなかったかという質問をした際の「何かを始める時は、まずやってみて、問題が出たらその時に変えればよい」という言葉が印象的だった。始める前にリスクを考えることはもちろん大切だが、まずは始めてみるということが、新しいサービスを生み出すことに繋がり、そこから図書館の活性化に繋がるのではないだろうか。相模女子大学の活気ある図書館を見せていただいてそう感じた。

コラム③ 24時間開館を導入して

東海大学代々木図書館では2004年度から24時間開館を実施しています。夜間から早朝は身分証による個人認証で出入りし、図書の閲覧、貸出返却などができます。

職員不在時の対応として9台のカメラで24時間録画し、守衛所からの監視を行っています。当館は2フロアの小規模な館で、利用者は当キャンパス所属の法科大学院生と教職員に限られているため、幸い大きな問題はありませんが、円滑な運用には学生のモラルに頼る面もあります。

入退館システムなどの導入費用は法科大学院開設時の補助金で賄われましたが、24時間照明や機器を稼働させるため光熱費がかかりますし、エアコンの修理が早い段階で必要となるなど、メンテナンス費用がかかるといったデメリットもあります。しかし学生にとっては24時間図書館を利用できることは、やはり大きなメリットです。学部学生や、他キャンパスの学生からも要望がありますが、社会環境や学生のモラルが大きく変化している中で、更にサービスを継続・拡大するか、中止するかは、費用対効果もふまえながら今後検討されることになるでしょう。



入退館システム
カードリーダーに身分証を通すと、
ロックが解除されドアが開く

コラム④ 始めることに含まれるもの

本冊子では「はじめてみよう！図書館サービス・スタートブック」ということで、サービスを「始める」ときに焦点をあてて調査を実施しました。この際、例えばサービスを「やらない」といった視点や意思については、直接の調査対象とはしませんでした。

しかしながら、サービスを始めて続けていくためには、当然、限りあるさまざまなリソースを駆使することになり、それに見合った効果や成果が問われます。そのため、サービスは常にそれを「変える」視点や「やらない」視点とどこかで接点を持ち続けているはずです。あるサービスを縮小したり廃止したりすれば、それに投入していたリソースを別のサービスに振り向けることができます。

調査では、どんなきっかけで始まったのか、どんな工夫や苦労をしたか、また今後の課題などについても回答をいただいております。これらの回答に、始めて続けるだけに留まらないさまざまな観点のせめぎあいを読み取ることができると思います。それぞれのケースにおいてどんなせめぎあいがあるのか、そんな観点からも事例集をご活用いただけたら幸いです。

まとめ・提言

空間を活用する

多様化するニーズと図書館の快適性

図書館は、本を借りたり、静かに学習するだけでなく、グループ学習の場、ゼミやサークル活動の場、一息つける場など、様々な目的に合った滞在型の空間作りを目指すようになってきた。新しく建てられる図書館では長時間滞在することを念頭に、最新の機器や備品などの機能面だけでなく、リゾートホテルのようなインテリアを取り入れて、快適でくつろげる空間を提供している例も見られる。

既存の施設でも、パーテーションによるゾーニングや、館長室など事務スペースから利用者スペースへの改装を行うなど、ニーズの多様化への対応が見られる。ソファを置いたり、携帯電話の利用や飲食可能なスペースを設けるなど、利用者にとって居心地の良い空間を提供する努力は多くの図書館で行われている。

滞在型の空間を目指す図書館の状況について、当分科会で行ったホームページを元にした全国の大学図書館の調査では、以下のような例が見られた。

- ・ 飲食・会話・携帯電話等ができるスペース
- ・ 利用目的別のゾーニング
- ・ 和室
- ・ くつろぎ・快適グッズの貸出し
- ・ BGM
- ・ リクライニングチェア、ソファ

飲食やおしゃべりは、旧来の図書館では禁止されていたことであり、グッズの貸出やソファなども必要性は低いものとされていた。滞在型の図書館には、これまでの図書館では重視されていなかった「快適性」が欠かせない条件となっている。このことは、調査票回答で寄せられた例からも窺うことができる。

ここでは、調査した中で最も多くの事例が集まり、多くの図書館で実施可能と思われる「飲食エリア」を例に、滞在型のくつろげる空間作りについて検討して行きたい。



明治大学和泉図書館

飲食エリアの実施例と現状

飲食エリアの設置は図書館が積極的に取り組むべき課題として認識されるようになってきた。調査票では、きっかけについて「図書館で長時間快適に過ごしてもらいたいため」という回答が最も多かった。学生食堂などが閉まっている夜間や休日の開館が増え、飲食エリアのニーズは高まっている。

飲食エリア設置の事前準備として、他大学の事例集めやセミナー参加など、広く情報を集めたり、教員を含めたワーキンググループを設立したという回答がみられた。全学的な合意形成に苦労したという回答も2件あり、事前の準備が大切であることが窺える。

実施に当たっては、臭いや汚れの心配から、床材や空気清浄機などの施設面の対策も必要とは思われるが、「お金をかけることなく、既存の備品をうまく使ってお洒落な雰囲気を出した」(九州看護福祉大学附属図書館)という回答や、費用はゼロという回答も4件あり、工夫次第では飲食エリアの設置は難しいことではなさそうだ。

飲食エリアができたことで図書館の利用者が増える効果だけでなく、他の場所で飲食している利用者を飲食エリアへ誘導できることをメリットに挙げた回答が5件あり、図書館側にとってのメリットもあることがわかる。

飲食エリアを設けている図書館は増えているが、「飲食」の「食」まで許可している図書館はまだ限られた数に留まっている。滞在型の図書館が叫ばれ、殆ど費用をかけずに飲食エリアを設置している事例もありながら、図書館で飲食できるのが「常識」になるには、まだまだ時間がかかりそうなのはなぜだろうか。この問いについて考えるうえで、自館に飲食エリアの設置を検討していた私達研究分科会のメンバーからの以下の報告を紹介しておく。

図書館内のリフレッシュエリアを飲食可能とする提案を行ったところ、図書館の多くの職員から猛反対に遭い、結局断念せざるを得なかった。反対理由として「図書館は資料を使う場所で、食べる場所ではない」「利用者阿ることばかりが正しいことではない」といった、旧来の図書館像を持ち出した意見が若い世代からも多く上がった。その後、他大学の事例を集め、懸念材料として挙げたニオイの問題の実地検証を行うなどで提案に理解を求めたが、反対意見は殆ど変わらなかった。



リフレッシュルーム（東京女子大学図書館）



武蔵野プレス

滞在型図書館を実現する課題と展望

上記の報告は、従来のイメージとは異なる試み始めることの難しさを物語っている。これは飲食エリアに限らず、新しいことを始めようとする際に常にぶつかる難題でもあるが、旧来の観念から意識を解放しない限り、図書館に時代に即した快適性を追求することは難しい。調査票の回答や実際の訪問時に、この問題への解決につながるようなコメントが寄せられた。

「サービスとは提供するものではなく生み出すものであり、学生の活動を支援するのがサービスの一つのありかたである」（明治大学和泉図書館）

「ちょっとした行動力です」（九州看護福祉大学附属図書館）

「まずやってみて、問題が出たらその時に変えればよい」（相模女子大学附属図書館）

滞在型の図書館が志向されている状況はわかっているが、そのための行動をなかなか起こすことができない図書館は多いはず。一方で、レンタルビデオ大手のTSUTAYAに民間委託した武雄市立図書館のように、新しい試みが功を奏して、劇的な利用者増を実現した公共図書館も出現した。これについては賛否両論あるが、こうした試みが大きくクローズアップされることについて毎日新聞紙上（13.8.28朝刊）で武雄市市長が語った「世の中にろくな図書館がないからですよ。一部の人が固定観念で「図書館はかくあるべし」と唱え、カビ臭いイメージになっています。」という言葉には、利用者のニーズに立った新しい図書館空間づくりを考えていくうえでのヒントが含まれているのではないだろうか。

学生と協働する

学生との協働の項目では、全部で11館からの回答があった。ここでは以下3系統のグループ別に内容を確認していきたいと思う。

読書推進型

今回、読書推進型のサービスは、全学的なプロジェクトとしての読書推進活動と学生スタッフによる読書推進活動の2つに分けられる。

全学的なプロジェクトとしての読書推進活動では、図書館発信により職員と学生が連携を取り、読書会、講演会、感想文や創作文のコンクールなどの各種イベントを企画・運営し、ポイントサービスを導入している館もある。

メリットとしては、学生にとっては文章力の向上や読書傾向の広がり、図書館側にとっては数値として貸出数や入館者数の増加、創造的な活動から学生の潜在的な能力を引き出すきっかけとなっていることが挙げられる。その一方課題としては、コンテストやコンクールなどの応募参加数が減少していることが挙げられており、より多くの学生を巻き込むことの工夫や魅力あるサービスを模索することが重要と考えられる。

学生スタッフによる読書推進活動では、サービス内容は選書ツアーや図書館ツアー、テーマ展示や広報誌作成など、様々な取り組みが行われている。いずれの実施館も学生による継続的な主体性を持った活動を引き出すことが重視されており、学生主導の中、いかに職員が関わっていき、学生スタッフのモチベーションを上げていくのがポイントとなるであろう。上級生から下級生への研修や学生同士でミーティングを行わせている点が工夫点である。

メリットは学生スタッフ自身の課題発見や解決能力、コミュニケーション能力の向上であったり、図書館への理解力の高まり、学生目線によるサービスの改善・実施、利用者として来ている学生への刺激など、多岐にわたっているがいずれも学生にとって、大変有意義な活動となることが見込まれる。

学生スタッフに主体的に動いてもらうためには図書館側の準備に大変な労力と時間がかかることがわかる。その一方「学生と一緒に働くのは楽しい」という職員側の声も、大きく取り上げていきたいと感じた。

学習支援型

昨今、ピアサポートが重要視されてきており、そのサービスのひとつとして大学院生によるライティングサポートやティーチングアシスタントが挙げられる。メリットとしては、職員とは異なる学生目線でのサービス実施により、職員に対しては敷居が高いと感じる相談なども気軽にしてもらえることが魅力である。また大学院生の専攻分野と関連性の

高い学部学科別にサービス対応できることにも着目したい。

今後このようなサービスを実施する場合は、図書館で行う意義とコンセプトを明確にすることが重要である。実施中の図書館でも、未だ模索中で学生の相談数などの伸び悩みを持つところが多数あることが考えられる。そういったときに学部や授業との連携を活性化させ、学生のニーズに合わせて柔軟に対応していくことが重要である。その中で、均一的なサービスを行うための大学院生に対する研修であったり、密なコミュニケーションを行い、大学院生へのサポート体制を強化することも行なっていかなければならない。

ボランティアへの単位付与

ボランティア関連の授業科目ができたことをきっかけに、授業の空き時間を利用してボランティアを行ってもらい、それに対して単位を付与するサービスを行っている（現在、2012年度以降入学の学生に対しては、カリキュラム変更に伴い制度が廃止となっている）。

この取り組みに対するポイントとしては、なかなか難しい授業やカリキュラム、それらを担当する他部署との連携を行っているという点である。一方、カリキュラム変更に伴う制度の廃止などの問題もあるが、全学的な取り組みとして行えることが大きなポイントであろう。学生の利用促進につながり、また職員側では、普段学生にはカウンター職員しか知られていないということへの気づきがあったことがメリットとして挙げられている。これから導入を検討する図書館で学生アルバイトが同時に導入されている場合は、ボランティアとの業務の棲み分けをきちんと行うことが重要である。

教員と協働する

教員との協働は、大きく4つのタイプに分けられる。その4つとは、①「資料を介した協働」、②「空間を介した協働」、③「授業を介した協働」、④「連携の深化」である。それぞれのタイプごとに、そのメリットや課題として挙げられたことについて概観する。

資料を介した協働

事例としては、教職員が学生にオススメする本をまとめて紹介する冊子を作ったり、そのオススメ本を読書課題として感想文のコンクールなどを実施する、などの取り組みがある。きっかけの例としては、業務見直しの際に広報業務を見直した、という始まり方や、他キャンパスでの取り組みをアレンジして始めたという例などがある。メリットとしては、教員が関わることによる学生への強制力や、興味喚起、また、教員と図書館員とのつながりのきっかけになるという点がある。

なお、サービスの規模が拡大するにつれ、関心の薄い学生や教員にどう関わってもらおうかという問題も出てくるため、より効果的なサービスとなるような工夫が求められる。アドバイスとしては、企画に際して大学の特性を考慮することや、普段から協力してもらえような関係づくりをすること、といったことが挙げられている。各大学ごとのミッションに即した取り組みを構想することにより、課題である予算やマンパワーを獲得することがポイントだといえる。

空間を介した協働

このタイプでは、教員の活動に図書館の場所を使ってもらうという、いわば「場所貸しタイプ」のサービスが展開されている。きっかけの例としては、教員からの相談や発案に対応する形で始めたというものがある。メリットとしては、教員の視点も踏まえて図書館の資料、空間、機能を再検討できるということが挙げられており、また、スペースそのものを教員に周知できる、ということもある。

連携の目的と必然性の明確化、教員の活動時間が館員の勤務時間外になる場合があること、などが課題として挙げられている。アドバイスに「教員の要望そのままではなくエッセンスを聞き出す」ということが挙げっていたように、形としてわかりやすい取り組みである一方で、形だけとならないような目的意識の共有が必要となる。

授業を介した協働

このタイプでは、情報リテラシー教育の科目の中で図書館員が講師として参画したり、授業のなかで資料紹介を図書館員が担当するといったサービスが行われている。きっかけ

としては、図書館からの発案が目立っている。

メリットとしては、情報収集を授業課題に即して位置づけることができる、図書館を利用しない学生にも図書館について周知できる、教員の持つ図書館へのイメージを変えることができる、などが挙げられている。今後の課題としては、授業課題により密着した具体的な事例紹介、学生が主体的に取り組めるような進め方、連携する教員に限られる傾向にあることの改善、といったことが挙げられている。

アドバイスとしては、企画の段階で、成績評価を誰が行うかなど、明確にしておく、情報リテラシー教育の重要性に理解のある教員に協力してもらうとよい、などが挙げられている。

連携の深化

このタイプは、これまで挙げたテーマのいわば総合型といえる。取り組みは大学により異なるが、選書、ゼミガイダンス、授業資料紹介などを包括して、「教員と協働する図書館員」というコンセプトのもとに活動が行われているといえる。

中期計画や将来計画のなかで構想されたことがきっかけという事例が示すように、多面的な協働の目的を明確にする計画性が求められる。メリットとしては、大学院生や教員の資料の内容についての専門性を、図書館運営に活用できることが挙げられている。授業やライティングの流れに、図書館資料の活用を組み込んでいくことができ、また、教員が図書館員を個人として認識し、コミュニケーションが円滑になる。

アドバイスとしては、教員に連絡するときは部署名だけでなく個人名も出す、業務で得たつながりを活かして教員に「+α」の情報を提供していく、といったことが挙げており、常に更なる協力体制の構築を目指す姿勢が求められる。

以上、4つのタイプいずれにおいても、まずは実施する目的を明確にしてサービスや広報を企画することが大切だといえる。

それぞれのタイプのサービスで得た教員とのつながりをその先につなげていくことが、多面的な波及効果、連携の深化につながっていく。自館の中長期計画と調整しながら、確実に協働・連携を実行し、図書館職員としての能力を高めていくことが求められているといえる。

他部署・他機関等と協働する

当初、「他部署との協働」というカテゴリーを設定して事例調査を行ったところ、他部署にとどまらず他大学図書館との協働や、全学的な協働に加え、卒業生など、広義における自館の外での活動や仕組みと連携する事例も集まった。以下では協働の相手ごとに3タイプに分けてポイントを紹介する。

他部署との協働

このタイプでは、まず就職支援を担当する部署との協働が多くみられた。内容としては、就職支援型のデータベースガイダンスや、読書推進などがあり、きっかけとしては図書館による発案が多くみられた。他に、学習支援系の部署からの発案に対応した形で、大学院生による学習支援を提供している事例もあり、形態はさまざまである。

このタイプのメリットは、効果的な人的サービスの提供、資料の利用促進である。

いっぽう課題としては、カリキュラムへの組み込みの必要性、開催場所の確保、効果的な宣伝方法などが挙げられている。ラーニングcommonsが図書館の外にも出来たという事例では、他部署との差別化も課題になっている。

アドバイスとしては、日頃からの関係づくり、図書館からの積極的な働きかけといったことが挙がっており、組織体制による制約をコミュニケーションにより解決しているということができる。

他館との協働

このタイプは、複数の他大学の図書館と協働してサービスを展開している。企画としては、読書推進が多く、各館特有の資料や地域性を活かした活動が展開されている。きっかけとしては、大学認証評価への対応や、大学を対象とした文科省の競争的資金、協会団体の助成事業に関連したものなどがあり、外部資金の活用という面からも注目される。

事例としては、医療情報の提供をテーマにした公共図書館との協働や、秋の読書週間に九州地区の大学図書館で行われている読書推進型のキャンペーン企画、北海道地区の大学図書館による蔵書交換展示といった協働がある。

本来のサービスとの兼ね合いや、事業の実施規模といった課題もあり、こうした取り組みは気軽に始めるのは難しいといえそうだが、実施した館からは、人的ネットワークの形成や、職員のスキルアップ、資料の利用促進といったメリットが挙げられている。

アドバイスには、各館・各地域の特色を活かすこと、協働において何を提供したいかのポリシーを持つこと、などが挙がっており、目的意識の共有や、大学図書館の公共的な側面について意識することもポイントだといえる。

その他の活動主体との協働

上記の他にも、全学的な協働や、卒業生との協働など、学生・教員・他部署といった枠組みに収まりきれないかたちでの協働がみられる。利用者アンケートの活用やシラバスとOPACの連携なども、狭義の協働には収まらないが、図書館と他の活動主体との接点を活用し、サービスの効果を高めることができる。

きっかけの一例としては、大学全体での教養教育の再構築があり、そうした文脈においても図書館の機能が活用される可能性があることがわかる。メリットの一例としては、サービスの全学的な位置づけを明確にできるということが挙げられている。これは逆に大学側からみれば、図書館のサービスが図書館内だけで完結せず、学内で効果的に機能していることの現れということになるのではないだろうか。

他部署・他機関等との協働に関しては、組織体制が大学ごとに違うため、大まかな一般化は難しいが、人的なサービスは組織体制による制約を受けてしまいがちな領域であることは確かだといえる。その制約を、他部署や他大学などと協働しつつ変えていくという意識を持ち、効果的なサービスを生み出すためのきっかけを作っていくことが求められる。

●終わりに

2008年に出された中教審の答申で、国際的な水準に適合しうる大学教育の質保証が唱えられて以来、学修時間の質と量の確保のために学修環境を整備しようとする大学にとって、図書館が持っている機能を活用することが、大きな意味を持つようになってきた。

こうした動向のなかにあって理念だけが先行してしまうと、空間の活用や、学生や教員をはじめとする他の活動主体との協働は、ともすれば形だけになってしまいかねない。また逆に、理念なしに実施するとその場かぎりになって継承されないという可能性もある。

そうした中で、サービスを提供することの目的や使命を見定め、少しずつでも確実な効果を積み重ねていくという意識をもってサービスを提供し、始めていくということが、求められているのではないだろうか。

編集後記

このスタートブックを編集しながら感じたのは、サービスは日々変化しているということです。2012年度に調査した内容から変わっているものがあり、現時点では実施しているけれども、今後もずっと続けるかどうかはわからない、といった声も聞かれました。

サービスは館の規模や事情によって、実施できるものとできないものがありますが、ここではとてもユニークな取り組みから、ちょっとした工夫で実現できるものまで幅広く取り上げました。その実現までに苦労したこと、工夫したことを知ることで、新たなサービスを始める際の参考になるのではないかと思います。このスタートブックを皆様の館でも役立てていただければ幸いです。

2012年度に6名のメンバーでスタートした当分科会は、2名中途入会がありました。人事異動や職場の人員不足からメンバーが減り、最後は実質5名での活動となりました。メンバーが減る中で、通常業務を行いながらの作業は大変な面もありましたが、無事完成にこぎつけることができました。

お忙しい中、ご協力いただいた全ての皆様に心より感謝申し上げます。

パブリック・サービス研究分科会

2012/2013年度メンバー

太田 優未（立正大学） 奥井 翔太（文化学園大学）
鴨下 歩美（大正大学） 高島 豊（獨協大学）
田中 優美（駒澤大学） 富樫 早苗（東海大学）

Special Thanks

加藤 好郎（慶應義塾大学）
高橋 典子（日本体育大学）
福庭 規子（上智大学）

はじめてみよう！

図書館サービス・スタートブック

2014年3月31日 第1版第1刷発行

非売品

編集／発行 私立大学図書館協会 東地区部会研究部

2012/2013年度 パブリック・サービス研究分科会

印刷製本 キンコーズ・ジャパン株式会社

Printed in Japan 2014